

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）

拒絶過敏性の認知行動的特徴と
抑うつ気分への影響

Influence of cognitive-behavioral features of
interpersonal rejection sensitivity
on depressive mood

2016年7月

早稲田大学 大学院人間科学研究科

巢山 晴菜

Haruna, Suyama

研究指導教員： 鈴木 伸一 教授

目次

第1章 抑うつおよび拒絶過敏性に関する研究動向と課題	1
第1節 抑うつ	1
第1項 はじめに	1
第2項 抑うつ	2
第3項 抑うつの発生・維持に関する諸理論	3
第2節 拒絶	10
第1項 対人ストレスとしての拒絶	10
第2項 拒絶の定義	11
第3項 拒絶に関わる理論および拒絶が個人内に及ぼす影響	13
第3節 拒絶過敏性	18
第1項 心理学における拒絶過敏性	18
第2項 精神医学における拒絶過敏性	19
第3項 拒絶過敏性の認知行動的特徴を説明するモデル	22
第4項 拒絶過敏性の測定方法	28
第5項 拒絶過敏性と他の類似概念との異同	31
第4節 本研究の目的	32
第1項 従来の研究における問題点の整理	32
第2項 本研究の目的と意義	34
第5節 本研究の構成	36
第2章 抑うつ研究における拒絶過敏性の重要性	39
第1節 本章のねらい	39
第2節 本邦における拒絶過敏性の特徴の検討【研究1】	40

第 3 節	拒絶過敏性が抑うつに与える影響の検討【研究 2】	53
第 4 節	本章のまとめ	64
第 3 章	拒絶に対する恐れが被拒絶場面における気分を与える影響の 検討	66
第 1 節	本章のねらい	66
第 2 節	Rejection sensitivity model の実証的検討【研究 3-1】	67
第 3 節	拒絶に対する恐れと Rejection sensitivity model の各構成要 素の関連の検討【研究 3-2】	83
第 4 節	本章のまとめ	97
第 4 章	拒絶に対する回避的態度が気分を与える影響の検討	99
第 1 節	本章のねらい	99
第 2 節	拒絶阻止の行動の種類 of 検討【研究 4-1】	100
第 3 節	拒絶阻止の行動と気分の関連の検討【研究 4-2】	105
第 4 節	拒絶に対する回避的態度と拒絶阻止の行動，気分の関連の 検討【研究 4-3】	122
第 5 節	本章のまとめ	133
第 5 章	総合考察	137
第 1 節	本研究で得られた成果と臨床的示唆	137
第 1 項	拒絶過敏性の特徴による対人ストレスの理解	140
第 2 項	認知行動的観点からの拒絶過敏性の再理解	141
第 3 項	拒絶過敏性を脆弱性要因に据えたストレス生成モデルの観 点を取り入れた抑うつの理解	144
第 4 項	拒絶過敏性の認知行動的特徴の再理解に基づいた抑うつの	

心理的援助の示唆	144
第5項 拒絶過敏性に焦点を当てた抑うつの予防的アプローチの可能性	148
第2節 今後の課題と展望	151
第1項 取り上げる要因について	151
第2項 相手との関係性の影響について	152
第3項 拒絶阻止の行動の強化子について	152
第4項 拒絶過敏性，対人ストレス，抑うつの双方向性や相互作用について	153
第5項 臨床的妥当性について	154
引用文献	156
謝辞	168
付録	

第1章 抑うつおよび拒絶過敏性に関する研究動向と課題

第1節 抑うつ

第1項 はじめに

抑うつ研究の文脈において、対人関係におけるストレスの影響がしばしば論じられてきた。また、うつ病の臨床研究においては、そのリスクとなるパーソナリティ特性として、対人ストレスのなかでも他者から拒絶や軽蔑をされることに対する過敏性が「拒絶過敏性」と定義され、うつ病の罹患リスクとなることが指摘されている（Ayduk, Downey, & Kim, 2001）。

しかしながら、拒絶過敏性はパーソナリティとされていることから、拒絶過敏性を扱った研究はそのほとんどが疫学的調査であり、拒絶過敏性自体の維持や抑うつに至るメカニズムに関する研究はなされておらず、これまでのところ治療の文脈においては注目されてこなかった。そのため、抑うつ発生のリスクとなった対人関係における脆弱性に対しては、アプローチがなされてこなかったと考えられる。実際に、うつ病休職者を対象とした認知行動療法の前後で、うつ症状の改善は認められた一方で、対人関係を含む職場復帰の困難感は低減しなかったことから、さらなる支援の必要性が述べられている（田上・伊藤・清水・大野・白井・嶋田・鈴木, 2012）。つまり、対人関係に対する脆弱性の改善に貢献できる基礎的な知見を収集することが重要である。そこで本研究では、抑うつリスクとして対人関係における脆弱性である拒絶過敏性に着目

し、拒絶過敏性を認知行動的に捉え直すとともに、拒絶過敏性が抑うつに与える影響に関する基礎的研究を行う。

第2項 抑うつ

坂本（1998）は、抑うつには、気分としての抑うつを指す「抑うつ気分」、気分、意欲、思考、身体といった心身のさまざまな症状により構成される症状のまとまりを指す「抑うつ症候群」、そして疾病単位としての「うつ病性障害」の3つの段階があり、うつ病の診断基準に満たないものから臨床対象となる状態までが含まれると述べている。

うつ病に罹患した場合には、本人が経験する心理的苦痛に加えて、(1)家族・社会的役割機能の不足、(2)職業における生産性の低下、(3)薬物乱用や喫煙といった他の不適応的な問題のリスクの増大、(4)医療費問題など、さまざまな弊害が生じることが指摘されている（たとえば、Gillham, Shatte, & Freres, 2000；Kessler, & Frank, 1997）。そのため、軽度の抑うつ状態に焦点を当てた予防的アプローチの重要性が指摘されている（及川，2009）。

抑うつに対する予防的アプローチが重視される時期として、学業や対人関係、職業選択といったさまざまなストレスイベントを経験する機会が多く、発達のにも自己への内省が高まる時期であることから、大学生を中心とする青年期が挙げられている（坂本・西河，2002）。また、この時期は、抑うつを経験する割合が高まる時期であり、軽度の抑うつ状態であっても心理社会的障害と関連しやすいこと（Harrington, & Clark, 1998）、さらに、この時期に抑うつを経験した者のなかで、のちに診断基準を満たすうつ病に至る者が少なくないことが指摘されている（Munoz, Mrazek, & Haggerty, 1996）。なかでも抑うつ気分は、最

も多くの者が経験する可能性が高く（坂本，1998），うつ病の重要な予測因子と考えられている（Clarke, Hawkins, Murphy, Sheeber, Lewinsohn, & Seeley, 1995；Harrington, & Clark, 1998）。

そこで，本研究においては，健常大学生の抑うつ気分を取り上げ，そのリスク要因として拒絶過敏性が果たす役割について実証的な検討を行う。

第3項 抑うつ の発生・維持に関する諸理論

これまでの研究において，抑うつに関連する要因についてはさまざまな研究がなされ，理論やモデルが提唱されている。そしてそれらのほとんどは，「素因ストレスモデル」（Figure1-1；たとえば，Ingram, Miranda, & Segal, 1998）に該当する。素因ストレスモデルは，抑うつ の発生には，抑うつに対する何らかの脆弱性を有する者がストレスとなる出来事を経験すると，それをきっかけに抑うつに陥ることを仮定したモデルである。このモデルにおいては，抑うつが発生するためにはストレスフルな出来事への遭遇が必要であり，そのような出来事を経験しなければ，脆弱性（素因）を有していたとしても，抑うつは生じないと考えられている。つまり，ストレスイベントとなる環境要因と，脆弱性となる個人内要因との相互作用が仮定されている。

従来 の抑うつ研究において取り上げられてきた変数の代表的なものとして，抑うつスキーマ，原因帰属スタイル，自己注目といった認知的要因が挙げられるが，これらは，素因ストレスモデルにおける脆弱性となる個人内要因であり，抑うつに関するこれまでの先行研究においては，素因ストレスモデルに基づく発生機序の検討が盛んに行われてきた。

たとえば，Beck の認知理論（Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979；坂

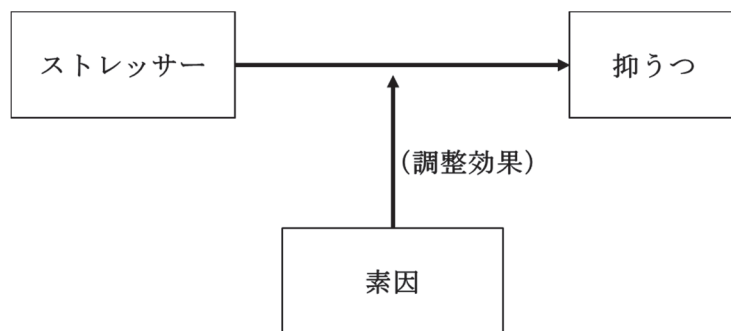


Figure1-1 素因ストレスモデル

野監訳, 2007) においては, 抑うつ脆弱性としてスキーマ, 認知の誤り (恣意的推測, 選択的抽出, 過度の一般化, 拡大解釈と過小評価, 個人化, 二者択一的思考), 自動思考の3つの認知要因を仮定している。抑うつ的なスキーマ (depressive schemas) を持つ個人は, 否定的な情報処理をしやすい認知構造を持ち, 抑うつ的でないときには活性化されていない抑うつスキーマが, ある内的あるいは外的な刺激に直面することにより活性化され (Kovacs & Beck, 1978), 認知の誤りと否定的な自動思考を引き起こすことで, 抑うつを高めると指摘している。認知の誤りには, 以下の6種のパターンがある (Beck et al., 1979, 坂野監訳, 2007) : (a) 過度の一般化 (ある事象から過度に一般化された結論を下すこと), (b) 過大解釈と過小解釈 (出来事の重要性や影響力を過大に, もしくは過小に評価すること), (c) 二分法的思考 (物事は成功か失敗か, 良いか悪いかといった相反する2つのカテゴリのうちのどちらかに位置づけようとする傾向), (d) 恣意的推論 (証拠がないにもかかわらず否定的な結論を下したり, 結論に対する反証があるにもかかわらず自らの結論に執着すること), (e) 個人化 (自分に関係のない出来事を自分に関連づけること), (f) 選択的抽出 (他にも注目すべき情報があるにもかかわらず, それらを見逃して一つの些細な情報に注目すること。また, 物事の些細な部分をもとに全体を解釈すること)。この認知の誤りのなかでも, 「過度の一般化」, 「拡大解釈と過小評価」, 「二分法的思考」はネガティブな出来事が発生した後にその解釈を否定的にさせる機能を持つ, つまり素因ストレスモデルにより説明されるプロセスであることが指摘されている (黒田, 2011)。否定的な自動思考は, 自己・世界・未来の3つの領域に関する悲観的な思考内容を指す。認知モデルでは, これらの3つの認知要因を脆弱性として仮定

し、抑うつスキーマから生み出される誤った情報処理と自動思考によって抑うつが引き起こされると考えられている。

抑うつの発生を説明する代表的なモデルとしては、他に Ellis の ABC モデル (Ellis, 1962) がある。このモデルでは、ストレスフルな出来事 (A : activating event) が直接的に、抑うつなどの結果 (C : consequence) を引き起こすのではなく、両者の間にはその個人の信念 (B : belief) が介在し、その信念が合理的であるか、不合理であるかの違いによって、抑うつなどの感情が引き起こされるかどうかが決まるとされている。不合理な信念の代表的なものには、「人はすべての面において絶対に有能でなければならず、そうでなければ不完全で無価値な人間である」、「人は絶対に公明正大に行動しなければならず、そうでなければ非難に値する悪い人間である」という考えなどがある。これらの不合理な信念のもとになる中核的な考え方として、何事に対しても「～しなければならない (must)」、「～すべきである (should)」という考え方をを行う傾向があるとされている。さらに近年では、人生における中心的な目標と価値 (G) という概念が導入され、A が G を阻害するとき、不合理な信念 (B) を持つかが C を説明する上で重要であると述べられている (Ellis, 1994)。つまり、ABC 理論では、個人の不合理な信念を脆弱性として仮定し、抑うつ気分の発生を説明している。

その他にも、自己意識理論、反応スタイル理論など、素因ストレスモデルに該当する、抑うつを維持、悪化させる理論が多く提唱されている。

しかしながら、素因ストレスモデルにおいては、ストレスイベントの経験を前提として、個人の有する抑うつの脆弱性との相互作用による

抑うつ発生の維持メカニズムが想定されており、そのストレスイベントの発生時点における何らかの個人内要因については記述されていない。Hammen (1991) は、ストレスイベントを Independent (たとえば親しい者の死など、個人のコントロール外で起こる不運な出来事) と Dependent (たとえば配偶者との喧嘩や友人との口論といった対人関係のイベントなど、部分的であっても個人の行動に起因する出来事) という対極軸で捉え、うつ病の者はそうでない者と比較して Dependent な出来事、特に対人関係のストレスイベントを多く経験していることを示した。

このように、近年、抑うつ脆弱性要因やうつ症状を持つ者はそれらによってストレスを作り出すことで抑うつを高めることを仮定した「ストレス生成モデル」(Figure 1-2; Hammen, 2006) が注目されている。ストレス生成モデルでは、ストレスを発生させうるような個人の脆弱性が仮定されており、この個人内の脆弱性によってストレスイベントの生起頻度自体が異なることを説明するモデルである。まず、ストレスとうつ病との関連を検討した先行研究においては、ストレスがうつ病を引き起こす方向の影響性しか仮定されてこなかった。しかしながら、Hammen (1991) は、抑うつ状態であることがストレスを引き起こすという逆方向の関係性もあり両者の影響関係は双方向性であることを指摘した。特に、抑うつ状態の者は自身の振る舞いによって周囲の者との口論や不和、関係性の悪化といった対人関係ストレスを引き起こしやすいため、その結果として抑うつが悪化しやすいことが指摘されている (Hammen, 1991)。このように当初は抑うつがストレスを引き起こすプロセスがストレス生成モデルと呼ばれ、そのためこのモデルは抑うつ状態であることを脆弱性として捉えた上で抑うつの悪化のプロセスを記

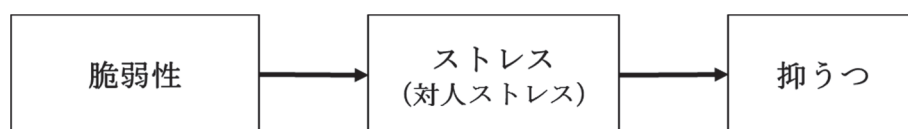


Figure1-2 ストレス生成モデル (Hammen(2006)を参考に作成)

述するモデルであった。しかしながら、近年においてはこのストレス生成モデルは、抑うつ状態以外の個人内要因も脆弱性として捉え、抑うつの悪化だけでなく発生メカニズムについての説明にも用いられている。抑うつに陥っている者でなくても、対人関係において脆弱性となる要因を有する者は、対人ストレスを作り出すことで抑うつに陥るというプロセスであり、このストレス生成モデルは、うつ病のみならず、軽度の抑うつの発生や悪化の記述にも適用されている。たとえば、脆弱性要因として社会的スキルが欠如している者は、対人場面においてうまく振る舞うことができず、対人ストレスを感じることで、抑うつに陥ることが示されている（たとえば、Herzberg, Hammen, Burge, Daley, Davila, & Lindberg, 1998）。また、他にも、完璧主義傾向の高い者は、対人ストレスの経験頻度が高く、これらが抑うつを予測することが報告されている（Flett, Hewitt, Garshowitz, & Martin, 1997）。つまり、素因ストレスモデルで想定されているように、生じたストレスに対する脆弱性だけでなく、個人の持つ対人的脆弱性がストレスを作り出すという視点を取り入れることで、抑うつの発生および維持に関する理解がより深まると考えられる。また、このストレス生成モデルについては、Hammen（2006）により、対人関係に関するストレスが抑うつに最も影響すると述べられたうえで、ストレスの生成に関連する対人関係上の問題がレビューされている。しかしながら、ストレス生成モデルの立場で抑うつへの影響を実証的に検討した研究は見当たらない。

第2節 拒絶

第1項 対人ストレスとしての拒絶

これまでのさまざまな抑うつ発生のメカニズムの研究において、外的な出来事、つまり心理的ストレスが抑うつ発生のきっかけとなることは共通見解とみなされている。そして、日常生活で経験されるさまざまなストレスの中で、対人関係におけるストレスが特に抑うつと強く関連することが指摘されている。

Kendler, Karkowski, & Prescott (1999) では、経験したイベントが Dependent であるほどその後うつ病を発症しやすいことを示した。Cole, Martin, Powers, & Truglio (1996) が小学生を対象に実施した6ヶ月間隔の縦断調査では、1回目の調査時点における社会的能力の低さが、同時点における抑うつを統制した後も6ヶ月後の抑うつを有意に予測したこと、一方で学業の能力の低さは抑うつを予測しなかったことを報告している。同様に、Rudolph, Hammen, & Burge (1994) においても、友人との関係性といった対人関係によるストレスが抑うつと関連することが示されている。Eley & Stevenson (2000) による双生児研究では、学業の問題や喪失といったストレスの経験は両者に共通しており、これらも抑うつと関連するが、両者で経験が異なった友人関係や家族関係における問題が、両者の抑うつの差を説明することが明らかとなった。高倉・新屋・平良 (1995) では、大学生を対象に質問紙調査を実施し、対人関係における不満足度が高いほど抑うつが高くなることを報告している。Joiner & Coyne (1999) においても、対人関係のストレスが抑うつの発生、維持、悪化に強く影響することが示され、抑うつの文脈において対人関係における脆弱性を取り扱うことの重要性が述

べられている。

また、対人ストレスのなかでも対人関係の喪失は、温かい配慮や社会的な関係性といった重要な恩恵の喪失を意味することから、重要な関係性を断つようなストレスは、即時的かつ激しい苦痛を生じさせると考えられている（Bowlby, 1980; Gilbert, 1992）。対人関係の喪失といっても、自分から関係を断った場合にはそのような経験がない場合と比較してうつの発生リスクが約 10 倍であるのに対し、相手から拒絶された場合は約 22 倍と、特に高いことが示されている（Kendler, Hettema, Butera, Gardner, & Prescott, 2003）。また、拒絶はうつをリスクを増大させるだけでなく、拒絶の含まれないネガティブなライフイベントと比較して、うつをより早く引き起こすことが示されている。Slavich（2009）では、積極的な拒絶を受けた個人は、拒絶の含まれない深刻なイベントを体験した個人と比較して約 3 倍の早さで抑うつ状態になったことが報告されている。拒絶からうつへの影響について、Monroe（2007）は拒絶イベントは自己価値や自尊感情と関連する否定的な自己関連認知（e.g., 私は嫌われている, 私は魅力的でない）を引き起こすと報告している。そしてこの認知が恥や劣等感といった情動を喚起し、炎症反応などの生理学的プロセスや活動低下といった行動に影響を与えるという過程により抑うつに影響を与えている可能性が示唆されている（Kemeny, 2009）。また、このような結果は他のタイプのストレスによっても起こりうるが、拒絶に関連したストレスはこれらの否定的な認知や情動を最も引き起こすだろうと述べられている（Slavich, 2009）。

第2項 拒絶の定義

主に 1990 年代半ばから、社会心理学の分野において、他者から拒絶

されることにより個人にもたらされる認知的、行動的、感情的影響について着目した研究が行われ、拒絶されることに対する反応について明らかにされつつある。

これまで、拒絶と同様の現象について、拒絶の他にも「排斥 (exclusion)」、「追放 (ostracism)」、「放棄 (abandonment)」など、さまざまな用語を用いて研究がなされてきた。これらの用語の中で最も多く用いられてきたのは、拒絶、排斥、追放の3つである (Leary, 2005)。Leary (2001) は、これらの概念に共通する要素として、相手からの関係性評価 (relational evaluation) の低さを挙げている。関係性評価とは、相手との関係に価値を置き、重要で親密度の高いものとみなしている程度を指す。つまり、他者から拒まれる、無視される、仲間外れにされるといった場合はどれも、相手が自分に対して価値や重要度、親密性を感じていないという点で共通している。さらに Leary (2001) は、拒絶－受容を両極とし、最大限の拒絶 (排斥) から最大限の受容 (包含) までを7段階で設定した。この基準に基づき、拒絶から受容までの条件を段階的に操作した研究も見受けられる (Buckley et al., 2004; Williams et al., 2000)。このように拒絶に関する現象を関係評価の観点から捉えることの利点として、岡田・中山 (2008) は拒絶に関する現象に程度という幅を持たせることができること、つまり「拒絶されたか否か」ではなく「どの程度拒絶されたか」という議論が可能になる点を挙げている。そこで本研究においても、Leary (2001) の定義に則り、7段階のうち消極的な拒絶 (無視) から最大限の拒絶 (物理的な拒絶) までを包括的に拒絶と定義する。また、相手からの関係性評価の観点から拒絶を捉えた場合、相手が自分との関係を重要視していないと知覚しなければ、個人の行動や感情に対して影

響は生じないと考えられる。このことから、拒絶については、客観的な出来事ではなく、他者からの拒絶を主観的に知覚した状態として扱われている（岡田・中山，2008）。

第3項 拒絶に関わる理論および拒絶が個人内に及ぼす影響

拒絶に関わる理論や、拒絶されることによって生じる反応について、岡田・中山（2008）を参考に述べる。

1. 所属欲求理論

ヒトは原始から社会集団を形成する社会的動物であり、生存確率を高めるために集団に所属することが重要であった。この「最低限の対人関係を形成、維持したい」という欲求は所属欲求（need to belong）と呼ばれ（Baumeister & Leary, 1995）、時代や文化に依らない普遍的なものであるとみなされている。集団から排除されることは、自身の生存が危うくなるため、他者からの拒絶はその警告として感情をはじめとしたさまざまな反応を引き起こすとされている。

2. ソシオメーター理論

他者からの拒絶は、この所属欲求を脅かすものであるため、他者との関係性（他者からの拒絶／受容）をモニターするシステムを進化させてきた。近年、自尊感情がこのシステムを担っているとして、社会的視点を導入して新たに自尊感情を捉え直した Sociometer（ソシオメーター）理論が提唱されている（Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995）。ソシオメーター理論では、「相手が、自身との関係性を重要であると考えているか（関係性評価）」の程度を自尊感情がモニターしていると考えられている。自尊感情には、状态的・特性的の2つの側面があり、状态的自尊感情の水準はその時点における相手からの拒絶／受容の程度によ

って上下することから現在の拒絶／受容を表すメーターとして、そして特性的自尊感情はそれまで経験した拒絶／受容の程度によって形成されることから、過去の拒絶／受容されてきた程度を表すとされている。状態的自尊心が低下し、拒絶を知覚した場合には、所属欲求を充足させるべく、自己高揚的に振る舞うことが確認されている（Leary, 2008）。また、ソシオメーター理論では、自尊心自体に対する欲求は仮定されておらず、あくまで拒絶の程度により生じる心理状態である点が特徴である（岡田・中山, 2008）。

3. 社会的モニタリングシステム

ソシオメーター理論を発展させた理論として社会的モニタリングシステムが提唱されている（Pickett & Gardner, 2005）。従来のソシオメーター理論では常に所属の状態をモニタリングすることが仮定されているが、社会的モニタリングシステムでは、状態的自尊感情の低下により拒絶が知覚されている場合に活性化され、所属欲求回復のための補償行動（社会的表象を通して絆を再確認する社会的軽食；幻想や代用対象を用いて所属感を維持する社会的防御）に注力するよう働くというものである。しかしながら、このモデルを支持する研究は現在のところ少なく、更なる知見が必要であるとされている（岡田・中山, 2008）。

4. 自我脅威モデル

Baumeister, Smart, & Boden（1996）は、拒絶を他者評価と自己評価のズレによる自我脅威として捉え、自我脅威モデルを提唱している。ここでは、自己評価に反して低い他者評価を検知した場合に、それを受け入れるか否定するかを選択が仮定されている。ここで低い他者評価を受け入れた場合には、その他者評価に合わせて自己評価が低下し、一方で自我を防衛するために他者評価を否定した場合には、相手に対する怒

りやネガティブ感情が引き起こされることで攻撃などの行動的反応が生じると述べられている。

5. 排斥のモデル

Williams & Zadro (2005) は、排斥 (Ostracism) によって先述の所属 (Belongness) の他に、環境や周囲との関係性のコントロール (Control)、自身の存在意義 (Meaningful existence)、自尊 (Self-esteem) の4つの基本的欲求が阻害されると仮定し、この仮定を軸に排斥のモデルを提唱している。このモデルでは、排斥の特徴を可視性、動機、程度、原因の明確性によって分類することを提案しているとともに、排斥による影響についても即時的反応 (基本的欲求の阻害による感情反応、身体的覚醒) と中長期的反応 (基本的欲求回復のための認知行動的方略、基本的欲求阻害の内在化) に分類している。排斥の先行事象から結果までの過程を記述している点が特徴的である。

6. 社会的痛み理論

神経心理学的観点からは、社会的痛み理論が提唱されている。所属欲求の阻害は苦痛を生じさせるものであることから、MacDonald & Leary (2005) は拒絶を知覚した際の情動的反応を「社会的痛み」とし、社会的痛み理論を構築した。この理論においては、拒絶は物理的な損傷による身体的痛みの感覚と同じシステムを共有するため、拒絶を経験した際に苦痛な情動反応が生じるとしている。身体的痛みは、感覚的痛み (pain sensation) と情動的痛み (pain affect) の2つの要素から構成される。感覚的痛みは、特定の痛覚受容器により収集され、脊髄後角を通じて脳に送られる感覚であり、組織の損傷に関する情報を与える。情動的痛みは、疼痛感覚に付随して生じる不快感情や予想される疼痛感覚に対して生じる不快感情であり、嫌悪的な状態を知らせる役割がある。

この感情は、嫌悪的な状態の要因を特定し、それに対する攻撃やそこからの回避といった行動を動機付ける機能を有している。拒絶は、この情動的痛みを刺激することで、ネガティブ感情を生起させる。拒絶による痛みと物理的損傷による痛みは、生理的なメカニズムが共有されていることによる類似性が示されている。Eisenberger et al. (2003) は、PC上で2名の架空プレイヤー（プログラム）とキャッチボールを行なう課題であるサイバーボール課題を実施し、課題中の脳活動を測定した。サイバーボール課題では、参加者は他の2名のプレイヤーは別室で自身と同様に実験に協力している参加者であると信じているが、実際には2名の架空プレイヤーの動きは全てプログラミングされており、やがて参加者にはボールが回ってこなくなることで排斥されていると知覚する状況を作り出す課題である。この実験により、拒絶を知覚した際には、前部帯状回背側部が活性化することを報告している。その後も、拒絶刺激に対して情動刺激や認知的統制の処理に関わる脳部位（情動刺激：後帯状回，島；認知的統制：前部帯状回背側部，内側前頭皮質）の活動が賦活すること（Kross et al., 2007），鎮痛剤を服用することで自己報告による社会的痛みおよび社会的痛みに関連する脳領域（背側前帯状回，前島）の反応が減弱すること（Dewall et al., 2010），拒絶刺激に対して感覚的痛みに関連する脳部位（第二次体性感覚皮質，後島(dpINS))が活性化すること（Kross et al., 2011）など，さまざまな研究において社会的痛みと身体的痛みの共通性が示されている。社会的痛み理論は，内的過程である拒絶を生理学的観点から記述している点が特徴的である。

いずれの理論においても，他者からの拒絶に対する反応として，社会的痛みや自尊感情の低下といった，ネガティブ感情の生起が仮定されている。

6. 拒絶に対する感情反応

Leary, Koch, & Hechenbleikner (2001) は、他者からの拒絶により生じる感情として、「悲しさ」、「孤独感」、「傷つき」、「嫉妬」、「罪悪感」、「恥」、「困惑」、「社会不安」を挙げている。これらのように具体的な感情を扱った研究においては拒絶による効果が示されているが (Bourgeois & Leary, 2001; Buckley et al., 2004; Chow et al., Rudman, Dohn, & Fairchild, 2007; Zadro et al., 2004) , 全般的なネガティブ感情を扱った研究では、拒絶体験の有無で有意差が認められないという結果も得られている (Baumeister et al., 2002; Briones, Tabernero, & Arenas, 2007; Manner et al., 2007; Twenge, Baumeister et al., 2007; Twenge et al., 2007; Zadro et al., 2004) 。本邦において、岡田 (2010) は快-不快といった全般的な感情ではなく具体的な感情に注目すべきとして、拒絶と感情の関連について検討を行なっている。その結果、拒絶体験を想起した群とそうでない群で有意差が認められたのは主に不安に関する感情であった。

一方で、拒絶が痛みの感覚を麻痺させる可能性が指摘されている。分離や孤立によって身体的な痛みが麻痺することや (MacDonald & Leary, 2005) , 排斥により引き起こされる社会的痛みと身体的痛みが共通のメカニズムを共有することが明らかにされており (Eisenberger et al., 2003) , DeWall & Baumeister (2006) は拒絶が両方の過敏さを低下させる可能性を指摘している。実際に、将来他者から拒絶されることを予期させられた参加者は、感情システムを遮断し、無感情状態になることが明らかにされている (Twenge, Catanase, & Baumeister, 2003) 。また、パーソナリティテストにより拒絶を経験した者は、身体的な痛みに対する閾値と耐性が高まると同時に、自信にとって重要な

出来事に対する感情反応が低下したという報告もされている（DeWall & Baumeister, 2006）。

第3節 拒絶過敏性

このように、拒絶や排斥に代表される、相手からの関係性評価の低さを認識することは誰にとってもネガティブな出来事であり、心身に影響を与えうるが、なかでも特に拒絶されることに過敏な傾向を有する者がいる。このような傾向を拒絶過敏性という。

第1項 心理学における拒絶過敏性

拒絶過敏性は、古くは Horney（1937）において敵意との関連が提唱された概念であり、現在では大きく分けて2つのグループによって定義されている。第一に、Downey & Feldman（1996）は拒絶過敏性を愛着理論の立場から捉え、「重要な他者からの拒絶を不安とともに予期し、敏感に知覚し、過剰に反応する傾向」と定義している。愛着理論では、幼少期に受容または拒絶された経験が表象として内在化され内的作業モデルとなり、成人後においても社会的場面での情報処理を制御していると考えている。幼少期に拒絶されてきた者は、拒絶に対して防衛的な情報処理や情動制御を行うようになる。つまり、拒絶を避けることに最大の価値を置き、あらかじめ拒絶を予期し、それを回避することに最大限の情報処理資源を割く。この定義での拒絶過敏性は、関係性スキーマについての愛着理論と帰属理論の説明を選択的に援用して定義された構成概念である（Ayduk et al., 1999）。

第二に Boyce & Parker（1989）は、長年にわたる臨床観察に基づき、

うつ病の病前性格として対人関係過敏性 (Interpersonal sensitivity) という概念を提唱した。対人関係過敏性は「他者の行動や感情に対する過度の意識と過敏さ」と定義されており, Boyce & Parker (1989) により開発された尺度 (Interpersonal sensitivity measure ; IPSM) により測定される。下位尺度としては, (1) 対人意識, (2) 称賛欲求, (3) 分離不安, (4) 臆病さ, (5) 内的自己の脆弱性の 5 つに分かれることが示されている。

これら 2 つの定義が指す概念について, Harb et al. (2002) は, 「これらの指す概念はどちらも, 他者から拒絶されることに対する不安という点ではほぼ同義であると考えられる」として, 対人関係過敏性と拒絶過敏性を統一して “Interpersonal Rejection Sensitivity” と再定義している。本研究においても, Harb (2002) の見解に依拠し, 両者を統一して「拒絶過敏性」と一貫して表記する。

第2項 精神医学における拒絶過敏性

精神医学において, 拒絶過敏性は非定型の特徴を伴ううつ病 (以下, 非定型うつ病) の診断基準の副項目の一つに挙げられている。DSM-V (American Psychiatric Association, 2013) における「非定型の特徴」の基準は, 気分の反応性 (現実のまたは可能性のある楽しい出来事に反応して気分が明るくなる) を満たし, かつ以下の特徴のうち 2 つ以上に該当することである: (1) 著明な体重増加または食欲の増加, (2) 過眠, (3) 鉛様の麻痺 (手や足の重い, 鉛のような感覚), (4) 長期間にわたる, 対人関係の拒絶に敏感であるという様式 (気分障害のエピソードの間に限定されるものではない) で, 著しい社会的または職業的障害を引き起こしている (Rejection sensitivity ; 拒絶過敏性)。これらに

該当し、かつ同一エピソードの間にメランコリー型の特徴を伴うもの、または緊張病性の特徴を伴うものの診断基準を満たさない場合、非定型の特徴を伴うものと診断される。

Stewart et al. (1993) は、先行研究を概観し、非定型うつ病を診断する面接項目である *Atypical Depression Diagnostic Scale (ADDS)* を作成した。その中で拒絶過敏性について「他人との付き合いで拒絶されることに敏感になり、日常生活に支障をきたす」と記述し、下位項目として、(1) 人間関係における過敏性（拒絶や批判への感情的過反応）、(2) 人間関係における特質（拒絶や批判に対して過度に反応し、激昂したり、荒れ狂った態度を取ることがある）、(3) 生活機能障害（批判や拒絶に過剰に反応して職場や学校に支障が出ている）、(4) 人間関係の回避（拒絶を恐れて他人と交際しない）、(5) その他の拒絶回避（拒絶回避のためにその他の人生の重要な役割を回避している）を挙げている。

DSM-V に採用されている診断基準は概ね Columbia 大学グループにより提案された原案が採用されているが、Columbia グループによる非定型うつ病概念に対して、非定型症状群内部の関連性がいずれも乏しい、つまり症状学的まとまりを欠くという大きく2点の批判がある。この背景として、このグループの唱える非定型の病態の妥当性が「MAOI がTCA やプラセボに対してプライオリティを有する状態」により担保されている点が挙げられる。つまり、非定型うつ病の診断基準においては、精神病理学的なまとまりや症状構造的仮説などは重視されていないことになる（大前，2011）。

Parker et al. (2002) は、160名の大うつ病患者を気分反応性の有無で2群に分け、副症状の有無について比較を行ったところ、有意差は認

められなかった。その上で、非定型うつ病がスペクトラム障害であるならば大部分のうつ症状の決定因は、パーソナリティである拒絶過敏性であるだろうという仮定のもとに拒絶過敏性の有無で検討を行った。その結果、有意差が認められたのは過眠のみであった。Posternak & Zimmerman (2002) では、非定型うつ病患者の症状分析がなされ、非定型うつ病の副症状（過食、過眠、鉛様麻痺、拒絶過敏性）間には有意な相関関係が認められたが、一方で必須症状である気分反応性と副症状の間にはどれも相関がみられなかった。さらに、気分反応性の有無で副症状を2つ以上持つ割合は差がなく、非定型うつ病における気分反応性の特異性については示されなかった。同様に、Benazzi (2002; 2003) や Angst et al. (2006) も気分反応性については非定型うつ病診断における特異性が乏しいとし、診断基準からの除外を提案している。

Parker (2008) は、拒絶過敏性と他の症状の関係性に関する症状構造的仮説を述べた唯一の先行研究である。この論文では、非定型うつ病の他の症状は拒絶体験後の自己慰安方略であると述べている。例えば、過眠はストレス時の徐波睡眠を回復させる、過食は L-トリプトファン成分の多い食物を摂取することで脳内の 5-HT 水準を高め、報酬系の神経伝達物質であるエンドルフィンを放出させるなどといったように、恒常性を維持するための反応である。また、拒絶過敏性は、糖分を多く含む食べ物（炭水化物）によって充足されると考えられると述べられている。これらは、認知の変化に関わることで知られているコレシストキニンや副腎皮質刺激ホルモン放出ホルモンを含む脳内ペプチドを放出させるものである。しかしながら、この仮説を実証する研究は実施されおらず、メランコリ型／非メランコリ型うつ病患者で拒絶過敏性を比較した研究では、非定型をはじめとする非メランコリ型の患者において有

意に高いことを示した知見もある一方で（例えば，Boyce, Hickie, Parker, Mitchell, Wilhelm, & Brodaty, 1993），メランコリ型と非メランコリ型，非定型のサブタイプ間においてIPSMによって測定される拒絶過敏性の高さに有意差が認められないという知見も得られている（Luty, Joyce, Mulder, Sullivan, & McKenzie, 2002）。本邦において精神科クリニックに通院中のうつ病患者を対象に実施された調査においても，非定型うつ病患者と，メランコリ型を中心とした非定型以外のタイプのうつ病患者において，拒絶過敏性の高さに有意差が認められないという知見が得られている（巢山・兼子・伊藤・野口・貝谷・鈴木，2015）。これらのことから，拒絶過敏性は健常者と比較してうつ病患者において高いことは考えられるが，メランコリ型に対して非定型うつ病に特異的であるとはいえない。

これらに加え，対人ストレスが抑うつ全般のリスクとなることを鑑みても，現時点においては拒絶過敏性を非定型うつ病に特化した特徴とするには知見が不十分である。そこで本研究においては，拒絶過敏性を非定型に限定しない，抑うつ全般のリスク要因として位置づける。

第3項 拒絶過敏性の認知行動的特徴を説明するモデル

これまでさまざまな研究において，パーソナリティとしての拒絶過敏性の観点から，知覚のしやすさについて論じられてきた。

Downey & Feldman（1996）は，拒絶への反応性の個人差の要因として養育者との関係を挙げている。具体的には，拒絶過敏性が高い者は，養育者への要求場面において要求を拒絶されるという過程を繰り返し体験し，それを一般化することで，他者は自分の要求に対して拒絶的に反応するという予期を形成している，というものである。この点は愛着理

論の研究で得られた知見とも一致する（宮崎，2008）。Bowlby（1973）によると，個人が有する愛着スタイルは乳幼児期に愛着他者（主に母親）が自己の必要時に利用可能であったか，自己の要求に適切に応答したかという経験に大きく左右される。愛着他者が受容的であったか拒絶的であったかの相互作用を一般化し，対人関係への特性的な予期が形成されることで，対人関係における情動，認知，行動に特有のパターンが生じると考えられている（Mikulincer & Shaver, 2007）。愛着スタイルの個人差は，愛着不安と愛着回避の二次元で捉えられており，愛着不安の強い者は他者との関係において自己の価値を低く評価し，他者から受容されることを確信できず，拒絶されることを強く警戒する。愛着回避の強い者は，対人関係の中で他者に不信感を抱き，他者と親密な関係を築くことを回避する。愛着不安と愛着回避のどちらかまたは両方が強い不安定な愛着スタイルを有する者は，拒絶の手がかりへの過敏性が高いことが明らかにされている（Campbell, Simpson, Boldry, & Kashy, 2005; Collins, Ford, Guichard, & Allard, 2006; 金政，2005）。

また，特性的自尊心は，相手にとっての自己の一般的な価値評価を表すといわれている（Leary et al., 1995）。状態自尊心が特定の他者からの受容や拒絶によって一時的に変動するのに対し，特性的自尊心は過去の受容，拒絶体験を通して形成された恒常的な価値評価である（Leary & Baumeister, 2000）。特性的自尊心の高い者は他者からの受容を多く経験し，これらの体験を一般化して自己の価値を高く評価している。一方で特性的自尊心の低い者は，多くの拒絶体験に伴い自己の価値を常に低く評価しているといえる。そのため特性的自尊心の低い者は拒絶の手がかりを検知する際の閾値が低いことが示されている（Nezlek, Kowalski, Leary, Blevinsm & Holgate, 1997; Murray,

Bellavia, Rose, & Griffin, 2003; Murray, Rose, Bellevia, Holmes, & Kusche, 2002)。つまり、特性的自尊心の低い者は他者にとっての自己を恒常的に低く認知していることから、他者との相互作用過程の中で相手から拒絶されることを常に警戒している (Murray et al., 2002)。このため、他者の行為に関する情報処理過程で拒絶の手がかりを看過しないように、その過敏性が高まっていると考えられている (Murray et al., 2003)。

以上のように、さまざまな対人関係における拒絶体験の蓄積によって自己の価値を低く見積もり、拒絶されることへの警戒から、拒絶の手がかりに敏感になっていると説明されている。つまり、ある社会的状況において「拒絶されるかもしれない」という予期を持つことから拒絶のサインを知覚しやすくなることが考えられる。このように被拒絶体験の蓄積を説明するモデルとして、Levi, Ayduk, & Downey (2001) は、**Rejection sensitivity model** を提唱している。このモデルでは、過去の拒絶経験等により拒絶されることに対する予期不安が形成され、それにより拒絶の知覚しやすさや、不適応的な認知、感情、行動的反応が生じることにより、拒絶過敏性が自己充足的に強化されることが説明されている。つまり、拒絶体験については、拒絶過敏性が高いほど拒絶を予期し、知覚しやすいことで循環する認知的な特徴が想定される。このモデルをもとに、ストレス生成モデルおよび素因ストレスモデルに当てはめ、拒絶体験の蓄積を記述した認知モデルを示す (Figure1-3)。しかしながら、社会的場面において予期、知覚、反応を測定し認知モデルの妥当性を実証した研究は見当たらない。

脳画像研究においては実験において拒絶の予期を扱った研究がある (Somerville, Hertherton, & Kelley, 2006; Bolling, Pitskel, Deen,

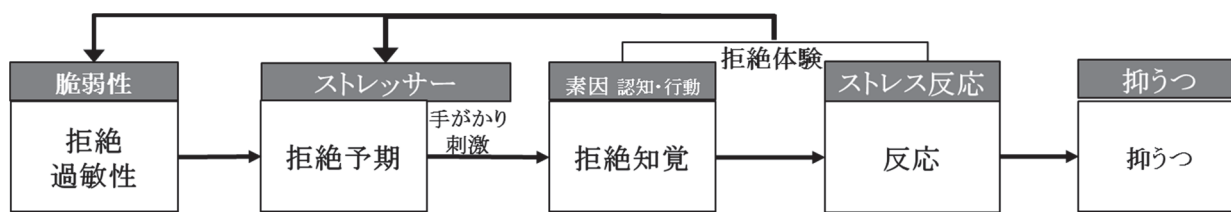


Figure1-3 拒絶過敏性の認知モデル (Levy, et al. (2001)をもとに作成)

James, McPartland, Mayes, & Pelfrey, 2011 ; Kawamoto, Onoda, Nakashima, Nittono, Yamaguchi, & Ura, 2012) 。これらの研究においては、社会的状況における拒絶には「公平な扱いを受けるだろう、受容されるだろう」といった暗黙の了解に反する、つまり予期違反の要素が含まれるとし、排斥と予期違反を分けて測定することを目的としている。分析の結果、3つの研究とも排斥と予期違反は脳の活動領域が異なると結論付けており、Somerville et al. (2006) においては前部帯状回背側部が予期違反に関連し、前部帯状回腹側部が社会的フィードバック（拒絶）に関連することが示されている。また、Kawamoto et al. (2012) においては右腹外側前頭前皮質は社会的痛みの制御に関連し、前部帯状回背側部は排斥の検知に関連することが示唆されている。これらのことから、拒絶過敏性が高い者における拒絶の知覚しやすさは必ずしも予期違反つまり予期と結果の差異による期待外れによるものではなく、先行研究において述べられているように、予期が高まることにより拒絶の手がかりに敏感になっている可能性が考えられる。しかしながら、予期を測定し、予期が知覚を高める可能性について実証する研究は行われていない。また、先述のように、このような拒絶体験のプロセスは拒絶過敏性の高い者ほど経験しやすいことが考えられるが、そのような検討はなされていない。そこで、本研究では、拒絶過敏性の高低による **Rejection sensitivity model** を構成する認知的要因の各要素の差異についても検討する。

一方で、主に健常者を対象とした先行研究によって、拒絶を知覚した後の行動として、所属欲求を再充足するための行動や受容を求める行動がとられることが明らかにされている。たとえば、社会的追放のモデル (Williams & Zadro, 2005) , 社会的モニタリングシステム (Pickett

& Gardner, 2005) において、拒絶を経験した後に所属の状態を回復しようと動機づけられ関係回復的な行動を導くことが想定されている。また、Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller (2007) は、拒絶が新たな他者との関係形成への動機づけを導くとする社会的再結合仮説 (social reconnection hypothesis) を検討している。他者からの選択やパーソナリティ検査、過去の拒絶体験の想起などにより拒絶を経験した者は、新たな対人関係を築く機会に興味を示し、対面する可能性のある他者に報酬を多く分配するなどといった向社会的な行動をとることが報告されている。これらの向社会的行動として、(1) 関係志向的行動 (自己の利益よりも相手や相手との関係性の利益を優先する)、(2) 同調行動 (好意の獲得のために自分の意見や行動を他者に合わせる)、(3) 行動模倣 (他者との円滑な相互作用を可能にするため) が挙げられ、これら他者からの受容を促進するような行動が導かれることが明らかになっている (Lakin & Chartrand, 2003; Maner, et al., 2007; Williams, Cheung, & Choi, 2000; Williams & Sommer, 1997)。

ここで、拒絶過敏性を測定する尺度である Interpersonal Sensitivity Measure (以下, IPSM; Boyce & Parker, 1989) の下位因子として、「拒絶されるのが恐いため、自分の意見を言わないようにしている」、「他の人を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほうがましだ」といった項目により「Timidity; 臆病さ」が構成されることが示されている (Boyce & Parker, 1989)。

つまり、拒絶過敏性が高い者は、ただ主観的な拒絶体験を多く積み続けるわけではなく、拒絶される可能性のある社会的状況において、これらのような拒絶を避けるための方略となる行動を予防的に選択している可能性が考えられる。しかしながら、Rejection sensitivity model は拒

絶の知覚による拒絶過敏性の自己充足的強化を説明するモデルであり、拒絶を避けるための行動の維持については言及されていない。拒絶過敏性という概念があらわす現象について理解するためには、拒絶を知覚する場合についてだけでなく、拒絶を避けるために試みる行動についても扱い包括的、実証的に検討することが必要である。そこで、本研究では、拒絶を阻止するための行動について明らかにするとともに、拒絶過敏性の高低による頻度の差についても検討する。また、拒絶阻止の行動は、短期的には拒絶されにくい、あるいは気に入られるといった良い結果が得られる可能性もあるが、それと同時に気疲れ、自分を偽らなければならないといった葛藤や不全感が生じることから、このような対人ストレスの長期的な蓄積が抑うつに影響を与えていることが考えられる。そこで、このような拒絶を阻止するための方略を取りやすい行動的特徴が対人ストレスを高め抑うつに影響を与えることを仮定した行動モデル（Figure1-4）について検討する。

第4項 拒絶過敏性の測定方法

Boyce & Parker (1989) と Downey & Feldman (1996) による2つの定義について、先述のように両定義の指す概念は同義であるが、その測定パラダイムは異なっている。対人関係過敏性を測定する尺度として作成された IPSM (Boyce & Parker, 1989) では、「あなたが普段、あなた自身や周囲の人々についてどのように感じているかに関する項目が挙げられています。-中略- いま現在当てはまるかどうかというより、『普段』どのように感じているかについて教えてください。」と教示し、「もし他の人が本当の私を知ったら、私のことを嫌いになるだろう」や「良いことをしたと他の人に言われた時のみ、そう信じられる」といっ

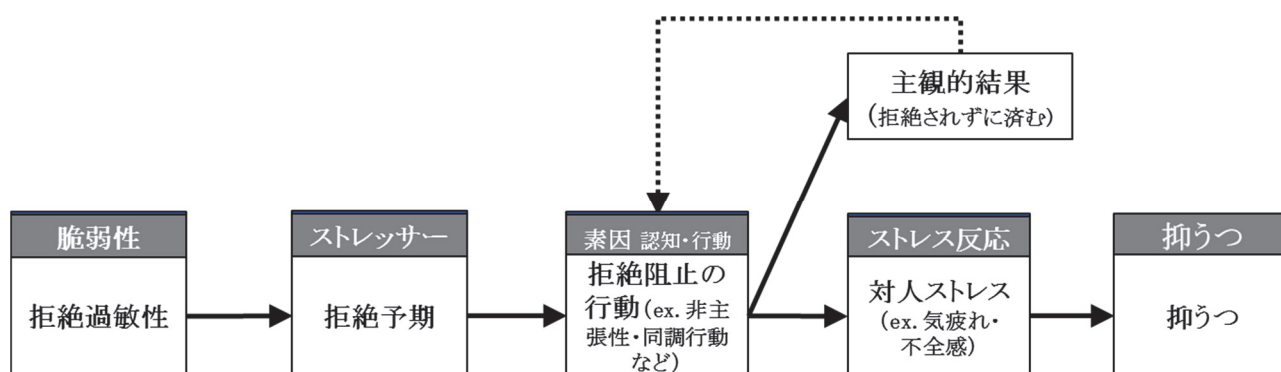


Figure1-4 拒絶過敏性の行動モデル

た自己や他者の考えを記述した項目に対する回答を求めている。つまり、IPSMで測定される拒絶過敏性は、個人のある程度安定的な認知・行動傾向を測定していると考えられる。

一方で **Rejection Sensitivity Questionnaire** (以下, **RSQ**; **Downey & Feldman, 1996**) では、大学生が日常的に経験する状況として友人、親、恋人、先生に対する依頼場面を18項目挙げ、各場面に対する拒絶の期待(予測:相手からの受容-拒絶の可能性はどの程度だと思うか)と価値(脅威:相手から受容-拒絶されるという結果をどのくらい心配に思うか)を測定し、それらの乗算によって過敏性得点を算出する。そして、個々の場面に対する過敏性得点の総和によって個人の傾向を記述している。この尺度を用いた研究において、価値得点は対象とする相手に依存すること(親や友人と比較して恋人に対して有意に価値得点が高い)、依頼内容によって因子を構成する傾向にあることが明らかにされており(本多・桜井, 2000)、**RSQ**により測定される過敏性得点は状況により異なることが示されている。

つまり、対人関係過敏性と拒絶過敏性は、その定義が表す概念は同義であり、どちらもその定義に則って特性的側面として扱われてきたが、測定パラダイムの違いにより、前者は個人のこれまでの体験の蓄積としての特性的側面、後者はある状況下における状态的側面を記述してきたと考えられる。また、状态的側面といっても、ある程度個人の特性的な側面を基準としての変動であることが考えられる。本研究においては、質問紙により測定する拒絶過敏性をその定義に則り個人の特性的側面として扱うためにも、拒絶過敏性の測定には **IPSM** を用いる。

第5項 拒絶過敏性と他の類似概念との異同

これまで述べてきたように、相手からどう思われるかといった評価を気にする点は拒絶過敏性を構成する重要な特徴である。この特徴と類似する概念として、他者評価懸念が挙げられる。他者評価懸念（他者からの否定的評価に対する恐れ）は、社交不安の維持にかかわる認知的特徴であり、拒絶過敏性と類似する概念である。一方で、重複しない点としては、以下の3つの側面が挙げられる。一点目は、評価者となる対象との関係性である。拒絶過敏性は愛着理論からもその定義がなされているように、基本的には相手との個人的な相互作用場面を想定している。一方で他者評価懸念では、それに加えて「人前で失敗するとひどくうろたえてしまう」というように、パフォーマンス場面における評価懸念を含む点が挙げられる。二点目として、拒絶過敏性は「相手が自身との関係性をどの程度重要であると考えているか」という関係性評価に限定した概念である一方で、他者評価懸念は例えば「目上の人が私を評価しているとわかると緊張して神経過敏になる」、「人に馬鹿だと思われるのではないかと心配することは、ほとんどない（逆転項目）」といったように、能力評価を含む他者からの評価全般を含む点が挙げられる。三点目として、拒絶過敏性は関係性評価の低下に対する恐れに加えて、自己主張を抑える、他者に合わせるなど拒絶されないための行動的傾向を含むのに対して、他者評価懸念はあくまでも否定的評価を受けることへの恐れに限定している点が挙げられる。

つまり、拒絶過敏性は関係性評価に対象を限定して、恐れといった認知的特徴に加え回避的な行動的傾向を含む個人の過敏性の傾向を指しており、他者評価懸念は関係性評価を含む評価全般を対象とするがあくまでも恐れに限定しているといえる。他者評価懸念は拒絶を恐れる認知的

特徴とは類似する点が多いが、あくまでも懸念のみを指す概念であり、拒絶過敏性という概念を用いたほうが、拒絶を避けようとする行動的な側面を含む個人の特徴を包括的に捉えることができる。以上のことから、本研究では拒絶過敏性を扱うこととする。

第4節 本研究の目的

第1項 従来の研究における問題点の整理

第1～3節において、拒絶過敏性に関するこれまでの研究を概観する中で、拒絶過敏性を認知行動的特徴として捉え直すことや、抑うつとの関連について明らかにする必要性が述べられた。つまり、これまでパーソナリティ特性とされ治療変数とされてこなかった拒絶過敏性について、認知行動的特徴を記述することで、対人関係における脆弱性を扱った抑うつへの心理的支援に関する知見を積み重ねていく必要があると考えられる。具体的には、うつへのリスクとしての拒絶過敏性に関する研究には、以下のような問題点が残されていることが指摘された。

まず一点目は、臨床知見から抑うつへのリスクとなるパーソナリティとして拒絶過敏性が定義されたが、抑うつとの関連についてはいまだ十分に明らかにされていない点が挙げられる。先行研究において、拒絶過敏性は複数の下位因子により構成される概念であることが示されているが、拒絶過敏性の各側面と抑うつとの関連に関する検討はほとんどなされていないのが現状である。ここで、抑うつへのメカニズムを説明する従来の理論はそのほとんどが素因ストレスモデルに基づきストレスイベントを体験した際の認知行動的反応を抑うつへの発生・維持の要因とするものであ

る。一方で、拒絶過敏性が高いということは、拒絶や侮辱といった相手からの関係性評価の低さを表すサインに敏感であり、客観的にはそう捉えられないような相手の態度や言動にそれらを見出すことで、主観的な被拒絶体験を生成することが仮定されている。つまり、対人ストレスが抑うつの主要な要因であるという知見に基づけば、拒絶過敏性はストレス生成モデルの脆弱要因として対人ストレスの主観的経験頻度を高めることで、抑うつの発生・維持に寄与することが考えられる。しかしながら、この点に関してはこれまで十分な検討がなされていない。抑うつの心理的援助において拒絶過敏性を扱うことの意義を明らかにするとともに、その要点に関する示唆を得るためにも、この点に関する検討が必要であろう。

そして二点目は、拒絶過敏性の認知行動的特徴に関する実証的な検討がなされていない点が挙げられる。認知的特徴をあらわすモデルとして、Levy et al. (2001) により、ある場面において拒絶を知覚、体験することで次の場面における拒絶予期がさらに高まり、拒絶のサインを知覚しやすくなるという循環を記述した「**Rejection sensitivity model**」が提唱されている。つまり、拒絶過敏性が高い者は、拒絶体験を積むことでさらに過敏性が高まり、主観的な拒絶体験を繰り返し経験する可能性が考えられる。このことが、拒絶過敏性をパーソナリティたらしめる要因であると考えられるが、実際にこのメカニズムを検討した研究は見当たらない。拒絶過敏性の自己充足的強化による悪循環を断ち切るためには、拒絶過敏性を特性的な要因として捉えるだけでなく、ある状況刺激に対する予期、知覚、反応を測定し、認知行動的特徴として捉え直す必要があると考えられる。

行動的特徴については、拒絶過敏性の高い者はただ拒絶体験を繰り返

しているわけではなく、拒絶されることを避けるために相手の望むであろう行動を予防的に選択することで拒絶されることを避けていると考えられるが、そのような検討はなされていない点が挙げられる。日常生活においては、明確に相手を拒絶する場面はむしろ少なく、このような傾向は対人ストレスを高めると考えられることから、拒絶過敏性が抑うつに与える影響を検討する際には、拒絶過敏性のもう一つの側面として、明確な拒絶手がかりがない状況下における予防的な行動的特徴を検討することが重要であると考えられる。これによって、より日常生活の対人関係に即した知見を得ることができると考えられる。

第2項 本研究の目的と意義

先行研究の問題点を踏まえ、本研究においては、以下の三点を主な目的とする。第一に、拒絶過敏性という概念について、構成要素や要素間の関係性について検討を行う（研究1）。そして第二に、拒絶過敏性と抑うつの関連について詳細に明らかにすることを目的とする（研究2）。さらに、具体的には、本研究においては Figure1-5 を仮説モデルとし、拒絶過敏性の高い者が抑うつに至るプロセスについて、拒絶の手がかりがある場合の知覚プロセス（研究3）および、明確な手がかりがない場合の予防的な行動（研究4）の両方の観点から検証することを目的とする。

本研究の意義は、パーソナリティ特性として従来治療で扱われてこなかった拒絶過敏性の認知行動的特徴を記述しその維持・亢進のメカニズムを示すことで、抑うつのリスクとなる対人的脆弱性に関する基礎的な知見を提供できる点が挙げられる。さらに、抑うつに関する従来理論は素因ストレスモデルに基づき、ストレスイベントを経験した後の個人

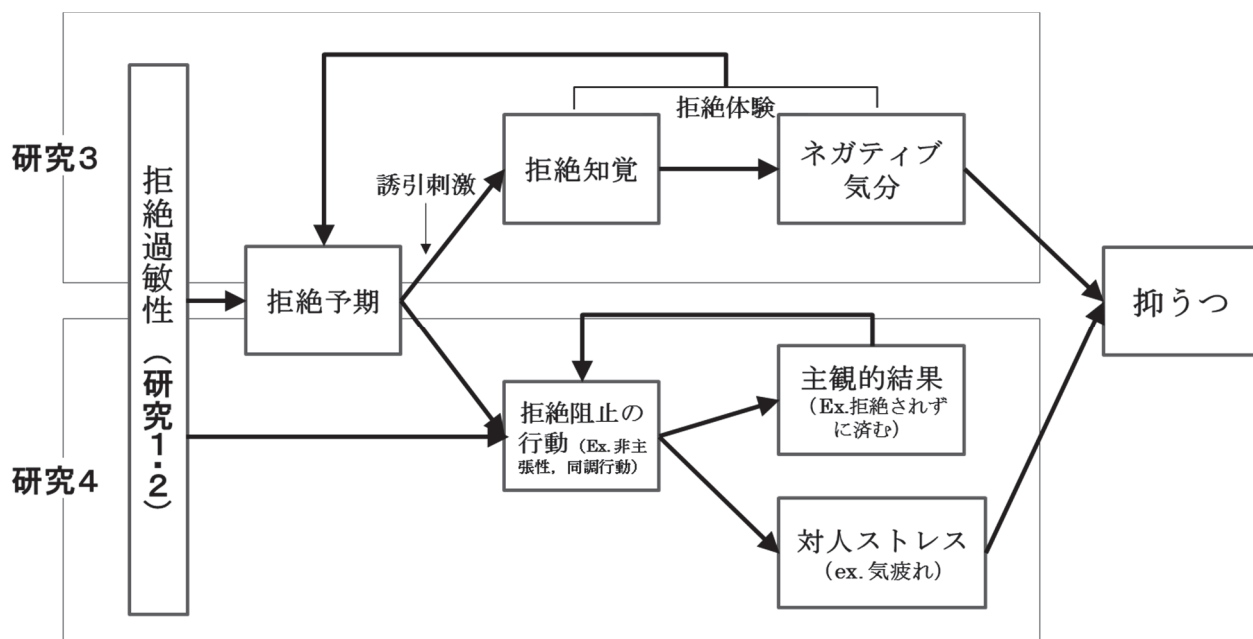


Figure1-5 本研究の仮説モデル

の認知行動的反応を抑うつつの発生・維持の要因として位置づけている。本研究でストレス生成モデルの観点から拒絶過敏性を扱い、拒絶過敏性の高さが主観的ストレスの頻度および強度を高めるという視点を取り入れることで、従来の素因ストレスモデルに基づく諸理論を補完する形で抑うつつの発生・維持メカニズムに関する理解が深まると考えられる。

第5節 本研究の構成

本研究の背景となる拒絶過敏性や抑うつつに関する従来の研究の展望にもとづき、問題点を明らかにするとともに、本研究の目的と意義について論じた本章を受けて、本研究は以下に示す構成で展開される（Figure1-6）。

まず、問題点1を解決するために、第2章では、拒絶過敏性が抑うつつに与える影響を検討する。次に、問題点2を解決するために、第3～4章において、拒絶過敏性の高さが抑うつつのリスクとなる背景にある要因やその過程の特徴について検討を行う。具体的には、第3章では、まず拒絶体験を認知的に説明した *Rejection sensitivity model* (Levy, et al., 2001) を実証的に検討することで、拒絶体験を構成する拒絶予期および拒絶知覚が気分を与える影響について明らかにする。次に、拒絶過敏性の高い者における拒絶体験のプロセスを構成する各要素について、拒絶過敏性の低い者との比較を通して検討する。続いて、第4章では、相手からの拒絶を予期した際にそれを回避・阻止するための行動を収集し、生起頻度が気分、対人ストレス、および抑うつつに与える影響について検討を行なう。また、拒絶過敏性の高い者の拒絶阻止の行動の特徴につい

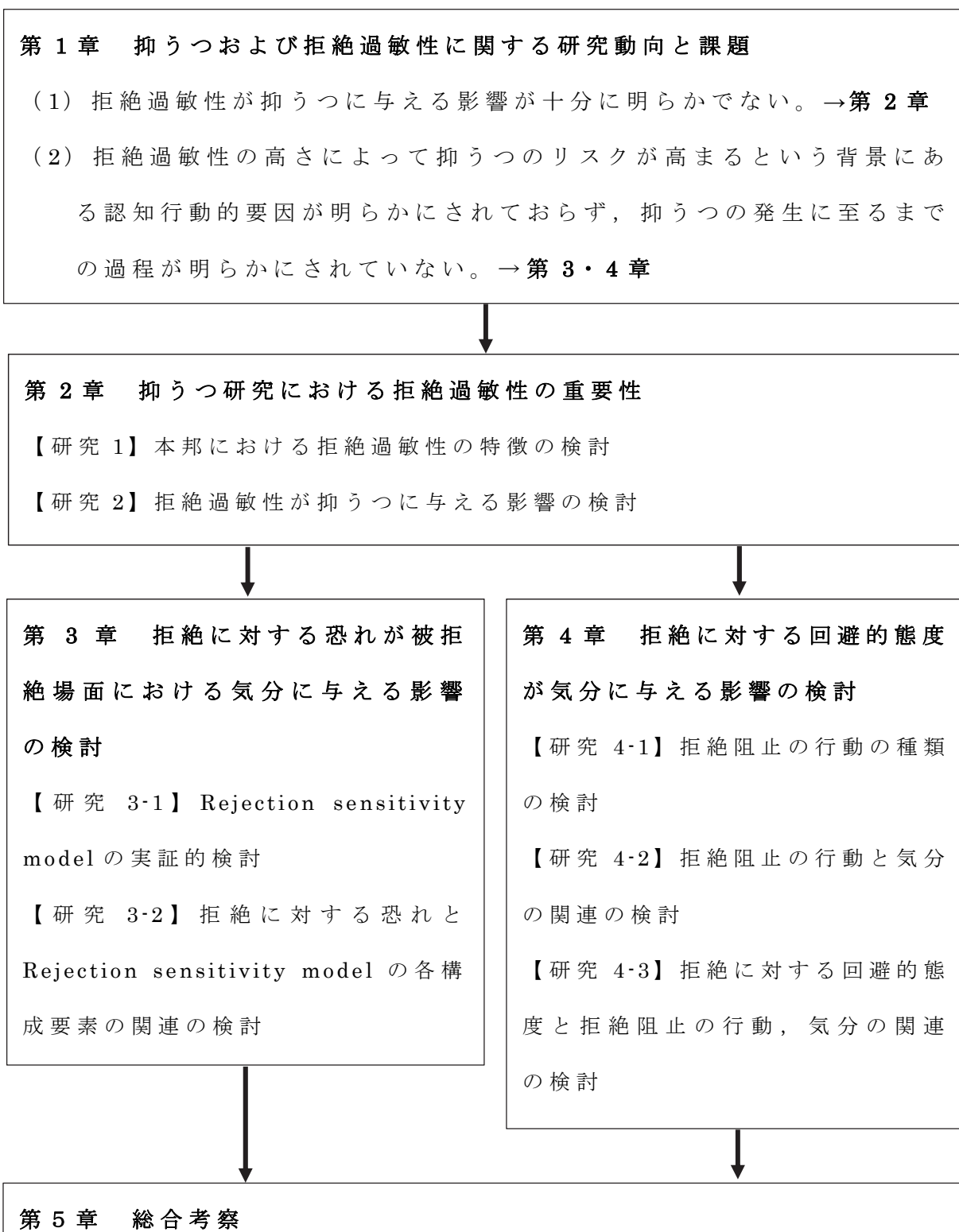


Figure1-6 本研究の構成

第1章 拒絶過敏性に関する研究動向と課題

て、拒絶過敏性の低い者との比較を通して検討を行なう。最後の第5章では、第2章から第4章までの結果を受けて、本研究において得られた成果についてまとめる。さらに、これらの知見に基づき、拒絶過敏性の高さがゆえに抑うつが高い者に対する支援の方向性について考察を述べる。そして最後に、本研究の課題と今後の展望について考察する。

なお、本研究は、早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号 2010-250, 2011-224, 2013-251, 2014-283, 2015-291）。

第2章 抑うつ研究における拒絶過敏性の重要性

第1節 本章のねらい

これまでの研究において、さまざまな研究によって抑うつの発生・維持のメカニズムが検討されてきた。そしてこれまで提唱されてきた理論のほとんどは、素因ストレスモデルに該当し、外的なストレスの体験を前提として、個人の有する抑うつの脆弱性の相互作用から抑うつの発生・維持を説明しており、抑うつが外的なストレスをきっかけとして発生することについては共通見解が得られているといえる。

また、日常生活で経験しうるさまざまなストレスのうち、特に対人関係におけるストレスが抑うつに強く影響すること（たとえば、Eley & Steavenson, 2000）、この対人ストレスのなかでも、拒絶を含むイベントが特に抑うつの発症に影響することが示されている（Slavich, 2009）。このように他者に拒絶されることは誰にとってもネガティブな出来事であり、心身に影響を与えうる。しかしながら、拒絶過敏性の高い者は特に、人間関係のなかでこのような拒絶に過敏であり、拒絶されたと知覚しやすい傾向を示す。つまり、ストレス生成モデルの観点から、拒絶過敏性の高さは対人ストレスの経験と関連し、抑うつの高さに影響することが考えられる。また、海外においては、拒絶過敏性は（1）対人意識、（2）称賛欲求、（3）分離不安、（4）臆病さ、（5）内的自己の脆弱性の5つの下位因子により構成される概念であることが示されている（Boyce & Parker, 1989）。しかしながら、本邦における拒絶過敏性の特徴については明らかにされておらず、測定尺度も未整備であ

ることから、これら拒絶過敏性の各特徴と対人ストレス、抑うつとの関連については明らかにされていない。

そこで研究1では、まず拒絶過敏性の測定ツールを整備するとともに、本邦における拒絶過敏性の特徴を明らかにする。次に、研究2として、研究1で明らかにされた拒絶過敏性の各特徴および対人ストレスが抑うつに与える影響について検討を行う。以上により、抑うつに影響を与える要因として拒絶過敏性を扱うことの重要性について検討することを本章のねらいとする。

第2節 本邦における拒絶過敏性の特徴の検討【研究1】

第1項 背景と目的

DSM-IV (APA, 1994) において非定型の特徴が大うつ病の下位分類として導入されて以降、それまで幼少期の養育者からの拒絶により形成されるパーソナリティとして定義された *Rejection sensitivity* (Downey & Feldman, 1996)、あるいは抑うつリスクとなるパーソナリティとして臨床経験から定義された *Interpersonal sensitivity* (Boyce & Parker, 1989) が着目され、これらの「自身の不十分さの知覚と、他者の行動の誤解を特徴とし、拒絶に対する恐れや不快感を引き起こす」(Harb et al., 2002) とする *Interpersonal rejection sensitivity* に包括されるこれらの概念を扱った研究数が急増した。たとえば、先行研究において、拒絶過敏性の高さは、社会的場面と学習場面における自己肯定感や学習場面におけるパフォーマンスの低さ、うつ症状の高さと関連すること (McCabe, Blankstein, & Mills, 1999)、う

うつ症状のリスクを増大させること (Ayduk, Downey, & Kim, 2001) などの知見が得られている。しかしながら、前述の研究をはじめとした実証的研究は全て海外で行われたものであり、本邦における知見は限られている。

その一因として、拒絶過敏性を測定することのできる尺度の未整備が挙げられる。海外においては、拒絶過敏性を測定する尺度として IPSM (Boyce & Parker, 1989) や RSQ (Downey & Feldman, 1996) があり、下位因子に拒絶過敏性を含む尺度としては The Hopkins Symptom Checklist (Derogatis, Lipman, Rickels, Uhlenhuth, & Covi, 1974) や Temperament & Personality Questionnaire (Parker, Manicavasagar, Crawford, Tully, & Gladstone, 2006) などが開発されており、中でも IPSM が広く用いられている。IPSM は 5 つの下位因子 (対人関係に対する意識, 賞賛欲求, 分離不安, 臆病さ, 内面の脆弱性) により構成され、うつ発症のリスクを測定するために開発された、対人関係における拒絶過敏性を測定する自己記入式尺度である。IPSM は 1994 年に短縮版が作成されており (Todd, Boyce, Heath, & Martin, 1994), 短縮版では原版から臆病さを除いた 4 因子構造であることが示されている。

本邦においては、拒絶過敏性と類似した概念として対人的傷つきやすさ尺度の開発が試みられているが (鈴木・小塩, 2002), 項目数が 10 項目と不十分で拒絶過敏性の概念を網羅しているとは言い難い。例えば、臆病さや非主張性、賞賛欲求に相当する項目は設けられていない。そのため、拒絶過敏性についての理解を深め、治療の際に適切に扱うためには、拒絶過敏性という概念の内容を十分に反映した、日本語版 IPSM が必要であるといえる。

そこで、研究1では、本邦におけるIPSMの因子構造について明らかにするとともに、信頼性について検討することで、本邦における拒絶過敏性の特徴について明らかにすることを目的とする。なお、原版を作成したBoyce & Parker (1989)に倣い、拒絶過敏性は抑うつ状態へのリスクとして広く指摘されており、ある疾患を有する者のみに特異的にみられる特性ではないことから、本研究においても因子構造および信頼性の検討には非臨床群のデータを用いる。

第2項 方法

1. 調査対象者

4年制大学に通う大学生326名（男性164名，女性159名，不明3名，平均年齢20.02歳， $SD=1.38$ ）。除外基準は，精神科通院歴があること，カウンセリング歴があること，向精神薬服用中であること，のいずれかに該当する者とした。

2. 調査期間

調査は2011年6月～2012年5月の間に実施された。

3. 調査手続き

調査は講義終了後の時間を用いて一斉に無記名式で行われた。まず，調査の主旨を説明し，調査協力は任意であることやいつでもやめることができること，回答の有無および内容は学業成績に影響しないことが伝えられた。調査協力に同意が得られた者に対して，質問紙への回答が求められた。さらに，回答後には，否定的な気分状態などが持続した場合に備え，研究実施者の連絡先，リラクセーションの実施方法が解説された用紙が配布された。さらに，連絡があった場合には，臨床心理士である研究実施者が早急に対応できるように配慮した。なお，調査実施中，

実施後ともに想定され得た問題は生じなかった。

4. 調査材料

- (1) 人口統計学データ：性別および年齢の記入を求めた。
- (2) 拒絶過敏性：日本語版 IPSM 暫定版。日本語訳は筆頭著者が作成し、米国での生活経験がありかつ臨床心理学を専攻する大学院生2名により、日本語表現の修正およびバックトランスレーションが行われた。その後、原著者によりバックトランスレーションの内容について確認が行われ、邦訳が完成した。日本語版 IPSM は全36項目からなり、4件法（1：全然あてはまらない、2：ややあてはまらない、3：ややあてはまる、4：とてもあてはまる）で回答を求めた。
- (3) 対人的傷つきやすさ：対人的傷つきやすさ尺度（小塩・鈴木，2002）。10項目からなり、「全くあてはまらない」～「とてもあてはまる」の4件法で回答を求めた。なお、この尺度の出典は発表論文集であるが、信頼性および妥当性が十分に検証されているとともに、項目の内容が拒絶過敏性の併存的妥当性の検討に適していると判断した。

5. 倫理審査

本研究は、調査を実施した大学（承認番号：2010-250，2011-042；総-第4-12号）および対象患者を診療する機関の倫理審査委員会により承認を得て実施された。

6. 分析方法

まず、研究の除外基準に該当する対象者のデータを削除し、最終的な分析対象者を選出した。欠損値の個数が尺度項目数の10%を超える回答は尺度ごとに分析から除いた。その上で、項目分析としてI-T分析を行った。次に、尺度の因子構造について明らかにするため、探索的因子分

析を行った。続いて、尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出した。また、併存的妥当性の検討のため、IPSMの下位因子得点および合計得点と対人的傷つきやすさ尺度得点の相関係数を算出した。その後、高次因子を仮定し、確証的因子分析を実施した。

分析には、IBM SPSS20.0 for Windows および Amos21.0 for Windows を用いた。

第3項 結果

研究の除外基準に該当する対象者のデータを削除し、最終的に301名（男性151名、女性147名、不明3名、平均年齢19.67歳、 $SD=1.57$ ）が分析対象となった。

1. 項目分析

全36項目のうち、天井効果のみられた1項目、およびI-T分析の結果、項目と、その項目を除いた合計得点との間に有意な相関が認められなかった2項目を除外し、最終的に33項目を因子分析の対象とした。

2. 尺度の因子構造

日本語版IPSMの因子構造を明らかにするため、健常者のデータについて、最尤法による探索的因子分析を行った。原版IPSMが5因子であることに加え、スクリープロットの形状からも、5因子解が妥当であると考えられたため、因子数を5因子に指定し、プロマックス回転を用いた最尤法による因子分析を行った。共通性の低い項目、因子負荷量が基準値（0.40）に満たない項目、複数の因子に基準値（0.35）を超える因子負荷量を示した項目を除外し、同様の手続きにて因子分析を繰り返した結果、最終的に5因子27項目が抽出された（Table2-1）。除外された3項目は、そのうち2項目が原版では「対人関係の意識」、4項目が

Table2-1 日本語版 Interpersonal Sensitivity Measure の探索的因子分析結果 (N = 301)

Items (Total of the : $\alpha=.93$)	Factor loadings				
	I	II	III	IV	V
I. 関係破綻の不安 ($\alpha=.79$)					
6 誰かに怒られると、心が傷つく	0.73	0.11	-0.06	0.02	-0.12
4 自分のしたことをもし誰かに批判されたら、いやな気分になる	0.70	0.04	0.01	-0.10	0.04
10 もし誰かが私を動揺させたら、それを気にせずにはいられない	0.63	-0.09	-0.04	0.04	0.15
28 友人とけんかをした後は、仲直りするまで落ち着かない	0.59	0.26	0.12	-0.08	-0.23
7 誰かに無視されたときは、いつでもそれに気が付く	0.56	-0.02	-0.08	0.01	0.21
9 親密な他者を失ってしまうのではないかと心配である	0.43	-0.19	0.02	0.11	0.28
II. 他者を傷つける不安による非主張性 ($\alpha=.79$)					
22 他の人に対して怒ることは難しいことだと思う	0.06	0.81	-0.05	0.02	-0.10
26 相手を傷つけてしまうことが心配なため、人に怒ることはしない	-0.05	0.66	0.08	-0.04	0.15
23 他の人の心を傷つけてしまっていないか心配である	0.18	0.49	0.11	0.06	0.01
27 他の人を批判してしまっていないか心配である	0.05	0.47	-0.06	0.01	0.34
24 他の人を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほう	0.06	0.46	-0.11	0.14	0.08
25 私は誰に対しても礼儀正しい	-0.04	0.41	0.01	-0.03	-0.08
III. 批判されることへの懸念 ($\alpha=.91$)					
1 他の人から自分がどう思われているか、心配である	0.02	-0.05	1.07	0.04	-0.16
2 みんなが自分のことをどう感じているか気になる	-0.08	0.03	1.04	-0.02	-0.07
29 他の人がどう感じているかを常に気にしている	0.10	0.04	0.47	0.01	0.30
5 自分の言動や行動が批判されるのではないかと心配である	0.28	0.10	0.42	-0.04	0.28
IV. 社会的自己像と真の自己像の不一致 ($\alpha=.81$)					
13 もし他の人が本当の私を知ったら、私のことを嫌いになるだろう	0.09	0.03	-0.01	1.05	-0.15
12 本当の私がどんな人物か知ったら、他の人はわたしを見下すだろう	-0.07	0.06	0.02	0.78	0.10
14 本当の自分を他の人に知ってほしくない	-0.10	-0.01	-0.01	0.55	0.12
36 他の人は私のことを分かっていないと思う	-0.12	-0.01	0.05	0.48	0.17
V. 他者評価追従 ($\alpha=.78$)					
32 拒絶されることが怖いので、自分の意見を言わないようにしている	-0.26	0.30	-0.02	0.01	0.66
18 批判されるのではないかと常に恐れている	0.15	0.09	0.03	0.00	0.58
8 良いことをしたと他の人に言われた時のみ、そう信じられる	0.15	-0.13	-0.12	0.03	0.56
11 知り合いから賞賛されなければ、心から幸せを感じることはない	0.26	-0.13	-0.13	0.04	0.52
35 他の人から気に入られていると確信できたことはない	-0.09	-0.08	0.21	0.17	0.45
33 自分の親しい相手をよるこぼせるためなら、私は自分のやり方も変えるだろう	0.00	0.14	-0.10	-0.06	0.43
3 他の人にどう思われているかによって、自分の価値が決まると思う	0.25	-0.18	0.24	0.01	0.41
Factor correlation					
I	-				
II	0.45	-			
III	0.65	0.55	-		
IV	0.46	0.41	0.53	-	
V	0.60	0.47	0.66	0.63	-

「賞賛欲求」，3項目が「分離不安」に該当した。

第 I 因子に因子負荷量の高い6項目は，「誰かに怒られると心が傷つく」，「もし誰かが私を動揺させたら，それを気にせずにはいられない」など，対人関係における否定的な出来事や関係性の悪化に対して意識が向くことを表す項目であった。そのため第 I 因子を「関係破綻の不安」と命名した。

第 II 因子に因子負荷量の高い6項目は，「他の人に対して怒ることは難しいことである」，「他の人の心を傷つけてしまっていないか心配である」など，自分が相手を傷つけてしまうことへの懸念と，それによる自己主張の困難および消極性を表す項目であった。そのため第 II 因子を「他者を傷つける不安による非主張性」と命名した。

第 III 因子に因子負荷量の高い4項目は，「他の人から自分がどう思われているか心配である」，「自分の言動や行動が批判されるのではないかと心配になる」など，自分が相手に悪く思われていないかどうかに対する意識を表す項目であった。そのため第 III 因子を「批判されることへの懸念」と命名した。

第 IV 因子に因子負荷量の高い4項目は，「もし他の人が本当の私を知ったら，私のことを嫌いになるだろう」，「本当の自分を他の人に知ってほしくない」など，社会的場面で振る舞っている自己像と真の自己像に相違があること，そして真の自己像に対する評価が低いことを表す項目であった。そのため第 IV 因子を「社会的自己像と真の自己像の不一致」と命名した。

第 V 因子に因子負荷量の高い4項目は，「拒絶されることが怖いので，自分の意見を言わないようにしている」，「よいことをしたと人に言われた時のみ，そう信じられる」など，自己に価値の判断基準がなく

他者からの保障がないと判断に確信が持てないこと、または他者から拒絶されることを避けるために他者の意見に従うことを表す項目であった。そのため第V因子を「他者評価追従」と命名した。各因子間の相関は、中程度から強い正の相関 ($r = .41 \sim .66$) を示した。

3. 信頼性の検討

日本語版 IPSM の信頼性を検討するため、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、第I因子は $\alpha = .79$ 、第II因子は $\alpha = .79$ 、第III因子は $\alpha = .91$ 、第IV因子は $\alpha = .81$ 、第V因子は $\alpha = .78$ 、さらに尺度全体では $\alpha = .93$ という値が得られた。

4. 高次因子構造の検討

得られた5つの下位因子は、「関係破綻の不安」、「社会的自己像と真の自己像の不一致」、「批判されることへの懸念」のように主に拒絶を恐れる認知的特徴と、「他者を傷つける不安による非主張性」、「他者評価追従」のように主に拒絶を避ける態度を表す内容の2つに大別されると考えられたため、このような高次因子構造を仮定し、確証的因子分析を実施した (Figure2-1)。その結果、モデル適合度は、 $GFI=0.99$ 、 $AGFI=0.95$ 、 $CFI=1.00$ 、 $RMSEA=0.07$ であり、十分に高い適合性を示した。

5. 併存的妥当性の検討

日本語版 IPSM の併存的妥当性を検討するため、健常者のデータについて、IPSM の合計得点および各因子得点、対人的傷つきやすさ尺度の合計得点について Pearson の相関係数を算出した (Table2-2)。その結果、 $r = .68$ の高い相関が認められた。さらに、下位因子についても、それぞれ高い正の相関を示した ($r = .40 \sim .64$)。

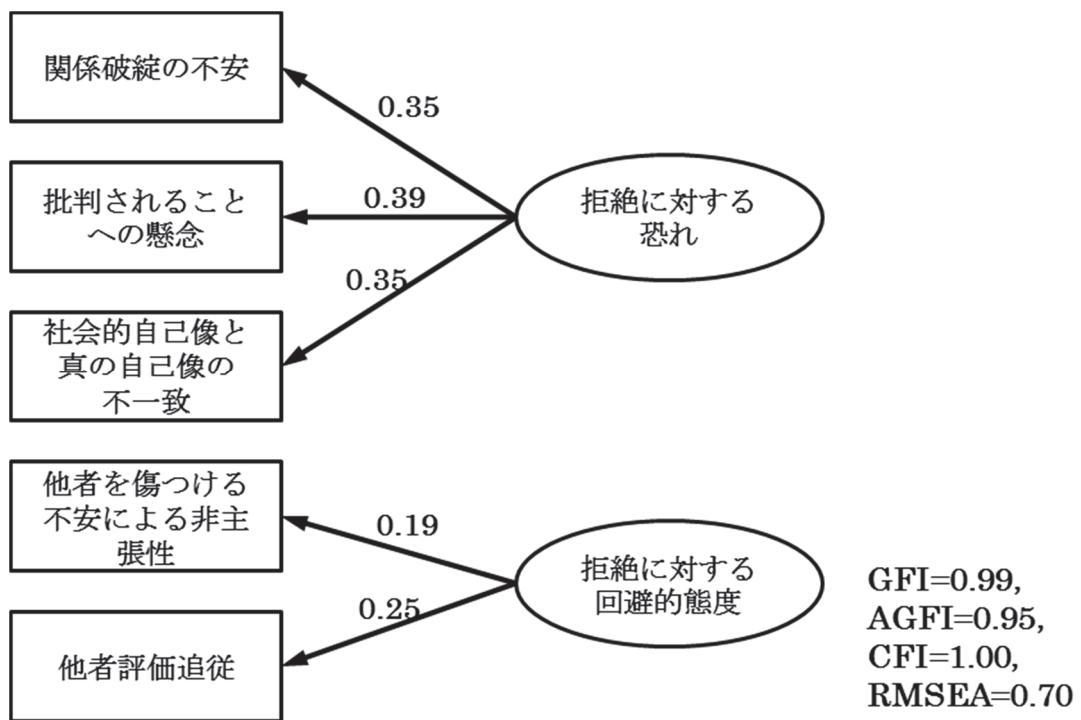


Figure2-1 確証的因子分析結果

注：図の煩雑さを避けるため、誤差変数は省略

Table2-2 拒絶過敏性と対人的傷つきやすさの相関 ($n = 301$)

		日本語版IPSM			
		他者を傷つける 不安による非主 張性	批判されること への懸念	社会的自己像と 真の自己像の不 一致	他者評価追従
		関係破壊の不安			Total
対人的傷つきやすさ尺度	0.58 ^{***}	0.40 ^{***}	0.49 ^{***}	0.49 ^{***}	0.64 ^{***}
					0.68 ^{***}
		*** $p < .001$			

第4項 考察

研究1の目的は、IPSMの日本語版を作成し、その信頼性、妥当性を検討することであった。その結果、日本語版IPSMは「関係破綻の不安」、「他者を傷つける不安による非主張性」、「批判されることへの懸念」、「社会的自己像と真の自己像の不一致」、「他者評価追従」の5因子、27項目から構成されることが明らかとなった。5因子という因子数は原版と同じであるが、その下位因子の解釈は完全に一致するものではなかった。

原版IPSMと日本語版IPSMの因子構造を比較すると「他者を傷つける不安による非主張性」、「批判されることへの懸念」、「社会的自己像と真の自己像の不一致」はそれぞれ原版における「臆病さ」、「対人関係に対する意識」、「内面の脆弱性」と項目の内容が概ね共通しているが、他の2因子は因子のまとまりを構成する項目がそれぞれ数項目ずつ異なる。日本語版IPSMの「関係破綻の不安」は原版の「対人関係に対する意識」と「賞賛欲求」の項目から構成され、主に「対人関係に対する意識」の項目で構成される「批判されることへの懸念」との因子間相関は $r = .65$ と高い値であった。また、日本語版IPSMを作成する因子分析の過程で原版の「分離不安」（e.g. 人に別れを告げる時、不安になる）および「賞賛欲求」（e.g. 誰かからお世辞を言われるとうれしい）に含まれた項目の約半数が削除され、新たに「他者評価追従」と解釈される因子が構成された。この因子は、「良いことをしたと人に言われた時のみ、そう信じられる」に代表されるように価値の判断基準における依存を表す項目であり、日本と欧米の文化差を表すと考えられる。

文化比較研究では、欧米においては個人は他者から独立し独自性を主張することが大切であるという立場の「相互独立的自己観」、アジアに

においては個人は個別的ではなくさまざまな人間関係の一部であるという立場の「相互依存的自己観」が特徴的に見られるといわれている（Markus & Kitayama, 1991）。後者では，日本を含むアジアの文化において認められるための必要条件は，社会的関係に所属し，周囲と相互依存的・協調的な関係を持続することにより，自己の社会的存在を確認することから，自己実現を図ることである，と述べられている。つまり，今回新たに「他者評価追従」因子が構成されたことにはこうした文化的背景が関係していると考えられる。

日本語版 IPSM の信頼性については，この尺度は十分な内的一貫性を備えた尺度であることが示された。また類似概念として発展した，対人関係における傷つきやすさを測定する「対人的傷つきやすさ尺度」と強い相関関係にあった。以上のことから，日本語版 IPSM は，拒絶過敏性を測定する主観的評定尺度として十分な信頼性および妥当性を有する尺度であると考えられる。

さらに，拒絶過敏性を構成する 5 つの下位因子は，大きく 2 つの高次因子に大別されることが示された。「拒絶に対する恐れ」を構成する因子は，「関係破綻の不安」，「批判されることへの懸念」，「社会的自己像と真の自己像の不一致」であり，これらは恐れや懸念，自己像といった個人の内的な現象，つまり拒絶されることを恐れる認知的な特徴を表しているといえる。一方で，「拒絶に対する回避的態度」を構成する因子は，「他者を傷つける不安による非主張性」と「他者評価追従」であった。これらはいずれも，他者との不和を避け受容されるために自己の行動を選択する傾向を指すものであり，つまり自己の意見を主張せずに相手に合わせたり，相手の望む振る舞いをするといった行動的特徴や，これらの行動を良しと考えるなど行動につながる態度を表していると捉

えることができる。

最後に、本研究の限界点として、併存的妥当性の検討に用いた対人的傷つきやすさ尺度が学術性の高い論文の引用でない点が挙げられる。尺度作成にあたり適切な方法論が用いられており、表す内容についても慎重に吟味したものではあるが、学術性が担保された尺度を用いて複数の角度から IPSM の妥当性を検討することは今後の課題である。

第3節 拒絶過敏性が抑うつに与える影響の検討【研究2】

第1項 背景と目的

近年、心理的問題の中でも抑うつは、日常的にも経験されやすいものであるとみなされ（たとえば、Roberts, 1999）、その発症・維持メカニズムや広義の予防について、基礎研究から臨床研究に至るまで多くの研究がなされている。

抑うつ の 発 生 ・ 維 持 に つ い て は 、 こ れ ま で の と こ ろ 主 に 素 因 ス ト レ ス モ デ ル に 基 づ き 、 ス ト レ ス フ ル な イ ベ ン ト の 経 験 を 前 提 に 、 そ れ に 対 す る 各 抑 う つ の 理 論 に 挙 げ ら れ る 認 知 行 動 的 反 応 を 抑 う つ の 脆 弱 性 と し て 扱 っ た さ ま ざ ま な 研 究 が 蓄 積 さ れ て き た （ た と え ば 、 Beck の 認 知 理 論 : Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979 ; 坂 野 監 訳 , 2007 ） 。 抑 う つ の 代 表 的 な 心 理 的 要 因 の な か で も 、 た と え ば 抑 う つ の 持 続 ・ 重 症 化 を 取 り 上 げ た 理 論 で あ る 自 己 意 識 理 論 (Pyszczynski & Greenberg, 1987) , 反 応 ス タ イ ル 理 論 (Nolen-Hoeksema, 1991) , 抑 う つ 的 処 理 活 性 化 仮 説 (Teasdale, 1985) は 、 あ る 対 象 に つ い て 持 続 的 に 繰 り 返 し 考 え る こ と 、 つ ま り 「 反 す う 」 が 共 通 す る 要 素 で あ る 。 ま た 、 そ の ほ か の 抑 う つ の 心 理 的 要 因 に つ い て は 、 上 記 の 抑 う つ の 持 続 ・ 重 症 化 を 説 明 す る 理 論 と 異 な り 必 ず し も 反 す う 的 な 要 因 が 強 調 さ れ て い る わ け で は な い 。 し か し な が ら 、 た と え ば 認 知 モ デ ル に お い て は 、 う つ 病 初 期 の 患 者 が 抑 う つ に 特 異 的 な 考 え を 反 す う す る こ と で 他 の 刺 激 に 注 意 を 向 け る こ と が で き な く な り 、 抑 う つ が 悪 化 す る こ と が 考 え ら れ て い る (Kovacs & Beck, 1978) 。 ま た 、 原 因 帰 属 に つ い て は 、 帰 属 様 式 が 内 的 ・ 持 続 的 ・ 全 体 的 と い っ た 特 徴 を 持 つ い わ ゆ る 悲 観 主 義 の 者 も 、 だ か ら と い っ て す ぐ に 抑 う つ に 陥 る わ け で は な く 、 そ の 結 果 と し て 無 力 感 が 頻 繁 に 予 期 さ れ る

場合に抑うつに至ることが述べられている (Seligman, 1990)。これらのことから、認知がネガティブであることに加えて、その認知を繰り返し考えること（反すうすること）が抑うつを引き起こし、悪化させると考えられる。つまり、反すうが素因ストレスモデルの脆弱性の共通点であるといえる。このことから、反すう傾向の高さは、ストレスを経験した後に抑うつを引き起こし悪化させるプロセスにおける、主要な要因であると考えられる。

それに加えて近年、そもそもストレスを作り出しやすい個人の特徴があることが指摘され、そのような特徴が高い者はストレスの経験頻度自体が多いことで抑うつに至るというモデルが示されている。この現象を記述した理論は「ストレス生成モデル」(Hammen, 2006)と呼ばれ、ストレスの生成に至るまでのプロセスに着目し、抑うつへの個人差はその個人内の脆弱性によって引き起こされるストレスイベント、なかでも対人ストレスイベントの頻度自体が異なることによって生じていることを指摘している。実際に、抑うつ的な個人はそうでない者と比較して対人ストレスを中心とした **Dependent** なストレスを経験していることや (Hammen, 1991)、完璧主義傾向の高い者は、対人ストレスの経験頻度が高く、これらが抑うつを予測することが報告されている (Flett, Hewitt, Garshowitz, & Martin, 1997)。対人ストレスについては、さまざまな研究において、日常生活で経験される種々のストレスの中でもこの対人関係に関するストレスが特に強く抑うつに影響することが報告されており (たとえば, Eley & Steavenson, 2000)、対人ストレスのなかでも拒絶されるという経験が特にうつへのリスクとなることがいわれている。ここで、拒絶過敏性の高い個人は、拒絶を予期・知覚しやすいという特徴を有することから、主観的な拒絶体験を多く経験し

ていると考えられ、拒絶過敏性の高さはストレス生成モデルにおける重要な脆弱性となることが予想される。

以上のことから、抑うつの発生・維持について理解を深めるためには、ストレス生成モデルで取り上げられている対人ストレスおよびその背景としての拒絶過敏性と、素因ストレスモデルで扱われている反すうの両方の観点から抑うつへの影響を多角的に検討することが重要であると考えられる。

そこで研究2では、これまで抑うつへの影響が検討されてきた素因ストレスモデルの各脆弱性の共通要因である反すうに加え、ストレス生成モデルの脆弱性としての拒絶過敏性、および経験された対人ストレスを包括的に扱い、抑うつに対するこれらの影響について検討することを目的とする。

第2項 方法

1. 調査対象者

4年制大学に通う大学生70名（男性23名、女性45名、不明2名、平均年齢20.41歳、 $SD=2.28$ ）。除外基準は、精神科通院歴があること、カウンセリング歴があること、医師による処方薬を服用中であること、のいずれかに該当する者とした。

2. 調査期間

調査は2015年12月～2016年1月の間に実施された。

3. 調査手続き

調査は講義終了後の時間を用いて一斉に無記名式で行われた。まず、調査の主旨を説明し、調査協力は任意であることやいつでもやめることができること、回答の有無および内容は学業成績に影響しないことが伝

えられた。調査協力に同意が得られた者に対して、質問紙への回答が求められた。さらに、回答後には、否定的な気分状態などが持続した場合に備え、研究実施者の連絡先、リラクセーションの実施方法が解説された用紙が配布された。さらに、連絡があった場合には、臨床心理士である研究実施者が早急に対応できるように配慮した。なお、調査実施中、実施後ともに想定され得た問題は生じなかった。

4. 調査材料

- (1) 人口統計学データ：性別および年齢の記入を求めた。
- (2) 拒絶過敏性：研究1で作成された日本語版 IPSM を使用した。
全27項目について、4件法（1：全然あてはまらない、2：ややあてはまらない、3：ややあてはまる、4：とてもあてはまる）で回答を求めた。
- (3) 抑うつ：日本語版 Beck Depression Inventory-II (BDI-II；小嶋・古川，2003)。21項目からなり、4件法で回答を求めた。
- (4) 反すう傾向：Rumination-Reflection Questionnaire (RRQ；高野，2008)の反芻因子を使用した。12項目からなり、4件法で回答を求めた。
- (5) 対人ストレス：対人ストレスイベント尺度（橋本，1997）のストレス度を使用した。対人ストレスサー30項目を挙げ、各出来事について、最近3ヶ月間に経験した場合に感じたストレスの程度をそれぞれ4件法で尋ねた。

5. 倫理審査

本研究は、調査を実施した大学（承認番号：2015-291）の倫理審査委員会により承認を得て実施された。

6. 分析方法

まず、研究の除外基準に該当する対象者のデータを削除し、最終的な分析対象者を選出した。欠損値の個数が尺度項目数の10%を超える回答は尺度ごとに分析から除いた。次に、各変数の関連について検討するため、IPSMの各下位因子、高次因子および合計得点、RRQの反すう得点、対人ストレスイベント尺度のストレス度（以下、対人ストレス）得点、BDI-II合計得点について、二変数の相関係数を算出した。続いて、拒絶過敏性、反すう、および対人ストレスが抑うつに与える影響について検討するため、BDI-II合計得点を目的変数とし、IPSM合計得点、対人ストレス得点、RRQの反すう得点を予測変数とした、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。

第3項 結果

研究の除外基準に該当する者は認められなかったため、回答が得られた70名（男性23名、女性45名、不明2名、平均年齢20.41歳、 $SD=2.28$ ）を分析対象とした。IPSM合計得点のヒストグラムを示す（Figure2-2）。

まず、各変数の関連について検討するため、IPSMの各下位因子、高次因子および合計得点、RRQの反すう得点、対人ストレス得点、BDI-II合計得点について、二変数の相関係数を算出した（Table2-3）。その結果、BDI-IIと各変数との相関は、IPSMの「拒絶に対する恐れ」が $r = .59$ ($p < .01$)と高く、他は「拒絶に対する回避的態度」が $r = .43$ ($p < .01$)、RRQの「反すう」とは $r = .34$ ($p < .01$)、対人ストレス得点とは $r = .40$ ($p < .01$)といずれも中程度の相関が認められた。ま

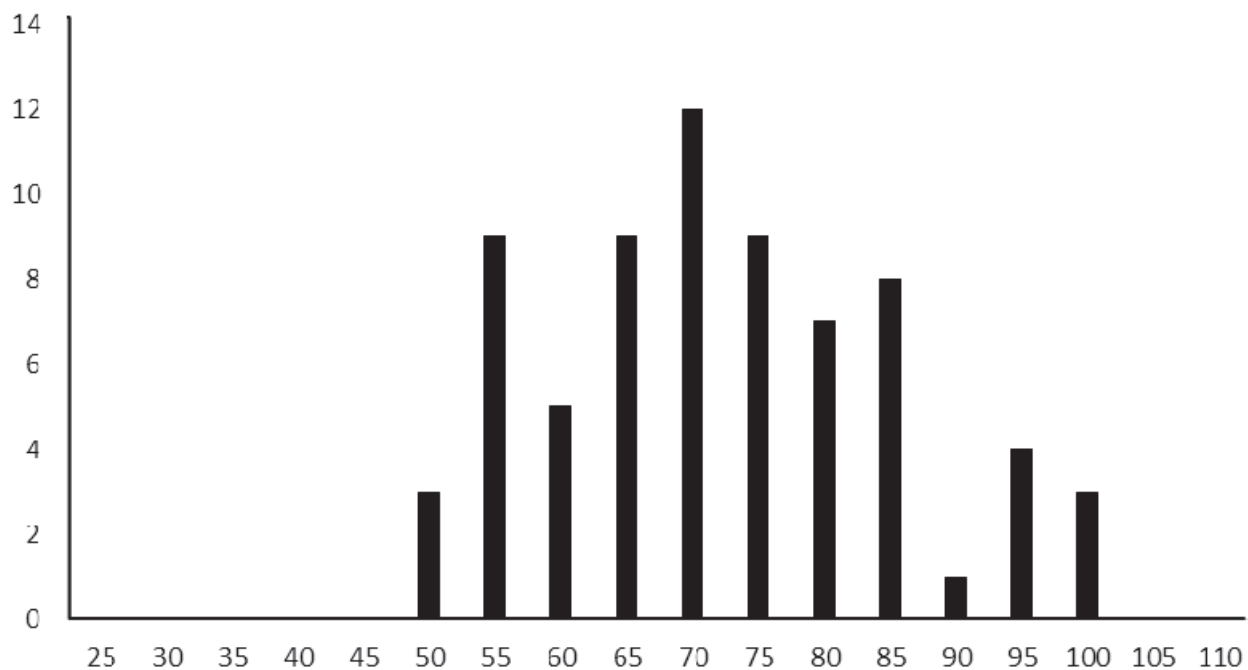


Figure2-2 拒絶過敏性の得点分布 (N = 66)

Table 2-3 各変数の相関 (N = 66)

	BDI-II		IPSM					RRQ	
	拒絶に対する恐れ	関係破綻の不安	批判されることの懸念	社会的自己像と真の自己像の不一致	拒絶に対する回避的態度	他者を傷つける不安による非主張性	他者評価追従	合計	反すう
BDI-II	-								
IPSM	.59**	.82**	.83**	.76**	.69**	.55**	.47**	.41**	.45**
拒絶に対する恐れ									
関係破綻の不安									
批判されることの懸念									
社会的自己像と真の自己像の不一致									
拒絶に対する回避的態度									
他者を傷つける不安による非主張性									
他者評価追従									
合計									
RRQ	.34**	.48**	.41**	.38**	.49**	.35**	.53**	.53**	-
対人ストレスイベント尺度	.40**	.46**	.36**	.32**	.21	.08	.29*	.36**	.18

** p < .01, * p < .05

た、IPSM と対人ストレスの相関については、「拒絶に対する恐れ」は対人ストレスと $r = .46$ ($p < .01$) と中程度であったのに対し、「拒絶に対する回避的態度」と対人ストレスとの間には有意な相関は認められなかった。IPSM と反すうの相関は $r = .53$ ($p < .01$) と高い値であった。反すうと対人ストレスの間には有意な相関は認められなかった。

次に、拒絶過敏性、対人ストレス、反すうが抑うつに与える影響について検討するため、BDI-II 合計得点を目的変数とし、IPSM 合計得点、対人ストレス得点、RRQ の反すう得点を予測変数とした、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した (Table 2-4)。その結果、重決定係数が有意であり ($Adjusted R^2 = 0.32$, $p < .001$)、IPSM 合計得点 ($\beta = 0.42$, $p < .001$) および対人ストレス得点 ($\beta = 0.26$, $p < .05$) が BDI-II 得点を有意に予測することが示された。

第4項 考察

研究2の目的は、これまで抑うつへの影響が検討されてきた素因ストレスモデルの各脆弱性の共通要因である反すうに加え、ストレス生成モデルの脆弱性としての拒絶過敏性、および経験された対人ストレスを包括的に扱い、抑うつに対するこれらの影響について検討することであった。

まず相関分析から、本研究で取り上げた、拒絶過敏性（拒絶に対する恐れ、拒絶に対する回避的態度）、対人ストレス、反すうはどれも抑うつと中程度以上の関連を示した。また、拒絶過敏性のうち「拒絶に対する恐れ」は対人ストレスと関連することが示された一方で、「拒絶に対する回避的態度」との間には有意な関連は認められなかった。この点

Table2-4 拒絶過敏性，対人ストレス，
反すうが抑うつに与える影響（ $N = 66$ ）

	BDI-II 合計
IPSM合計	0.42 ***
対人ストレスイベント合計	0.26 *
RRQ 反すう	
	R^2 0.57 ***
	<i>Adjusted R²</i> 0.32 ***

** $p < .01$, * $p < .05$

Note. IPSM: Interpersonal
Sensitivity Measure, RRQ:
Rumination-Reflection
Questionnaire, BDI-II : Beck
Depression Inventory.

については、対人ストレスイベント尺度に挙げられた項目はそのほとんどが、「知人と喧嘩した」、「知人と意見が食い違った」といった顕在的な出来事を表す項目や、「知人が自分のことをどう思っているのか気になった」、「相手が嫌な思いをしていないか気になった」といったように主に認知的な解釈による出来事で構成されていることによると考えられる。拒絶に対する恐れ、つまり拒絶を恐れる認知的特徴が高いほどこれらの認知的解釈の介在を想定した項目を脅威的に知覚し、一方で拒絶に対する回避的態度、つまり拒絶や相手との不和を避けるための予防的な行動を肯定的に捉えたり実際にそのような行動を多く取ることは、実際に顕在的なトラブルを予防できる場合や個人にとっての安心感につながる場合も考えられることから、このような対人ストレスとの間には有意な相関が認められなかったと考えられる。拒絶に対する恐れが対人ストレスと関連したことについては、他者から拒絶されることへの恐れ、つまり予期が高いことで対人関係における手がかりに敏感になるとともに、サインを検出した際のインパクトを高く認識する可能性が考えられる。Rejection sensitivity model (Levy, et al., 2001) において、このように拒絶されることを予期することで手がかりを知覚しやすくなり、過剰に反応するという一連の拒絶体験のプロセスが記述されている。本研究における結果は、この知見を支持するものと考えられる。

一方で、拒絶に対する回避的態度の高さは抑うつとは関連を示した。つまり、回避的態度を取り自己を抑えて相手の望みに合わせた行動を取る傾向の高さは、上記のような主に顕在的な項目により構成される対人ストレスイベントとの関連が認められなかったからといって必ずしも「ストレスや抑うつに関連しない良い行動である」というわけではなく、何らかの経路で抑うつに影響を与えていると考えられる。抑うつへの影

響としては、直接的な経路の他に、たとえば気疲れといったより潜在的な個人内の対人ストレスを引き起こすことによって、間接的な影響を与えている可能性が考えられる。

また、重回帰分析の結果から、拒絶過敏性は、従来の抑うつ研究で扱われてきた諸変数の共通要素である反すうと同時に扱った場合にも、抑うつに対して十分な説明力を有することが示された。拒絶過敏性、特に拒絶に対する恐れが高いことと、日常生活において経験している対人ストレスの多さは、抑うつを高めることが考えられ、これは Hammen (2006) により提唱されたストレス生成モデルの考え方を支持するものであった。

重回帰分析において反すうが除外された理由としては、拒絶過敏性との相関の高さによる多重共線性が考えられる。本研究においては拒絶過敏性、対人ストレス、反すうのそれぞれが抑うつに与える影響を検討することを目的としたため、各変数から抑うつへの直接効果を検証する目的で各分析を実施した。しかしながら、拒絶過敏性と反すうの関連については、縦断調査によって拒絶過敏性が反すうの増加を予測するという知見も報告されており (Pearson, Watkins, & Mullan, 2011)、本研究においても相関分析で両者の間には強い関連が認められている。Nolen-Hoeksema & Jackson (2001) は、関係性の維持を過度に気にしている者つまり拒絶過敏性の高い者は、相手との関係性がどのように進んでいるかをモニターするために反すうをしやすくなると述べている。また、ネガティブな事柄の再生や活性化は、拒絶に関するネガティブな記憶へのアクセシビリティを高め、反復的・反すう的思考を引き起こすと考えられている (Pearson, et al., 2011)。つまり、拒絶過敏性が対人ストレスを引き起こし、反すう傾向の高さが抑うつに影響するという

直線的な影響だけでなく、拒絶過敏性が反すうを高める経路も想定される。そのため今後は、縦断研究などでストレス生成モデルから素因ストレスモデルへのつながりを想定したモデルの検討を行うことで、抑うつの発生・維持メカニズムをより詳細に理解することができると考えられる。

以上の結果から、抑うつの高さを説明する際には従来の素因ストレスモデルによる理解に加え、ストレス生成モデル、つまり拒絶過敏性といった本人の認知行動的特徴によってストレスラーを作り出しているという視点を取り入れることで、より多角的な理解が可能になると考えられる。

第4節 本章のまとめ

第2章の目的は、本邦における拒絶過敏性の特徴を明らかにし、各特徴が抑うつに与える影響について明らかにすることで、抑うつ研究における拒絶過敏性の重要性について検討することであった。

研究1の結果から、本邦における拒絶過敏性は「関係破綻の不安」、
「他者を傷つける不安による非主張性」、
「批判されることへの懸念」、
「社会的自己像と真の自己像の不一致」、
「他者評価追従」の5つの下位因子により構成される概念であり、さらにこれらは他者から拒絶されることを恐れる認知的特徴をあらわす「拒絶に対する恐れ」と、他者から拒絶されることを避けるために相手に合わせて行動を選択したり、そうすることを良しと考える傾向をあらわす「拒絶に対する回避的態度」の2つの特徴に大別されることが示された。

さらに研究2の結果から、拒絶過敏性や対人ストレスの高さは抑うつに対して十分な予測力を有することが示された。

以上のことから、抑うつの発生・維持を説明する際には拒絶過敏性といった本人の認知行動的特徴によって対人ストレスを作り出しているというストレス生成モデルの視点を取り入れることで、従来の素因ストレスモデルによる理解を補完する形でより精緻に理解することが可能になると考えられる。

さらに、拒絶過敏性のなかでも他者から拒絶されることに対する予期や脅威といった認知的な特徴をあらわす「拒絶に対する恐れ」が対人ストレスと関連を示したことは、Levy et al. (2001) による *Rejection sensitivity model* にあるように、拒絶されることへの予期が知覚を高めるプロセスを支持する結果であったと考えられる。

また、拒絶されることを避けるために周囲に合わせるなどの予防的対応を取る行動的特徴や、そのような行動を肯定する姿勢をあらわす「拒絶に対する回避的態度」は、この特徴が高いことによって顕在的なストレスとなりうる出来事を阻止できる可能性があることから対人ストレスとは関連しなかったが、抑うつとは関連を示した。つまり、拒絶されないうためという目的で相手に合わせる傾向の高さは、客観的なストレスとなる出来事では測定しきれない、たとえば気疲れといった潜在的な対人ストレスを生じさせることで抑うつを高める可能性が考えられる。

第3章 拒絶に対する恐れが被拒絶場面における気分を与える影響の検討

第1節 本章のねらい

抑うつに影響を与える対人ストレスとしては、「拒絶」、「軽蔑」、「排斥」などさまざまな現象が取り上げられているが、Leary（2001）は、これらには「相手が自分との関係を低く評価したと捉える」認知的特徴に共通点があると指摘し、これらの体験をまとめて拒絶体験として扱っている。ストレスについては、客観的にはネガティブと判断されない出来事であっても、個人の内側でネガティブな出来事として知覚されれば、その出来事はストレスとみなされることが指摘されていることから（Cohen et al., 1997 小杉監訳 1999）、対人関係における出来事の客観的な種類や強度のみならず、拒絶されたと捉えやすい個人の特徴を扱う必要がある。

拒絶過敏性が高い者は主観的な対人ストレスを多く経験するため、抑うつをはじめとしたストレス反応を多く生じやすいと考えられる。しかしながら、拒絶過敏性はパーソナリティ特性として定義されており、パーソナリティといった個人の特性的側面は変容が困難であるとされていることから、有効な介入方法は提案されてこなかった。拒絶過敏性が個人の抑うつに与える影響について理解を深め、心理療法において適切に扱われるためには、個人のある程度安定的な認知行動的特徴としての拒絶過敏性の高さがあらかず具体的な現象や、拒絶過敏性が高い者の被拒絶場面における認知行動的特徴について記述することが重要である。

第3章では、拒絶過敏性の認知行動的特徴を説明した Rejection sensitivity model (Levy et al., 2001) に基づき、拒絶の主観的な体験にかかわる拒絶予期、拒絶知覚といった認知的プロセスについて、拒絶過敏性の高い者の特徴について明らかにすることを目的とする (Figure3-1)。

第2節 Rejection sensitivity model の実証的検討【研究3-1】

第1項 背景と目的

拒絶体験を認知行動的に説明するモデルとして、Levy et al. (2001) は、「拒絶予期が高いことで拒絶の手がかりに敏感になり、拒絶を知覚した際の反応が大きく、一連の拒絶体験により次の予期が高くなる」循環をあらわした Rejection sensitivity model を提唱している。このモデルでは、拒絶体験を拒絶予期、拒絶知覚といった認知的要素と反応の3つに分け、過去の拒絶経験等により拒絶されることに対する予期が形成され、それにより拒絶の知覚しやすさや、不適応的な認知、感情、行動的反応が生じることにより、さらに次の状況における拒絶予期が高まるという悪循環により、拒絶予期が自己充足的に強化される認知的プロセスが説明されている。拒絶体験をこの3要素で捉えることで、拒絶過敏性の高い者の、被拒絶場面における特徴や、過敏性の亢進についてより具体的に検討することができると考えられる。

しかしながら、社会心理学の領域で主に検討されてきた、拒絶をテーマとした実験的研究では、そのほとんどにおいて拒絶予期は扱われておらず、実験操作により被験者に拒絶体験をさせた上で拒絶された後の

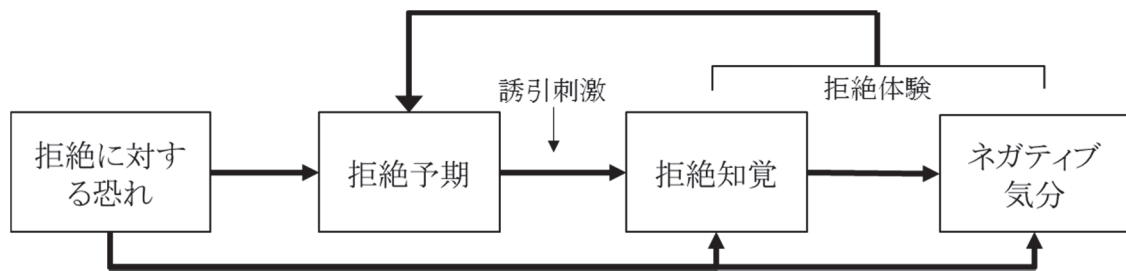


Figure3-1 研究3の仮説モデル

反応について検討を行っている。脳画像研究においては実験において拒絶予期について言及した研究があり、Somerville, Hertherton, & Kelley (2006), Bolling, Pitskel, Deen, James, McPartland, Mayes, & Pelphrey (2011), Kawamoto, Onoda, Nakashima, Nittono, Yamaguchi, & Ura (2012) が挙げられる。これらの研究においては、社会的状況における拒絶には「公平な扱いを受けるだろう、受容されるだろう」といった暗黙の了解に反する、つまり予期違反の要素が含まれるとし、排斥と予期違反を分けて測定することを目的としている。Somerville et al. (2006) においては、別の参加者とされる人物の顔写真を呈示し、その人物が自分のことを好むと思うかを尋ね、それに対する正誤のフィードバックを行うことで、予期違反と拒絶を分けている。Bolling et al. (2011) では、サイバーボールの対照課題としてサイバーシェイプ課題を実施している。サイバーシェイプ課題はサイバーボールと同様3名で行うゲームであるが、ボールの代わりにシェイプ（図形）を用い、一球ごとに変形する図形を、受け取ったら図形に対応する相手に投げる課題である。予期違反条件においては、PCプレイヤーがルールとは異なる相手に図形を投げることで予期違反を体験させている。Kawamoto et al. (2012) ではサイバーボール課題において、予期に反してボールが多く回ってくる過剰受容条件を設けている。しかしながら、これらの研究においても拒絶場面における予期、知覚、反応は測定されおらず、Rejection sensitivity model を実証した研究は見当たらない。

特に、拒絶予期と拒絶知覚については、先述の脳画像研究における分析の結果、3本とも排斥と予期違反は脳の活動領域が異なると結論付けている。具体的には、Somerville et al. (2006) においては前部帯状回背側部が予期違反を、前部帯状回腹側部が社会的フィードバック（拒

絶)に関連, Kawamoto et al. (2012)においては右腹外側前頭前皮質は社会的痛みの制御に, 前部帯状回背側部は排斥の検知に関連することが示唆されている。これらのことから, 拒絶過敏性が高い者における拒絶の知覚しやすさは必ずしも予期違反つまり予期と結果の差異による期待外れによるものではなく, 先行研究において述べられているように, 予期が高まることにより拒絶の手がかりに敏感になっている可能性が考えられる。しかしながら, 予期を測定し, 予期が知覚を高める可能性について実証する研究は行われていない。

そこで, 研究 3-1 では, 実験場面において拒絶状況を設定し, 設定した拒絶場面における拒絶予期, 拒絶知覚, 気分反応を測定し, それらの関連を明らかにする (Figure3-2)。

第2項 方法

1. 対象者

実験参加者は, 健常者 37 名 (男性 12 名, 女性 25 名, 19.32 ± 1.29 歳) であった。参加者には, 実験参加への謝礼として 1500 円が支払われた。参加者に対しては, 実験の詳細について口頭および書面にて説明を行い, 書面にて同意を得た。

2. 調査材料

- (1) 人口統計学データ: 性別および年齢の記入を求めた。
- (2) 気分: 日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS; 川人・大塚・甲斐田・中田, 2011)
- (3) 拒絶知覚: 「3 人に均等に回った時を 33% とすると, 直前のブロックで何% 自分に回ってきたと思うか」について整数で回答を求めた。

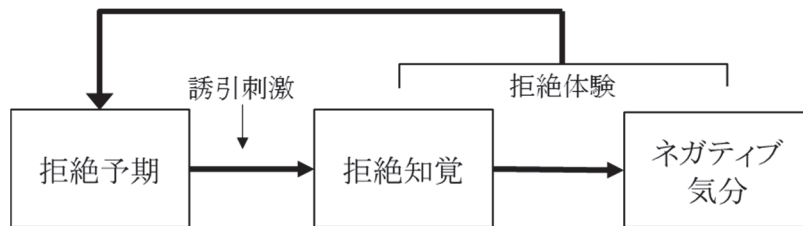


Figure3-2 研究 3-1 の仮説モデル

- (4) 拒絶予期： 「3人に均等に回った時を33%とすると、次のブロックで何%自分に回ってくると思うか」について整数で回答を求めた。
- (5) 被拒絶感： 社会的痛み (Kawamoto et al., 2012; Williams et al., 2000)。(a) 所属感「どの程度拒絶されたと感じますか」、(b) 存在意義「人生に意味があるとどの程度感じますか」、(c) 統制感「自分の人生をコントロールできるとどの程度感じますか」、(d) 自尊感情「相手の人からあなたがどのくらい価値のある人間だと思われていると感じますか」の4項目について9件法で回答を求めた。
- (6) パーソナリティテスト： NEO-Five Factor Inventory (NEO-FFI; 下仲・中里・権藤・高山, 1999)

3. 実験課題

サイバーボール課題 (Williams, 2000) を用いた。参加者には、課題を行う相手は別の参加者であると教示した。実際には他の参加者はおらず、他の2名の動きは全てあらかじめ決められていた。

参加者は、左上のプレイヤーにボールを投げる時は反応装置の左ボタンを左手の人差し指で押し、右上のプレイヤーにボールを投げる時は反応装置の右ボタンを右手の人差し指で押した。ボールが飛んでいる時間は1000msとし、コンピュータプレイヤーが受け取ってからボールを投げるまでは500~1500ms間でランダムとした。参加者にはボールの動きが確実に止まってからボタンを押すように教示した。また、投げる相手を固定しないように教示した。

4. 実験手順

実験手続きは Eisenberger (2003) を参考にした (Figure3-3)。

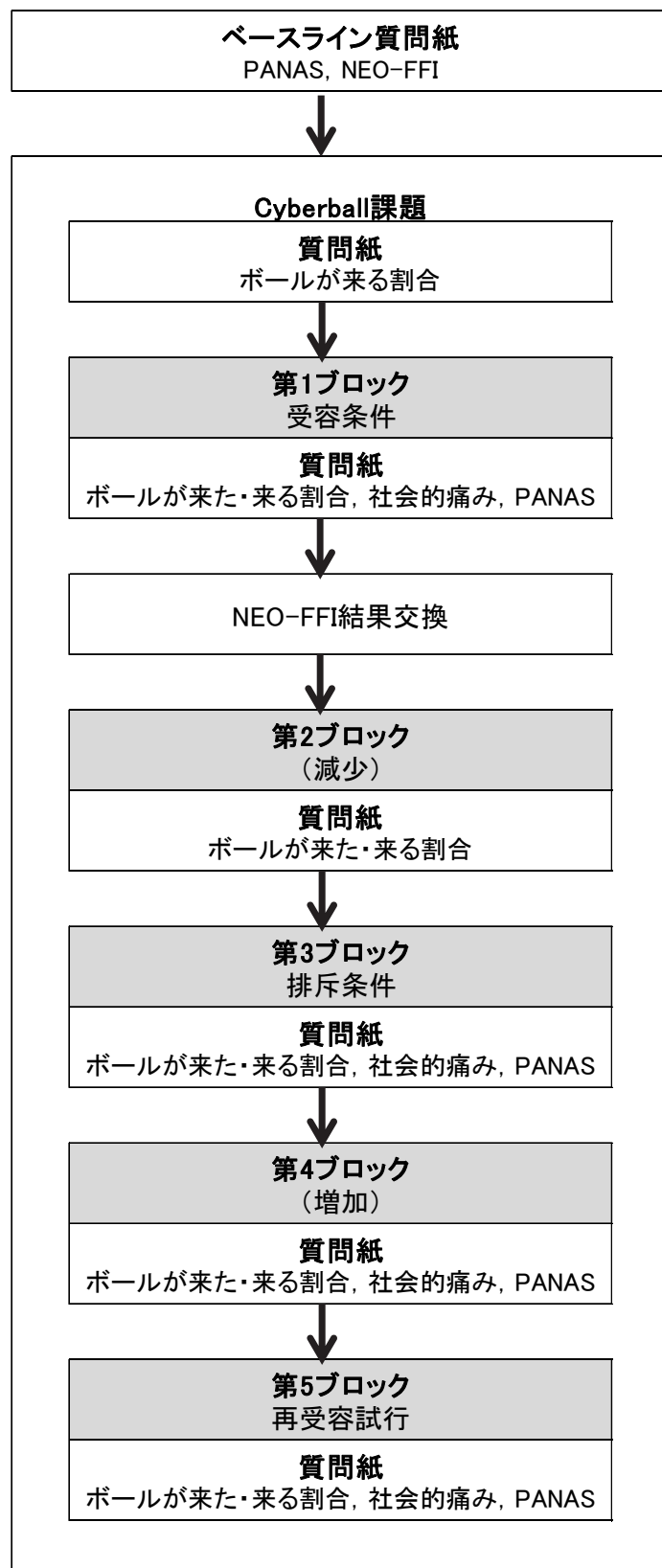


Figure3-3 実験手順

第3章 拒絶に対する恐れが気分を与える影響

参加者は個室に案内された。まず実験の概要について説明がなされた。ベースラインの測定として、PANAS への回答を求められた。その後、一緒に実験に参加する他の2名に与える情報として、(パーソナリティテスト)、およびへの記入を求められた。続いて、サイバーボール課題を実施した。サイバーボール課題は全部で5ブロックからなり、1ブロックは約2分間であった。画面上方の左右に他の2名のプレイヤー(コンピュータプレイヤー)、中央下に参加者が表示された。画面右上のプレイヤーがどちらかの相手にボールを投げることでゲームが開始した。参加者は、反応装置の2つのボタンのうちどちらかを押すことで、対応する相手にボールを投げることができた。サイバーボールは1ブロックあたり45回投球されるようプログラミングされており、実際に他の参加者がプレイしているという感覚を強めるため、コンピュータプレイヤーがボールを受け取ってから投げるまでの時間は500~1500ms間でランダムとした。第1ブロックでは、参加者にも均等にボールが回ってきた(受容条件)。つまり、このブロックでは、コンピュータプレイヤーから参加者への投球が15球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が15球、コンピュータプレイヤー間の投球が15球であった。受容条件終了後、参加者には他の2名に関する架空の情報が与えられた。第2ブロックでは、参加者に回るボールが減少し、コンピュータプレイヤーから参加者への投球が10球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が10球、コンピュータプレイヤー間の投球が25球であった。第3ブロックでは、参加者にランダムで6球のみボールが回るよう設定した(拒絶条件)。第4ブロックでは、参加者に回るボールが増加し、第2ブロックと同様にコンピュータプレイヤーから参加者への投球が10球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が10球、コンピュータプレイヤー間の投球が25球で

あった。第5ブロックでは、第1ブロックと同様に参加者にも均等にボールが回ってきた（受容条件）。つまり、コンピュータプレイヤーから参加者への投球が15球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が15球、コンピュータプレイヤー間の投球が15球であった。各ブロック間では直前のブロックで自分にボールが回ってきた割合、次のブロックで自分にボールが回ってくる割合、社会的痛み、PANASについての回答を求めた。

サイバーシェイプ課題終了後、ディブリーフィングが行われた。

5. 倫理審査

本研究は、調査を実施した大学（承認番号：2013-251）の倫理審査委員会により承認を得て実施された。

6. 分析方法

操作チェックとして、排斥条件後の被拒絶感に1と回答した者を以降の分析から除外し、最終的な分析対象者を算出した。まず、ボールが回ってきたと知覚された割合が気分に影響を与えるかどうかを検討するため、測定時点（受容、排斥）をレベル1、個人をレベル2とし、拒絶知覚得点を予測変数、PANASのネガティブ、ポジティブ項目の合計得点をそれぞれ目的変数とした線形混合モデルによる回帰分析を実施した。PANASのネガティブ、ポジティブ項目それぞれの合計得点について、拒絶知覚得点の変量効果を算出した。次に、ボールが回ってくる割合の予期が知覚に影響を与えるかどうかを検討するため、各条件（受容、排斥）をレベル1、個人をレベル2とし、予期得点を予測変数、拒絶知覚の素点から実際に参加者にボールが回った割合を引いた値である知覚バイアス得点を目的変数とした線形混合モデルによる回帰分析を実施した。知覚バイアス得点について、予期得点の変量効果を算出した。続いて、

排斥ブロックにおいてボールが回ってきたと知覚された割合および気分が、次のブロックの予期に与える影響を検討するため、排斥ブロックにおける PANAS のネガティブ得点、ポジティブ得点、および知覚を予測変数、再受容ブロックの予期得点を目的変数としたステップワイズ法による回帰分析を実施した。

第3項 結果

排斥条件における被拒絶感が1であった者を分析から除外し、最終的に31名（男性8名，女性23名， 19.32 ± 1.30 歳）を分析対象とした。

まず、ボールが回ってきたと知覚された割合が気分に影響を与えるかどうかを検討するため、測定時点（受容，排斥）をレベル1，個人をレベル2とし，拒絶知覚得点を予測変数，PANAS のネガティブ，ポジティブ項目の合計得点をそれぞれ目的変数とした線形混合モデルによる回帰分析を実施した。PANAS のネガティブ，ポジティブ項目それぞれの合計得点について，拒絶知覚得点の変量効果を算出した（Table3-1）。その結果，拒絶知覚得点はネガティブ得点に負の推定値が有意であった（estimate = 0.39, $p < .001$, 95%CI: 0.17 - 0.60）。次に，ボールが回ってくる割合の予期が知覚に影響を与えるかどうかを検討するため，各条件（受容，排斥）をレベル1，個人をレベル2とし，予期得点を予測変数，拒絶知覚の素点から実際に参加者にボールが回った割合を引いた値である知覚バイアス得点を目的変数とした線形混合モデルによる回帰分析を実施した。知覚バイアス得点について，予期得点の変量効果を算出した（Table3-2）。その結果，正の推定値が有意であった（estimate = 0.30, $p < .01$, 95%CI: 0.07 - 0.52）。続いて，排斥ブ

Table3-1 拒絶知覚が気分に与える影響 (N = 31)

	PANAS - ネガティブ				PANAS - ポジティブ				t
	推定値	標準誤差	95%信頼区間	t	推定値	標準誤差	95%信頼区間	t	
切片	-0.02	0.09	-0.21 - 0.17	-0.23	0.01	0.10	-0.19 - 0.21	0.07	
拒絶知覚	0.39***	0.11	0.17 - 0.60	3.60	-0.18 [†]	0.11	-0.39 - 0.03	-1.68	

** p < .01

Table3-2 拒絶予期が拒絶知覚バイアスに与える影響 (N = 31)

	推定値	標準誤差	95%信頼区間	t
切片	-0.13	0.09	-0.30 - 0.05	-1.41
拒絶予期	0.30 **	0.11	0.07 - 0.52	2.68

** p < .01

ロックにおいてボールが回ってきたと知覚された割合および気分が、次のブロックの予期に与える影響を検討するため、排斥ブロックにおけるPANASのネガティブ得点、ポジティブ得点、および知覚を予測変数、再受容ブロックの予期得点を目的変数としたステップワイズ法による回帰分析を実施した（Table3-3）。その結果、拒絶知覚得点の重決定係数が有意であり（*Adjusted R*² = .18, *p* < .05）、標準偏回帰係数は、 $\beta = 0.46$ （*p* < .01）であった。PANASはネガティブ気分、ポジティブ気分ともに標準偏回帰係数は有意でなかった。

第4項 考察

研究3-1の目的は、被拒絶場面における予期、知覚、および気分反応の関連について明らかにするとともに、それら一連の拒絶体験が次の状況における予期を高めるといった循環モデルが実証されるかどうかについて検討することであった。

分析の結果、拒絶知覚と気分の関連については、拒絶知覚得点がネガティブ気分を予測することが示された。つまり、拒絶されたと感じた程度が大きいほど、ネガティブ気分が高いことが明らかにされた。

また、ボールが回ってくる割合の予期が低い（「次のブロックで自分にボールが回ってくる割合が少ないだろう」と予測する）ほど、ボールが回ってきた割合を低く知覚しやすくなる（「あまりボールが回ってこなかった」と感じやすくなる）ことが示され、拒絶予期の高さによって知覚にバイアスが生じることが明らかにされた。つまり、拒絶されるだろうという予測が大きいほど、実際に参加者が経験した客観的な拒絶の程度と、参加者が拒絶されたと知覚した程度が乖離することが明らかになった。

Table3-3 排斥ブロックにおける拒絶知覚および気分が次のブロックの予期に与える影響 ($N = 31$)

	次のブロックの拒絶予期			
	<i>B</i>	標準誤差	95%信頼区間	β
PANAS - ネガティブ				
PANAS - ポジティブ				
拒絶知覚	1.20	0.43	0.31 - 2.09	0.46 **
R^2				0.21
<i>Adjusted R²</i>				0.18 **

** $p < .01$

拒絶体験が次の状況における拒絶予期に与える影響については、拒絶知覚得点のみの影響が示され、排斥された際の気分反応の大きさは次の状況における拒絶予期とは関連しなかった。つまり、一度排斥を知覚すると、その知覚の程度が大きいほど次の拒絶予期が高くなることが示された。

以上のことから、拒絶予期と拒絶知覚は、拒絶予期が拒絶知覚を高め、次の状況における予期が高まる循環モデルを取り、拒絶知覚が気分反応に影響を与えることが明らかとなった。Rejection sensitivity modelは、概ね支持されたと考えられる（Figure3-4）。

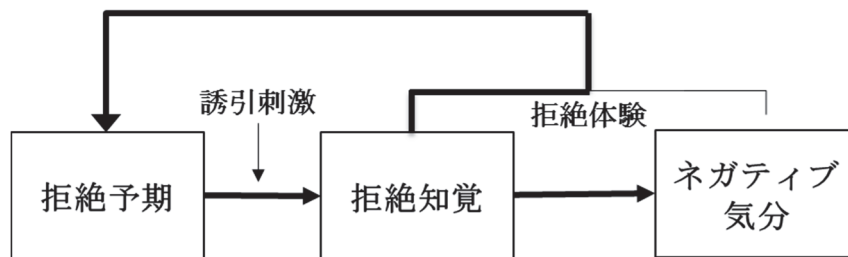


Figure3-4 研究 3-1 により得られた結果

Note: 太線は因果関係が認められたことを示す

第3節 拒絶に対する恐れと Rejection sensitivity model の各構成要素の関連の検討【研究3-2】

第1項 背景と目的

一般的に対人関係において拒絶を受けることは所属欲求を阻害し、健常者を対象とした研究においても拒絶体験はネガティブ感情の生起（たとえば、Gonsalkorale & Williams, 2007; van Beest & Williams, 2006）や自尊感情の低下（たとえば、Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995）などを引き起こし、精神的健康を阻害することが示されている。実際に拒絶を知覚した程度を測定した研究3-1においても、拒絶されたと知覚した程度がネガティブ気分の高さを予測することが示された。

そしてこのような認知的プロセスは、拒絶過敏性のなかでもその高次因子である「拒絶に対する恐れ」が高い者においてはさらに顕著になると考えられる。Rejection sensitivity modelに従い拒絶体験を拒絶予期、拒絶知覚、反応と記述した場合に、拒絶に対する恐れの高い者においては、過去の学習歴により拒絶予期が高いことから、拒絶の手がかりを知覚しやすくなり、また拒絶を知覚した際の反応も大きくなることが予想される。その点についても明らかにするため、研究3-2では、個人特性としての拒絶に対する恐れが高い者と低い者の比較を通して、拒絶に対する恐れが高い者における拒絶体験の特徴について検討する。

第2項 方法

1. 対象者

実験参加者は、健常者37名（男性12名、女性25名、 19.32 ± 1.29 歳）であった。参加者には、実験参加への謝礼として1500円が支払わ

れた。参加者に対しては、実験の詳細について口頭および書面にて説明を行い、書面にて同意を得た。

2. 調査材料

- (1) 人口統計学データ：性別および年齢の記入を求めた。
- (2) 拒絶過敏性：研究1で作成された日本語版 IPSM を使用した。全27項目について、4件法（1：全然あてはまらない、2：ややあてはまらない、3：ややあてはまる、4：とてもあてはまる）で回答を求めた。
- (3) 気分：日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS; 川人・大塚・甲斐田・中田, 2011)
- (4) 拒絶知覚：「3人に均等に回った時を33%とすると、直前のブロックで何%自分に回ってきたと思うか」について整数で回答を求めた。
- (5) 拒絶予期：「3人に均等に回った時を33%とすると、次のブロックで何%自分に回ってくると思うか」について整数で回答を求めた。
- (6) 被拒絶感：社会的痛み (Kawamoto et al., 2012; Williams et al., 2000)。(a) 所属感「どの程度拒絶されたと感じますか」、(b) 存在意義「人生に意味があるとどの程度感じますか」、(c) 統制感「自分の人生をコントロールできるとどの程度感じますか」、(d) 自尊感情「相手の人からあなたがどのくらい価値のある人間だと思われると感じますか」の4項目について9件法で回答を求めた。
- (7) パーソナリティテスト：NEO-Five Factor Inventory (NEO-FFI; 下仲・中里・権藤・高山, 1999)

3. 実験課題

サイバーボール課題 (Williams, 2000) を用いた。参加者には、課題を行う相手は別の参加者であると教示した。実際には他の参加者はおらず、他の2名の動きは全てあらかじめ決められていた。

参加者は、左上のプレイヤーにボールを投げる時は反応装置の左ボタンを左手の人差し指で押し、右上のプレイヤーにボールを投げる時は反応装置の右ボタンを右手の人差し指で押した。ボールが飛んでいる時間は1000msとし、コンピュータプレイヤーが受け取ってからボールを投げるまでは500~1500ms間でランダムとした。参加者にはボールの動きが確実に止まってからボタンを押すように教示した。また、投げる相手を固定しないように教示した。

4. 実験手順

実験手続きは Eisenberger (2003) に基づいた (Figure3-5)。

参加者は個室に案内された。まず実験の概要について説明がなされた。ベースラインの測定として、IPSM, PANASへの回答を求められた。その後、一緒に実験に参加する他の2名に与える情報として、(パーソナリティテスト)、およびへの記入を求められた。続いて、サイバーボール課題を実施した。サイバーボール課題は全部で5ブロックからなり、1ブロックは約2分間であった。画面上方の左右に他の2名のプレイヤー(コンピュータプレイヤー)、中央下に参加者が表示された。画面右上のプレイヤーがどちらかの相手にボールを投げることでゲームが開始した。参加者は、反応装置の2つのボタンのうちどちらかを押すことで、対応する相手にボールを投げる事ができた。サイバーボールは1ブロックあたり45回投球されるようプログラミングされており、実際に他の参加者がプレイしているという感覚を強めるため、コンピュータプレイヤー

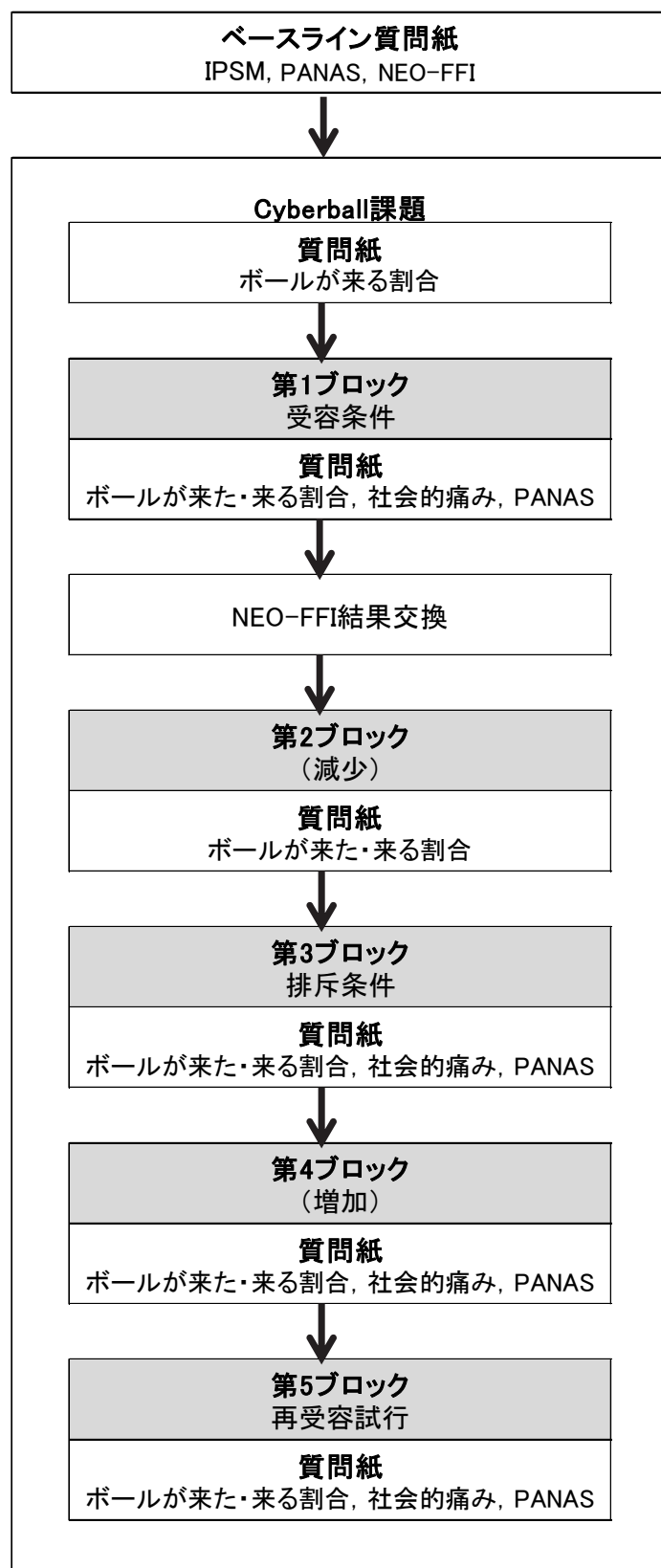


Figure3-5 実験手順

がボールを受け取ってから投げるまでの時間は 500～1500ms 間でランダムとした。第1ブロックでは、参加者にも均等にボールが回ってきた（受容条件）。つまり、このブロックでは、コンピュータプレイヤーから参加者への投球が 15 球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が 15 球、コンピュータプレイヤー間の投球が 15 球であった。受容条件終了後、参加者には他の2名に関する架空の情報が与えられた。第2ブロックでは、参加者に回るボールが減少し、コンピュータプレイヤーから参加者への投球が 10 球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が 10 球、コンピュータプレイヤー間の投球が 25 球であった。第3ブロックでは、参加者にランダムで 6 球のみボールが回るよう設定した（拒絶条件）。第4ブロックでは、参加者に回るボールが増加し、第2ブロックと同様にコンピュータプレイヤーから参加者への投球が 10 球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が 10 球、コンピュータプレイヤー間の投球が 25 球であった。第5ブロックでは、第1ブロックと同様に参加者にも均等にボールが回ってきた（受容条件）。つまり、コンピュータプレイヤーから参加者への投球が 15 球、参加者からコンピュータプレイヤーへの投球が 15 球、コンピュータプレイヤー間の投球が 15 球であった。各ブロック間では直前のブロックで自分にボールが回ってきた割合、次のブロックで自分にボールが回ってくる割合、社会的痛み、PANAS についての回答を求めた。

サイバーシェイプ課題終了後、ディブリーフィングが行われた。

5. 倫理審査

本研究は、調査を実施した大学（承認番号：2013-251）の倫理審査委員会により承認を得て実施された。

6. 分析方法

操作チェックとして、排斥条件後の被拒絶感に1と回答した者を以降の分析から除外し、最終的な分析対象者を算出した。まず、拒絶に対する恐れの高群、低群の合計得点の平均値を基準に、2群に分けた（拒絶に対する恐れ高群、低群）。次に、拒絶に対する恐れの高低で気分が認められるかどうかを検討するため、群（高群、低群）および条件（受容、排斥）を独立変数、ポジティブおよびネガティブ気分の合計得点をそれぞれ従属変数とした二要因分散分析を実施した。続いて、交互作用または群の主効果が認められた変数を目的変数、拒絶に対する恐れの高群、低群の各下位因子得点をステップ1、拒絶知覚得点をステップ2に投入したステップワイズ法による階層的重回帰分析を実施した。次に、拒絶に対する恐れの高群、低群で拒絶知覚および次のブロックの拒絶予期に差異が認められるかどうかを検討するため、群（高群、低群）および条件（受容、排斥）を独立変数、拒絶知覚得点および次のブロックの拒絶予期待点をそれぞれ従属変数とした二要因分散分析を実施した。続いて、交互作用または群の主効果が認められた変数を目的変数、拒絶に対する恐れの高群、低群の各下位因子得点をステップ1、拒絶知覚得点をステップ2に投入したステップワイズ法による階層的重回帰分析を実施した。

第3項 結果

排斥条件における被拒絶感が1であった者を分析から除外し、最終的に31名（男性8名、女性23名、 19.32 ± 1.30 歳）を分析対象とした。記述統計をTable3-4に示す。まず、拒絶に対する恐れの高群、低群の合計得点の平均値を基準に、2群に分けた（拒絶に対する恐れ高群、低群）。次に、拒絶に対する恐れの高群、低群で気分が認められるかどうかを検討するため、群（高群、低群）および条件（受容、排斥）を独立変数、ポ

Table3-4 記述統計 (N = 31)

IPSM						
	関係破綻の不安	他者を傷つける不安による非主張性	批判されることへの懸念	社会的自己像と真の自己像の不一致	他者評価追従	合計
平均値	18.58	16.58	11.65	8.38	14.65	69.84
標準偏差	2.47	2.78	2.50	2.14	3.28	8.69

(つづく)

Table3-4 記述統計 (つづき)

	受容ブロック				排斥ブロック				排斥後の ブロック
	予期	知覚	PANAS ネガティブ	PANAS ポジティブ	予期	知覚	PANAS ネガティブ	PANAS ポジティブ	予期
平均値	1.00	-3.32	20.58	32.55	-3.23	24.69	26.94	27.84	16.26
標準偏差	7.35	7.87	6.38	8.95	5.87	3.69	7.88	9.28	9.67

ジティブおよびネガティブ気分の合計得点をそれぞれ従属変数とした二要因分散分析を実施した (Table3-5)。その結果, ネガティブ気分については群の主効果が有意であり ($F = 6.19, p < .05$), 高群において有意にネガティブ気分が高かった。続いて, 群の主効果が認められたネガティブ気分について, ネガティブ気分を目的変数, 拒絶に対する恐れの下位因子得点をステップ 1, 拒絶知覚得点をステップ 2 に投入したステップワイズ法による階層的重回帰分析を実施した (Table3-6)。重決定係数が有意であり ($Adjusted R^2 = 0.21, p < .01$), 拒絶に対する恐れのうち「社会的自己像と真の自己像の不一致」がネガティブ気分を有意に予測することが示された ($\beta = 0.49, p < .01$)。次に, 拒絶に対する恐れの高低で拒絶知覚および次のブロックの拒絶予期に差異が認められるかどうかを検討するため, 群 (高群, 低群) および条件 (受容, 排斥) を独立変数, 拒絶知覚得点および次のブロックの拒絶予期得点をそれぞれ従属変数とした二要因分散分析を実施した (Table3-7)。その結果, 次のブロックの拒絶予期について交互作用が有意であり, 単純主効果の検定の結果, 排斥ブロック後のブロックにおける拒絶予期について, 低群と比較して高群が有意に高いことが示された ($F = 6.77, p < .05$)。続いて, 次のブロックの拒絶予期について, 次のブロックの拒絶予期得点を目的変数, 拒絶に対する恐れの下位因子をステップ 1, 拒絶知覚得点をステップ 2 に投入したステップワイズ法による階層的重回帰分析を実施した (Table3-8)。重決定係数が有意であり ($Adjusted R^2 = 0.21, p < .01$), 拒絶知覚 ($\beta = 0.33, p < .05$) および, 拒絶に対する恐れのうち「社会的自己像と真の自己像の不一致」が次のブロックの拒絶予期得点を有意に予測することが示された ($\beta = 0.43, p < .01$)。

Table3-5 拒絶に対する恐れの高低による気分の差異 (N = 31)

		拒絶に対する恐れ				主効果		交互作用
		高群 (N=17)		低群 (N=14)		群 <i>F</i>	条件 <i>F</i>	<i>F</i>
		受容	排斥	受容	排斥			
PANAS	<i>M</i>	23.18	29.06	17.43	24.36	6.19 *	26.20 ***	0.18
ネガティブ	<i>SD</i>	6.05	8.41	5.42	6.57			
PANAS	<i>M</i>	33.65	28.82	31.21	26.64	0.56	15.35 ***	0.01
ポジティブ	<i>SD</i>	8.60	10.16	9.50	8.31			

*** $p < .001$, * $p < .05$

Table3-6 拒絶に対する恐れおよび拒絶知覚と、ネガティブ気分の関連 ($N = 31$)

	PANASネガティブ得点							
	Step1			Step2				
	<i>B</i>	標準誤差	95% 信頼区間	β	<i>B</i>	標準誤差	95% 信頼区間	β
拒絶に対する恐れ								
関係破綻の不安								
批判されることへの懸念								
社会的自己像と真の自己像の不一致	1.79	0.60	0.57 - 3.01	0.49**	1.79	0.60	0.57 - 3.01	0.49**
排斥条件・拒絶知覚	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Adjusted R</i> ²				0.21**				0.21**
ΔR ²								
								** $p < .01$

Table3-7 拒絶に対する恐れの高低による拒絶知覚と次のブロックの拒絶予期の差異 (N = 31)

	拒絶に対する恐れ				主効果		交互作用	
	高群 (N=17)	低群 (N=14)	排斥	受容	群 F	条件 F	F	単純主効果
拒絶知覚	M -2.29	25.97	3.51	-4.57	2.41	364.35***	0.04	-
SD	6.91	3.51	3.39	9.00				
次のブロック	M -3.59	19.77	8.65	-2.79	186.07	134.14	6.77*	排斥条件: 低群<高群
の拒絶予期	SD 5.11	8.65	9.40	6.86				*** p<.001, ** p<.01

Table3-8 拒絶に対する恐れおよび拒絶知覚と、次のブロックの

拒絶予期の関連 ($N = 31$)

	次のブロックの拒絶予期							
	Step1			Step2				
	<i>B</i>	標準誤差	95%信頼区間	β	<i>B</i>	標準誤差	95%信頼区間	β
拒絶に対する恐れ								
関係破綻の不安								
批判されることへの懸念								
社会的自己像と真の自己像の不一致	2.39	0.71	0.93 - 3.85	0.53**	1.94	0.71	0.50 - 3.39	0.43**
排斥条件 拒絶知覚	—	—	—	—	0.86	0.41	0.02 - 1.70	0.33*
<i>Adjusted R</i> ²				0.25**				0.33*
ΔR ²								0.08

** $p < .01$, * $p < .05$

4. 考察

研究 3-2 の目的は、拒絶に対する恐れの高くなるほど、拒絶場面における拒絶の予期、知覚、反応の程度が大きくなるだろうという仮説について検討することであった。

分析の結果、まず、条件にかかわらず、拒絶過敏性の高次因子である「拒絶に対する恐れ」の傾向が高くなるほど課題中を通してネガティブ気分が高いことが示された。また、拒絶に対する恐れの中なかでも特に、「社会的自己像と真の自己像の不一致」因子がネガティブ気分に影響を与えることが示されたことから、相手から拒絶されないために、本当の自己を抑えて相手の望む自己を振る舞う傾向が高くなるほど、少なくとも社会的状況におけるネガティブ気分が高いことが考えられる。次に、拒絶知覚については、拒絶に対する恐れの高さによる差異は認められなかった。この点については、研究 3-1 において拒絶知覚は拒絶予期の影響を受けることが示されていることから、拒絶に対する恐れは拒絶予期を高めることで、間接的に拒絶知覚に影響を与えている可能性が考えられる。続いて、拒絶予期については、拒絶に対する恐れが高くなる者は低い者と比較して、排斥条件の次のブロックにおける拒絶予期が高いことが示された。また、拒絶を経験した後の拒絶予期は、拒絶に対する恐れの中なかでも「社会的自己像と真の自己像の不一致」因子と、拒絶知覚の影響を受けることが示された。つまり、先述のように、拒絶されないために本当の自己を抑えて相手の望む自己を振る舞う傾向や、拒絶されたと感じた程度が高いほど、次の状況において「拒絶されるだろう」と感じやすくなることが示唆された。

これらのことから、拒絶に対する恐れが高くなる者はネガティブ気分が高いこと、そして一度拒絶を経験した場合にはその後の状況における拒

絶予期が高まりやすいことが示された。

第4節 本章のまとめ

研究 3-1 によって、拒絶されるだろうという予期が高いほど拒絶を表す手がかりに敏感になり、拒絶されたと感じるほど次の状況における拒絶予期が高まるという悪循環、さらに拒絶されたと感じるほどネガティブ気分が高くなることが明らかとなった。さらに、研究 3-2 において拒絶過敏性の高次因子である「拒絶に対する恐れ」の高さを考慮した場合には、拒絶を知覚した際のネガティブ気分は、拒絶知覚の程度によらず、拒絶に対する恐れの高さによって予測されることが示された。つまり、拒絶に対する恐れが高い者においても、排斥される可能性を積極的に想定していない状況では、予期や知覚といった認知的な特徴には違いが認められず、その状況や相手から一度排斥されるなどによって潜在的な拒絶や排斥の可能性を認識した場合において、拒絶予期が高まりやすく、間接的に拒絶を知覚しやすくなる可能性が考えられる。また、拒絶に対する恐れを考慮した場合には拒絶知覚がネガティブ気分を予測しなかったことから、拒絶を知覚さえすれば、その程度の大小にかかわらず、社会的状況において本来の自己を抑えて相手にとって望ましいであろう自己を振る舞う傾向の高い者ほど高いネガティブ気分を感じると考えられる。また、そのような特徴が高く、拒絶されたと感じた程度が大きいほど、次の状況において拒絶される可能性を高く見積もることが明らかになった。これらの結果から、拒絶に対する恐れは、Figure 3-6 のように、Rejection sensitivity model を構成する各要素と関連することが示唆された。

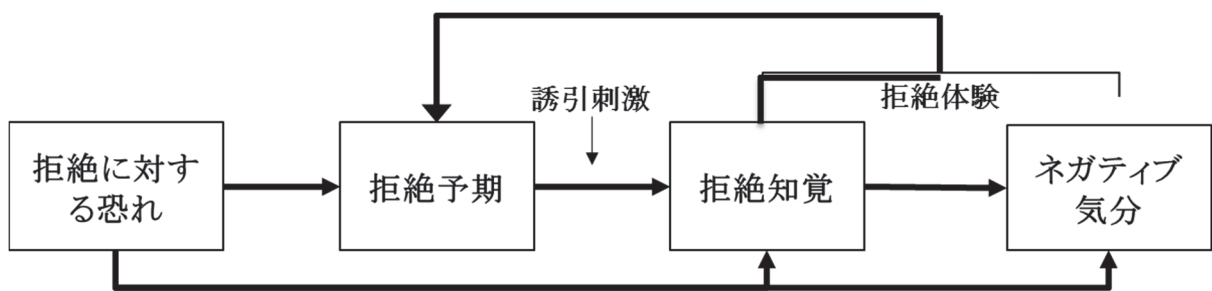


Figure3-6 研究3により得られた結果

Note: 太線は因果関係が認められたことを示す

第4章 拒絶に対する回避的態度が気分を与える影響の検討

第1節 本章のねらい

先行研究により、拒絶を知覚した後に行われる行動については、健常者を対象とした先行研究により検討されてきた。その中では、社会的再結合仮説として、新たな他者との関係形成に対する動機づけが高まることが示されている（Maner et al., 2007）。その他にも、拒絶を経験したあとに所属欲求を満たし、受容を導くための行動として、自己の利益よりも相手や相手との関係性の利益を優先する「関係志向的行動」、好意の獲得のために自分の意見や行動を他者に合わせる「同調行動」、他者との円滑な相互作用を可能にするため「行動模倣」の3つが挙げられ、健常者においても拒絶を知覚した後には他者からの受容を促進するような行動が導かれることが明らかになっている（例えば、Maner et al., 2007, 宮崎・池上, 2011）。特に、関係志向的行動については、その相手との関係性への愛着、関係性への長期的な展望、関係性継続の意図からなる、関係性へのコミットメントが強いほど、相手からの拒絶に対して関係志向的行動を取りやすいことが報告されており（Rusbult, Verette, Whitney, Slovik, & Lipkus, 1991）、同じ拒絶であっても、その相手との関係性が親密であるかどうかによって異なると考えられる。実際に、実験において初対面の見知らぬ相手から拒絶された場合には、相手に対して攻撃行動を行いやすいことが示されている（Buckley, Winkel, & Leary, 2004）。

ここで、拒絶過敏性が高い者の特徴としては、客観的に拒絶と捉え

られる状況だけでなくとも主観的な判断により気分の落ち込みやさまざまな認知的・行動的反応が生起するといわれている。そのため、拒絶過敏性が高い者においては、ただ主観的な拒絶体験を多く積み続けるわけではなく、拒絶される可能性のある社会的状況において、拒絶を避けるための方略として上記のような行動（拒絶阻止の行動）を予防的に選択するようになる可能性が考えられる。しかしながら、拒絶阻止の行動を扱った研究は見当たらない。拒絶阻止の行動は、相手に拒絶されない（または受容される）ことを目的とすることから、客観的には向社会的・適応的である一方で、行動の選択基準が個人の推察する相手の意見にあるため、自己の意見や感情を抑制する形で選択された行動が多い場合には、個人内で気疲れやストレスを感じる可能性が考えられる。また、拒絶阻止の行動は、拒絶過敏性の低い者においても認められうるが、拒絶過敏性のうちその高次因子である「拒絶に対する回避的態度」の高い者において特に多く認められる行動的特徴であると考えられる。そこで、研究4では、拒絶阻止の行動を「拒絶を予期した状況下で、拒絶を阻止するという意図を持って選択された行動」と定義し、まずその種類について検討する。その上で、収集した行動の生起頻度と気分の関連について明らかにする。さらに、拒絶に対する回避的態度の高低によって、拒絶阻止の行動の生起頻度に差が認められるかどうかについても検討する。研究4の仮説モデルを Figure4-1 に示す。

第2節 拒絶阻止の行動の種類を検討【研究4-1】

第1項 背景と目的

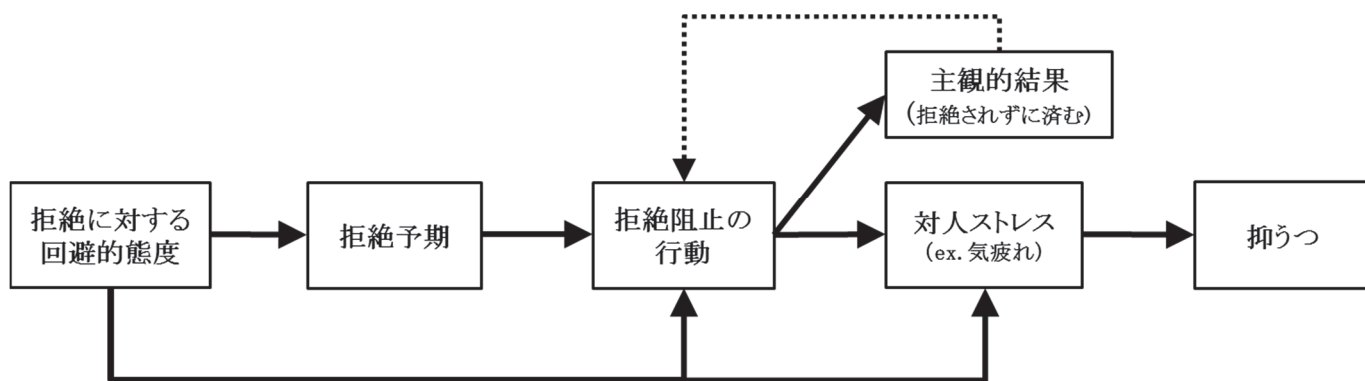


Figure4-1 研究4の仮説モデル

拒絶阻止の行動は、短期的には向社会的な行動であり、相手から拒絶されにくい、あるいは気に入られるといった良い結果が得られる可能性もあるが、それと同時に気疲れ、自分を偽らなければならないといった葛藤や不全感が生じることから、このような対人ストレスの長期的な蓄積が抑うつに影響を与えていることが考えられる。しかしながら、拒絶場面における認知行動的特徴を記述した **Rejection sensitivity model** は、拒絶体験をすることで次の状況における予期が高まり、拒絶の手がかりに敏感になるという、拒絶過敏性の自己充足的強化を説明するモデルであり、拒絶が予期される状況において上記のような拒絶を避けるための行動については言及されていない。これまで拒絶阻止の行動を扱った研究は認められず、そのため拒絶阻止の行動の種類や頻度、気分の変化についても明らかにされていない。そこで、まずは拒絶を予期する場面を設定し、拒絶されることを避けるための行動の内容を検討する。

第2項 方法

1. 対象者

健常者 32名（男性 10名，女性 22名，平均年齢 18.81歳， $SD=0.74$ ）

2. 調査材料

互いの短所についての会話後、「会話中、自分が傷つかないために（相手からひどいことを言われなかったために）意識したり工夫した点があればお書きください」と教示し、自由記述による回答を求めた。

3. 実験手順

実験手続きは木村（2005；2010；2012）および中島（2014）を参考にした。友人同士の被験者が、互いの短所について5分間の会話を行った。会話後に自由記述による質問紙を実施した。

4. 倫理審査

本研究は、早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会（承認番号：2014-283）により承認を得て実施された。

5. 分析方法

得られた回答から、拒絶阻止の行動の定義に則り、「意図的」かつ、「客観的な評価が可能」、「能動的」な顕在行動をあらわした項目を収集し、条件を満たさない回答は以降の分析から除外した。拒絶阻止の行動の種類について整理するため、臨床心理学を専攻する大学院生および大学生の計3名で、KJ法（川喜田，1967）による評価を実施した。

第3項 結果・考察

研究4-1の目的は、拒絶阻止の行動の項目を収集し、その種類を明らかにすることであった。

自由記述により得られた112項目を、臨床心理学を専攻する大学院生および大学生計3名がKJ法にて分類した（Table4-1）。最終的に、「うなずく」、「ジェスチャーを積極的に用いる」、「声をあげて笑う」、からなる「非言語項目」、「あいづちを打つ」、「自身の短所を自分で話す」、「相手の短所をフォローする」、「自身の短所に同意する」、「自身の短所に弁明する」、「推量・疑問形の語尾を用いる」からなる「言語項目」に大別された。このことから、必要以上に傷つくことを阻止するために意識された項目として、うなずきやジェスチャーといった会話をスムーズに進めるための一般的な項目に加えて、自分を低め、相手を持ち上げる内容が意識されていたことが明らかになった。挙げられた項目の多くは、自分がひどいことを言われないうために「相手に不快な思いをさせない」ために取られた方略であった。つまり、自分が

Table4-1 拒絶阻止の行動 (N = 32)

非言語	うなづく ジェスチャーを積極的に用いる 声を出して笑う
言語	あいづちを打つ 自分の短所を自分で話す (短所を言われた時) 理解を示す (自分の短所について) 弁明する (短所を伝える時) フォローする 推量・疑問形の語尾を用いる

傷つかないために、相手の様子を伺い、不快な思いをさせないようにという基準で自己の振る舞いや発言に気を配ることが示唆された。

本研究において抽出されたこれらの行動は、先行研究（Maner et al., 2007, 宮崎・池上, 2011）において拒絶を経験した後に所属欲求を満たすために受容を求めて行う行動のうち、自己の利益よりも相手や相手との関係性を優先する関係志向的行動や、相手からの行為の獲得のために自分の意見や行動を相手に合わせる同調行動にあたると考えられる。つまり、拒絶を経験していなくとも、拒絶を予期した状況下において、拒絶されることを阻止するために予防的にこれらの行動が選択されることが示唆された。

第3節 拒絶阻止の行動と気分の関連の検討【研究4-2】

第1項 背景と目的

拒絶阻止の行動は、相手に拒絶されない（または受容される）ことを目的とすることから、客観的には適応的である一方で、行動の選択基準が個人の思う相手にあるため、自己の意見や感情を抑制する形で選択された行動が多い場合には、個人内で気疲れやストレスを感じる可能性が考えられる。

そこで研究4-2では、会話中に取られた拒絶阻止のための各行動の頻度が、会話前後の気分の変化に与える影響を検討することを目的とする。

第2項 方法

1. 対象者

健常者 32 名（男性 10 名，女性 22 名，平均年齢 18.81 歳， $SD=0.74$ ）。同性の友人同士のペアで募集を行った。

2. 調査材料

- (1) 日本語版 PANAS（川人ら，2011）
- (2) 対人ストレス：「いまの会話で相手に気を遣い，気疲れを感じている」について，Visual Analog Scale（VAS）にて回答を求めた。
- (3) BDI-II（小嶋・古川，2003）
- (4) 研究 4-1 で得られた拒絶阻止の行動（うなずき，ジェスチャー，笑い，あいづち，自身の短所を自分で話す，自身の短所に同意する，自身の短所に弁明する，相手の短所をフォローする，推量・疑問形の語尾を用いる；後日実験従事者 2 名により，録画映像および逐語テキストから頻度をカウント）

3. 実験手順

実験手続きは木村（2005；2010；2012）および中島（2014）を参考にした。実験手順を Figure4-2 に示す。被験者 2 名は個室に案内された。まず，質問紙回答用の席に案内され，実験の概要について説明がなされた。研究目的は「性格特性，接触頻度と会話の評価の関連を調べるための実験」であると伝えた。質問紙へ回答した後にいくつかのテーマについて会話をすること，各テーマの会話の後に会話の評価を行い，その変化を調べることが目的であると教示した。まずはじめに，PANAS および BDI-II への回答を求められた。次に，会話ブースに移動し，簡単な自己紹介を 3 分間ずつ自由に行った。会話ブースは，カメラを向いてハの字型に内側向き 45 度に配置し，椅子間の距離は 100cm とした。会話の様子は 5m 離れた位置からデジタルビデオカメラで被験者 2 人の全身が写るよう撮影した。はじめの 3 分間の自己紹介は，カメラに慣れ

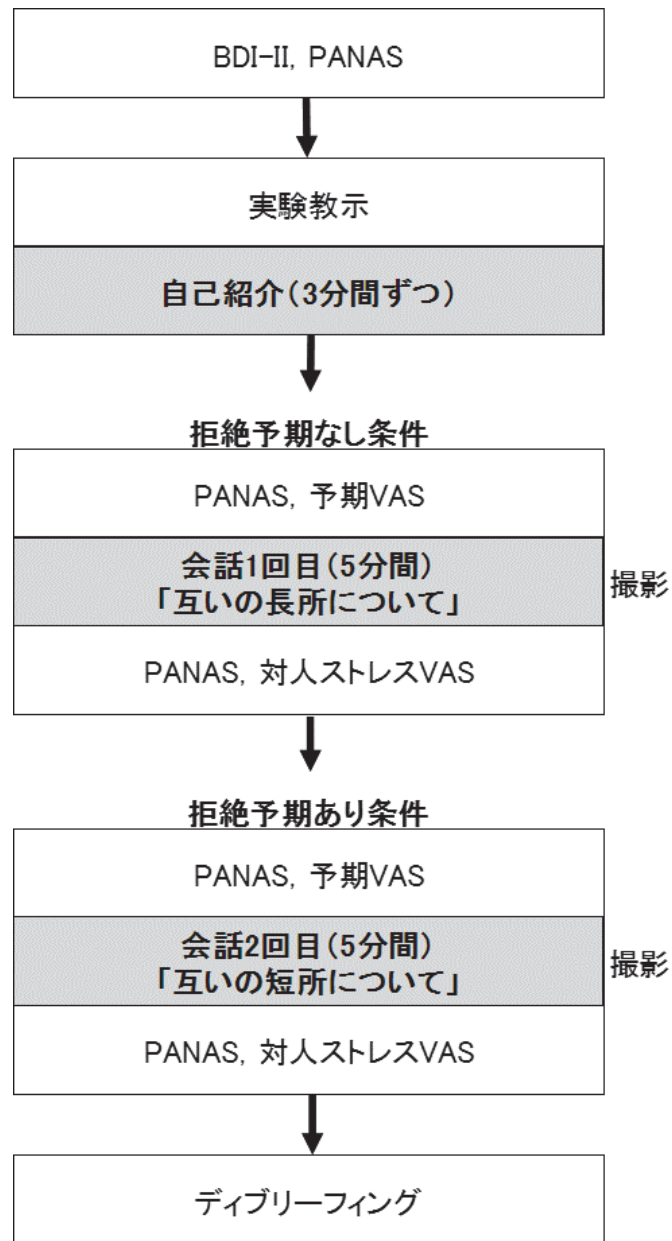


Figure4-2 研究 4-2 実験手順

ることが目的であると伝えた。続いて、1回目の会話のテーマを教示し、PANAS、拒絶予期への回答を求めた。会話ブースに移動し、互いの長所について5分間の会話を行った（拒絶予期なし条件）。その後、PANAS、対人ストレスへの回答を行った。次に、2回目の会話のテーマを教示し、PANAS、拒絶予期への回答を求めた。互いの短所について5分間会話をを行った（拒絶予期あり条件）。その後、質問紙回答用の席に戻り、PANAS、対人ストレス、1回目の会話で相手に言われた自分の長所への回答を行った。最後にディブリーフィングを行い、被験者に「本研究ではポジティブな話題とネガティブな話題において会話中の態度がどう変化するかを検討することを目的としていたこと、録画した映像から後日行動評定を行うこと」を告げた。さらに実験内容の詳細と意義について口頭で説明し、被験者からデータ使用に関する同意を得た。

実験実施から約3カ月後に再度質問紙調査を実施し、BDI-IIを測定した。

4. 倫理審査

本研究は、早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会（承認番号：2014-283）により承認を得て実施された。

5. 分析方法

拒絶予期あり条件において拒絶予期が0であった者は拒絶予期喚起の操作が適切になされなかったとみなし、以降の分析から除外し、最終的な分析対象者を算出した。まず、操作チェックとして、拒絶予期喚起の操作が妥当であったかどうか確認する目的で、条件（拒絶予期なし、あり）を独立変数、会話前の拒絶予期得点を従属変数とした対応のある t 検定を実施した。その後、まず実験開始時のBDI-IIと拒絶予期あり条件における対人ストレスについて二変数の相関係数を算出した。次に、

対人ストレスが抑うつに与える影響を検討するため、拒絶予期あり条件における対人ストレス得点を予測変数、実験から3ヶ月間のBDI-II変化量を従属変数とした回帰分析を実施した。続いて、拒絶阻止の行動の頻度が気分反応および対人ストレスに与える影響を検討するため、まず拒絶予期なし条件について、会話前後のPANASポジティブ得点、ネガティブ得点、および会話後の対人ストレスをそれぞれ目的変数、会話中の各非言語行動の頻度を説明変数とした回帰分析を実施した。次に、拒絶予期あり条件について、会話前後のPANASポジティブ得点、ネガティブ得点、および会話後の対人ストレスをそれぞれ目的変数、会話中の各行動の頻度を説明変数とした回帰分析を実施した。なお、拒絶阻止の行動の頻度は、非言語項目については個人差による影響を統制するために拒絶予期あり条件の会話中に観測された各行動の回数から予期なし条件の会話中に観測された回数を引いた変化量を用い、言語項目については言語項目の内容が拒絶予期あり条件における会話のテーマに関連したものであるため、拒絶予期あり条件における各言語項目の文字数を、発話量の差による影響を統制するために個人の発言文字数で除した値(%)を使用した。

第3項 結果

拒絶予期あり条件において拒絶予期が0であった1名を以降の分析から除外し、最終的な分析対象者は31名(男性10名、女性21名、 18.84 ± 0.73 歳)であった。

1. 操作チェック

拒絶予期喚起の操作が妥当であったかどうか確認する目的で、条件(拒絶予期なし、あり)を独立変数、会話前の拒絶予期得点を従属変数

とした対応のある t 検定を実施した (Table4-2)。その結果、拒絶予期なし条件と比較して拒絶予期あり条件において拒絶予期得点が有意に高かった ($t(30) = 4.09, p = 0.00$)。

2. 対人ストレスが抑うつの変化量に与える影響

対人ストレスが抑うつの変化量に与える影響を検討するため、まず実験開始時に測定した BDI-II 合計得点と拒絶予期あり条件における対人ストレスの相関係数を算出した。その結果、有意な相関関係は認められなかった ($r = .08, n.s.$)。そのため、拒絶予期あり条件における対人ストレス得点を予測変数、実験から3ヶ月間の BDI-II 変化量を従属変数とした回帰分析を実施した。その結果、重決定係数が有意であり ($Adjusted R^2 = 0.49$)、標準偏回帰係数は $\beta = 0.70$ であった。

3. 拒絶阻止の行動が気分および対人ストレスに与える影響

拒絶阻止の行動の頻度が会話後の気分および対人ストレスに与える影響について検討するため、まず拒絶予期なし条件の会話前後の PANAS ポジティブ得点の変化量 (Table4-3)、ネガティブ得点の変化量 (Table4-4)、会話後の対人ストレス (Table4-5) を目的変数、会話中の拒絶阻止の行動の回数を予測変数とした回帰分析を実施した。その結果、拒絶予期なし条件においては、拒絶阻止の行動の頻度と気分および対人ストレスとの間には有意な関連は認められなかった。続いて、拒絶予期あり条件について、会話前後の PANAS ポジティブ得点の変化量を目的変数、会話中の各行動の頻度を説明変数とした回帰分析を実施した (Table4-6)。その結果、非言語項目ではうなずき ($Adjusted R^2 = 0.15, p < .05, \beta = 0.42, p < .05$)、言語項目ではあいづち ($Adjusted R^2 = 0.15, p < .05, \beta = 0.43, p < .05$) が有意であった。次に、予期あり条件の会話前後の PANAS ネガティブ得点の変化量を目

Table4-2 条件による拒絶予期の差異（操作チェック； $N = 31$ ）

	拒絶予期なし条件		拒絶予期あり条件		<i>t</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
会話前拒絶予期	26.65	17.06	90.68	17.12	17.96 ***

 $p < .001$

Table4-3 拒絶予期なし条件前後のポジティブ気分の
変化量に拒絶阻止の行動が与える影響 (N = 31)

説明変数	非言語項目			言語項目	
	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	疑問・推量の語尾
β	0.05	0.17	-0.18	0.05	0.12
R^2	0.00	0.03	0.03	0.00	0.01
<i>Adjusted R²</i>	-0.03	0.00	0.00	-0.03	-0.02

Table4-4 拒絶予期なし条件前後のネガティブ気分
の変化量に拒絶阻止の行動が与える影響 (N = 31)

説明変数	非言語項目			言語項目	
	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	疑問・推量の語尾
β	-0.11	0.01	-0.07	-0.08	0.02
R^2	0.01	0.00	0.01	0.01	0.00
<i>Adjusted R²</i>	-0.02	-0.03	-0.03	-0.03	-0.03

Table4-5 拒絶予期なし条件後の対人ストレスに拒絶阻止の行動が与える影響 (N = 31)

説明変数	非言語項目			言語項目	
	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	疑問・推量の語尾
β	0.18	0.02	0.15	0.00	-0.28
R^2	0.03	0.00	0.02	0.00	0.08
<i>Adjusted R²</i>	0.00	-0.03	-0.01	-0.03	0.03

Table 4-6 拒絶予期あり条件前後のポジティブ気分の変化量に拒絶阻止の行動が与える影響 (N = 31)

説明変数	非言語項目				言語項目				
	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	自身の短所を話す	自身の短所への同意	自身の短所への弁明	相手の短所のフォロー	疑問・推量の語尾
β	0.42 *	-0.07	-0.09	0.43 *	-0.04	0.15	-0.07	0.29	0.09
R^2	0.18 *	0.00	0.01	0.18 *	0.00	0.02	0.01	0.08	0.01
<i>Adjusted R²</i>	0.15 *	-0.03	-0.03	0.15 *	-0.03	-0.12	-0.03	0.05	-0.03

Note. 非言語項目およびあいづち、語尾は予期あり条件-予期なし条件における観測値(回数)の変化量を、その他の言語項目は予期あり条件における個人の発話文字数のうち各項目に該当する発話文字数の割合を用いた。
* $p < .05$

的変数，会話中の各行動の頻度を説明変数とした回帰分析を実施した（Table4-7）。その結果，拒絶阻止の行動の頻度とネガティブ気分の変化量には有意な関連が認められなかった。続いて，予期あり条件の会話後の対人ストレス得点を目的変数，会話中の各行動の頻度を説明変数とした回帰分析を実施した（Table4-8）。その結果，非言語項目では有意な関連が認められず，言語項目では，あいづち（*Adjusted R*² = 0.14, *p* < .05, β = 0.42, *p* < .05），自身の短所に同意する（*Adjusted R*² = 0.32, *p* < .001, β = 0.59, *p* < .001）および相手の短所をフォローする（*Adjusted R*² = 0.20, *p* < .01, β = 0.47, *p* < .01）が有意であった。

第4項 考察

研究4-2の目的は，対人ストレスがその後の抑うつの変化に与える影響について明らかにすること，そして拒絶阻止の行動の頻度と，会話前後の気分の変化，および対人ストレスの関連について検討することであった。本研究により得られた知見を Figure4-3 に示す。

まず，拒絶予期あり条件において相手に気を遣い，会話後に気疲れを感じている者ほど，その後3ヶ月の間の抑うつ反応が高まりやすい可能性が示された。実験に参加した相手は日頃から親しくしている友人同士であり，その後の生活でも日常的に接触することが想定される。そのため，実験時において互いの短所を話題とした会話で，気疲れを強く感じるような，つまり相手の気を悪くしないよう自身の言動に気を遣い，相手から拒絶のサインが出ていないかどうかという視点を持ちながらかわることで，その後の相手との関係性の中でもそれらの点について意識したり，実験時に相手から言われた自身の短所について気にする機会が

Table4-7 拒絶予期あり条件前後のネガティブ気分の変化量に拒絶阻止の行動が与える影響 (N = 31)

説明変数	非言語項目				言語項目				
	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	自身の短所を話す	自身の短所への同意	自身の短所への弁明	相手の短所のフォロー	疑問・推量の語尾
β	0.00	0.02	0.18	-0.13	-0.10	-0.02	-0.23	-0.24	-0.05
R^2	0.00	0.00	0.03	0.02	0.01	0.00	0.05	0.06	0.00
<i>Adjusted R²</i>	-0.03	-0.03	-0.00	-0.02	-0.03	-0.03	0.02	0.03	-0.03

[†]p < .10

Note. 非言語項目およびあいづち、語尾は予期あり条件-予期なし条件における観測値(回数)の変化量を、その他の言語項目は予期あり条件における個人の発話文字数のうち各項目に該当する発話文字数の割合を用いた。

Table 4-8 拒絶予期あり条件後の対人ストレスに拒絶阻止の行動が与える影響 (N = 31)

説明変数	非言語項目			言語項目				
	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	自身の短所を話す	自身の短所への同意への弁明	相手の短所へのフォロー	疑問・推量の語尾
β	-0.19	0.06	-0.05	0.42*	0.02	0.59***	-0.03	0.47**
R^2	0.01	0.00	0.00	0.17*	0.00	0.34***	0.00	0.23**
Adjusted R^2	-0.02	-0.03	-0.03	0.14*	-0.03	0.32***	-0.03	0.20**

Note. 非言語項目およびあいづち, 語尾は予期あり条件-予期なし条件における観測値(回数)の変化量を, その他の言語項目は予期あり条件における個人の発話文字数のうち各項目に該当する発話文字数の割合を用いた。
[†] $p < .10$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

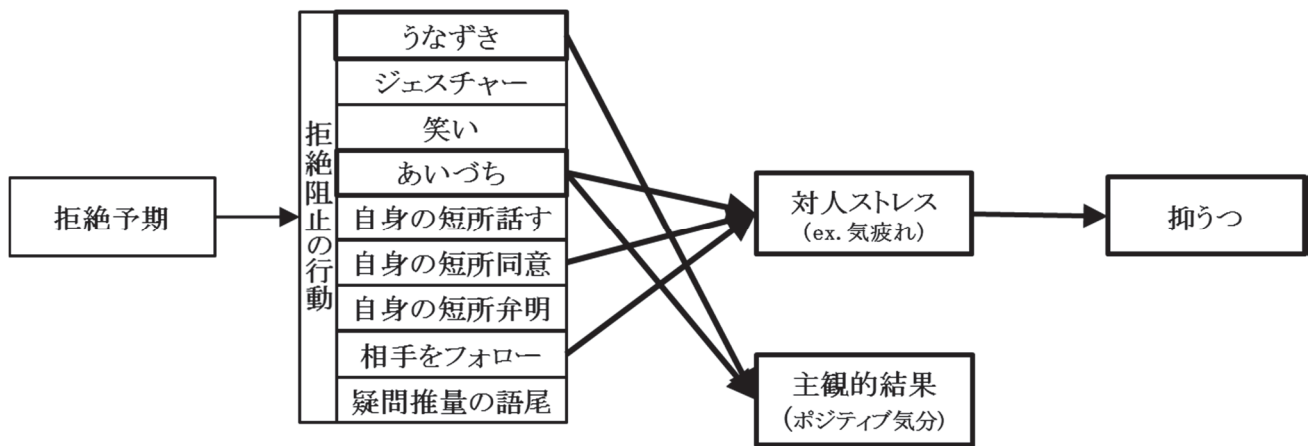


Figure4-3 研究 4-2 で得られた知見

頻回に生じることが考えられる。そして、このように相手との関係性において持続的にストレスを感じることによって、抑うつが高まった可能性が考えられる。

この気疲れは、拒絶阻止の行動のなかでも言語項目に該当する、あいづち、相手を持ち上げ相手の短所をフォローする発言や、相手から自己の短所を言われた際に積極的な同意を表したり、自身を低める発言が多い者ほど高いことが示された。拒絶を予期した状況下においてみられた相手を不快にさせないためのこのような発言は、自身の意見ではなく相手がどう捉えるかを基準に選択されていると考えられることから、結果として会話が意図した通りに進んだ場合であっても、気疲れを生じさせたと考えられる。一方で、うなずきやジェスチャー、笑いといった、会話を円滑に進めるために一般的に用いられる非言語項目の頻度は気疲れには影響を与えなかった。

ポジティブ気分については、相手からの拒絶を予期した条件下において、うなずきとあいづちが多く用いられるほど会話前後でポジティブ気分が高まることが示された。相手の発言に対してあいづちを打つことは、話を「聞いていること」および話の内容を「理解していること」をあらわすとされる（例えば、堀口，1991）。うなずきについても、木村・磯・桜木・大坊（2005）において、会話中のうなずきの多かった者ほど討論における会話満足度が高いという結果が得られており、Bavelas, Coates, & Johnson（2000）においてもうなずきは2者間コミュニケーションを盛り上げるという報告がされている。つまり、本研究の結果はこれらの知見を支持するものであり、拒絶を予期した状況下においてこれらを意識的に用いることによって、会話が円滑に進むことで、ポジティブ気分が高まると考えられる。そして、これらの拒絶阻止の行動は、

拒絶予期がない状況において取られた場合は、気分や対人ストレスとの関連を示さないことが明らかとなった。そのため、相手からの拒絶を予期した状況において拒絶阻止のために取られた行動は、会話が友好的な雰囲気が進み拒絶を知覚しなかった場合には「その結果として成功した」という主観的体験が強化子として機能している可能性も考えられる。

以上のことから、相手からの拒絶を予期した状況下で、相手からの拒絶や批判を避けるために自己の意見ではなく相手にとっての受け入れやすさを優先させ、相手の発言内容、なかでも自己に向けられたネガティブな情報をただ肯定することや、相手の短所をフォローする内容、さらには相手を持ち上げる内容を多く話すなどの言語的な気遣いを多くすることが、相手とのコミュニケーションにおいて気疲れを生じさせることが示された。日常的に接触頻度の高い相手との間で相手からの拒絶を予期し、拒絶のサインが認められないかという視点を持ちながら言語的・非言語的に気を遣うことで、持続的にストレスを経験し、その後の抑うつが高まる可能性が考えられる。日常体験しうる主観的な拒絶予期場面において、抑うつが発生を予防するためには、対人関係において相手から拒絶されないことを基準に行動を選択するのではなく、特に自己概念や自尊感情にかかわる内容について、個人内の対人ストレスを生じさせないよう意見や立場を表出することが重要であると考えられる。

本研究においては、拒絶阻止の行動を「拒絶を予期した状況下で、拒絶を阻止するという意図を持って選択された行動」という定義のもと、その頻度による対人ストレスおよび気分への影響を検討した。そのため、拒絶阻止の行動として挙げられた各項目の機能、つまり行動直後にもたらされる結果を直接的に扱っていない点は本研究の限界点として挙げられる。また、対人ストレスと抑うつとの関係性について、本研究において

は実験時に生じた対人ストレスの高さが実験開始時に測定していた抑うつとは関連せずにその後の抑うつの高まりを予測したことから、対人ストレスを抑うつの要因と位置づけ考察した。しかしながら、現実的には、抑うつが悪化傾向にある場合に対人ストレスを感じやすくなるといった双方向性も十分に想定される。実際に、本研究を解釈する上での二点目の限界点として、2回目の調査までの3か月間の対人ストレスは測定していない点が挙げられる。3ヶ月の間に、実験に参加したペアの間でどのような相互作用が経験され、それに伴い対人ストレスと抑うつの両者がどのように変化したかといった継時的な検討については、今後の重要な課題となるであろう。しかしながら、本研究はあくまでも「拒絶予期のある状況下において拒絶阻止の行動が形態として観察された場合に、本研究で示されたように対人ストレスを引き起こし得る」という前提に立っており、参加者の意図による定義に則り収集された項目を客観的な行動評定により測定し、「拒絶されない」つまり自身を守るという意図で選択した行動が対人ストレス、ひいては抑うつに影響を与えている可能性を示した点で、本研究の知見には意義があると考えられる。

第4節 拒絶に対する回避的態度と拒絶阻止の行動，気分の関連の検討【研究4-3】

第1項 背景と目的

拒絶阻止の行動は、拒絶過敏性の低い者においても認められるが、拒絶過敏性のうち拒絶に対する回避的態度の高い者において特に多く認められる行動的特徴であると考えられる。そこで研究4-3では、拒絶過

敏性の高次因子である「拒絶に対する回避的態度」の高低により、拒絶阻止の行動の頻度に差異が認められるかどうかを検討する。

第2項 方法

1. 対象者

健常者 32名（男性 10名，女性 22名，平均年齢 18.81歳， $SD=0.74$ ）。同性の友人同士のペアで募集を行った。

2. 調査材料

- (1) 拒絶過敏性：研究 1 で作成された日本語版 IPSM を使用した。全 27 項目について，4 件法（1：全然あてはまらない，2：ややあてはまらない，3：ややあてはまる，4：とてもあてはまる）で回答を求めた。
- (2) 日本語版 PANAS（川人ら，2011）
- (3) 対人ストレス：「いまの会話で相手に気を遣い，気疲れを感じている」について，Visual Analog Scale（VAS）にて回答を求めた。
- (4) うつ症状：日本語版 Beck Depression Inventory-II（BDI-II；小嶋・古川，2003）。21 項目からなり，4 件法で回答を求めた。
- (5) 研究 4-1 で得られた拒絶阻止の行動（うなずき，ジェスチャー，笑い，あいづち，自身の短所を自分で話す，自身の短所に同意する，自身の短所に弁明する，相手の短所をフォローする，推量・疑問形の語尾を用いる；後日実験従事者 2 名により，録画映像および逐語テキストから頻度をカウント）

3. 実験手順

実験手続きは木村（2005；2010；2012）および中島（2014）を参考にした。実験手順を Figure4-4 に示す。被験者 2 名は個室に案内され

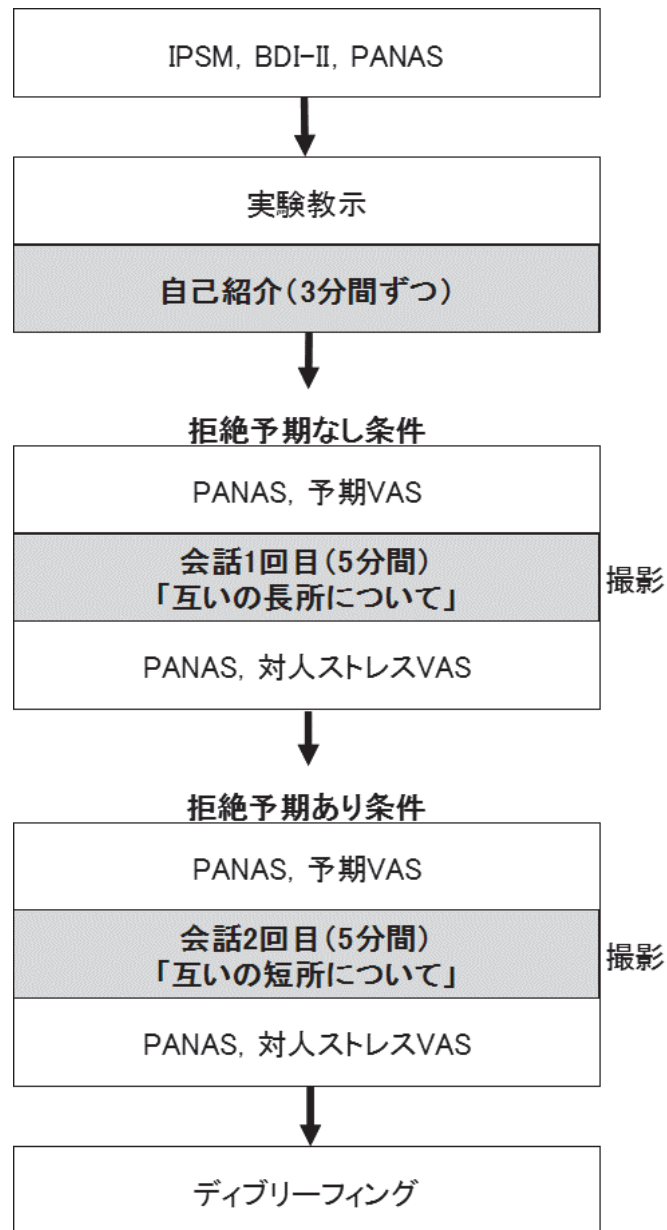


Figure4-4 研究 4-3 実験手順

た。まず、質問紙回答用の席に案内され、実験の概要について説明がなされた。研究目的は「性格特性、接触頻度と会話の評価の関連を調べるための実験」であると伝えた。質問紙へ回答した後にいくつかのテーマについて会話をすること、各テーマの会話の後に会話の評価を行い、その変化を調べることが目的であると教示した。まずはじめに、IPSM, PANAS, BDI-II への回答を求められた。次に、会話ブースに移動し、簡単な自己紹介を5分間自由に行った。会話ブースは、カメラを向いてハの字型に内側向き45度に配置し、椅子間の距離は100cmとした。会話の様子は5m離れた位置からデジタルビデオカメラで被験者2人の全身が写るよう撮影した。はじめの3分間の自己紹介は、カメラに慣れることが目的であると伝えた。続いて、1回目の会話のテーマを教示し、PANAS, 拒絶予期への回答を求めた。会話ブースに移動し、互いの長所について5分間の会話を行った（拒絶予期なし条件）。その後、PANAS, 対人ストレスへの回答を行った。次に、2回目の会話のテーマを教示し、PANAS, 拒絶予期への回答を求めた。互いの短所について5分間会話を行った（拒絶予期あり条件）。その後、質問紙回答用の席に戻り、PANAS, 対人ストレス, 1回目の会話で相手に言われた自分の長所への回答を行った。最後にディブリーフィングを行い、被験者に「本研究ではポジティブな話題とネガティブな話題において会話中の態度がどう変化するかを検討することを目的としていたこと、録画した映像から後日行動評定を行うこと」を告げた。さらに実験内容の詳細と意義について口頭で説明し、被験者からデータ使用に関する同意を得た。

実験実施から約3カ月後に再度質問紙調査を実施し、BDI-IIを測定した。

4. 倫理審査

本研究は、早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会（承認番号：2014-283）により承認を得て実施された。

5. 分析方法

拒絶予期あり条件において拒絶予期が0であった者は拒絶予期喚起の操作が適切になされなかったとみなし、以降の分析から除外し、最終的な分析対象者を算出した。

まず、拒絶阻止の行動の非言語項目およびあいづちについては、予期あり条件における会話中の各行動の回数から予期なし条件における各行動の回数を引いた変化量を算出した。次に、拒絶阻止の行動のうちあいづちを除いた言語項目については、個人の発話量の影響を除くため、各項目に該当する文字数を、会話中の個人の総発話文字数で割った値を算出した。被験者をIPSMの拒絶に対する回避的態度合計得点の平均値を基準に2群（回避的態度高群，低群）に分けた。その後、拒絶に対する回避的態度の高低で拒絶阻止の行動の頻度および気分反応，対人ストレス，抑うつ気分が差異が認められるかどうかを検討するため，群（回避的態度高群，低群）を独立変数，拒絶予期あり条件，なし条件それぞれにおける拒絶阻止のための各行動の頻度，PANAS ポジティブ得点，ネガティブ得点，対人ストレス得点，そして実験時および実験から3か月後のBDI-II得点，3か月間のBDI得点の変化量を従属変数とした対応のないt検定を実施した。続いて，拒絶に対する回避的態度と会話中の拒絶阻止の行動の頻度，対人ストレスの関連を検討するため，二変数の相関係数を算出した。最後に，回避的態度および拒絶予期あり条件会話中の拒絶阻止の行動が対人ストレスに与える影響について検討するた

め、回避的態度を構成する「他者を傷つける不安による非主張性」、
「他者評価追従」をステップ1、拒絶阻止の行動のうち回避的態度との
間に有意な相関が認められた項目をステップ2に投入し、対人ストレス
得点を目的変数としたステップワイズ法による階層的重回帰分析を実施
した。

第3項 結果

拒絶予期あり条件において拒絶予期が0であった1名を以降の分析か
ら除外し、最終的な分析対象者は31名（男性10名，女性21名， 18.84
 ± 0.73 歳）であった。

まず、被験者をIPSMの「拒絶に対する回避的態度」の合計得点につい
て平均値を基準に2群（回避的態度高群，低群）に分けた。各群の記述
統計量をTable4-9に示す。その後、拒絶に対する回避的態度の高低で
拒絶阻止の行動の頻度および気分反応，対人ストレス，抑うつ気分に差
異が認められるかどうかを検討するため，群（回避的態度高群，低群）
を独立変数とし，拒絶予期あり条件および拒絶予期なし条件それぞれに
おける拒絶阻止のための各行動の頻度，PANAS ポジティブ得点，ネガ
ティブ得点，対人ストレス得点，BDI-II得点を従属変数とした対応の
ない t 検定を実施した（Table4-9）。その結果，拒絶予期なし条件に
おける各指標には有意差は認められなかった。拒絶予期あり条件につい
ては，拒絶阻止の行動のうち相手の短所をフォローする発言（ $t(30) =$
 $-2.80, p < .01$ ），および対人ストレス（ $t(30) = -3.29, p < .01$ ）に有
意差が認められ，どちらも回避的態度高群において高得点であった。ま
た，3カ月間のBDI-II得点の変化量にも有意差が認められ，回避的態度
高群において上昇していた（ $t(30) = -2.33, p < .05$ ）。

Table4-9 記述統計 (N = 31)

				回避的態度高群 (N=17)		回避的態度低群 (N=14)		t
				M	SD	M	SD	
IPSM		回避的態度合計		35.69	3.52	26.07	4.03	
		他者を傷つける不安による非主張性		18.25	2.02	13.40	2.44	
		他者評価追従		17.43	3.37	12.67	2.79	
阻止の行動	うなずき	(回)	拒絶予期なし	38.94	22.01	28.13	20.34	-1.44
			拒絶予期あり	40.06	21.69	31.33	15.85	-1.31
非言語				変化量				
	ジェスチャー	(回)	拒絶予期なし	17.59	15.46	24.00	14.30	1.22
			拒絶予期あり	18.12	14.77	22.87	14.65	0.91
				変化量				
阻止の行動	笑い	(回)	拒絶予期なし	9.12	7.10	7.93	9.45	-0.40
			拒絶予期あり	8.29	6.41	8.27	8.96	-0.01
				変化量				
阻止の行動	あいづち	(回)	拒絶予期なし	17.94	10.95	25.93	13.94	1.79 †
言語			拒絶予期あり	24.00	14.38	25.47	13.77	0.29
	自身の短所を話す	(%)	拒絶予期あり	17.21	15.45	15.29	12.97	-0.38
	自身の短所に同意する	(%)	拒絶予期あり	10.84	7.28	6.46	5.55	-1.89 †
	自身の短所に弁明する	(%)	拒絶予期あり	11.09	11.41	8.99	8.48	-0.59
	相手の短所をフォローする	(%)	拒絶予期あり	12.96	5.27	7.60	5.37	-2.80 **
PANAS			拒絶予期なし前	26.53	6.13	29.93	7.95	1.34
ポジティブ			拒絶予期なし後	27.24	7.29	31.00	6.55	1.54
			前後変化量	0.71	4.28	1.07	3.85	0.25
			拒絶予期あり前	22.35	7.13	27.33	7.00	1.99 †
			拒絶予期あり後	21.82	5.94	25.07	8.71	1.22
			前後変化量	-0.53	4.11	-2.27	4.88	-1.08
PANAS			拒絶予期なし前	23.12	6.29	22.73	9.66	-0.14
ネガティブ			拒絶予期なし後	18.94	6.90	19.60	9.02	0.23
			前後変化量	-4.18	3.89	-3.13	4.73	0.68
			拒絶予期あり前	24.65	6.50	20.67	6.33	-1.75 †
			拒絶予期あり後	19.88	5.84	19.47	8.15	-0.16
			前後変化量	-4.76	5.96	-1.20	4.49	1.92 †
対人ストレス			拒絶予期なし	35.29	30.85	43.64	36.87	0.69
			拒絶予期あり	56.17	31.14	23.57	24.88	-3.29 **
BDI-II			実験時	10.76	7.42	8.67	6.18	-0.87
			3ヶ月後	12.82	8.61	7.87	4.76	-2.05 †
			3ヶ月間変化量	3.18	4.05	-1.89	5.41	-2.33 *

† p < .10, * p < .05, ** p < .01

Note. 言語項目の%は該当文字数/発話文字数で算出

続いて、拒絶に対する回避的態度と会話中の拒絶阻止の行動の頻度、および対人ストレスの関連を検討するため、二変数の相関係数を算出した (Table4-10)。その結果、拒絶に対する回避的態度と会話中における拒絶阻止の行動の頻度については、拒絶予期なし条件では有意な関連が認められなかったが、拒絶予期あり条件ではうなずき ($r = 0.37, p < .05$)、自身の短所に同意する ($r = 0.52, p < .01$)、相手の短所をフォローする ($r = 0.41, p < .05$) が有意な正の相関を示した。また、会話中における拒絶阻止の行動の頻度と対人ストレスとの関連については、拒絶阻止の行動のうち、拒絶予期なし条件におけるうなずき ($r = 0.43, p < .05$) に加え、拒絶に対する回避的態度と相関を示した3つの行動、つまり拒絶予期あり条件におけるうなずき ($r = 0.40, p < .05$)、自身の短所に同意する ($r = 0.59, p < .01$)、相手の短所をフォローする ($r = 0.47, p < .01$) との間に有意な正の相関が認められた。

最後に、拒絶に対する回避的態度および拒絶予期あり条件会話中の拒絶阻止の行動が対人ストレスに与える影響について検討するため、拒絶に対する回避的態度を構成する「他者を傷つける不安による非主張性」、
「他者評価追従」をステップ1、拒絶阻止の行動のうち拒絶に対する回避的態度と有意な相関が認められた「うなずき」、「自身の短所に同意する」、「相手の短所をフォローする」をステップ2に投入し、対人ストレス得点を目的変数としたステップワイズ法による階層的重回帰分析を実施した (Table4-11)。その結果、重決定係数が有意であり ($R^2 = 0.52, p < .001$)、拒絶に対する回避的態度を構成する「他者評価追従」 ($\beta = 0.59, p < .001$)、および「相手の短所をフォローする」 ($\beta = 0.32, p < .05$) の標準偏回帰係数が有意であった。

Table 4-10 各変数の相関 (N = 31)

IPSM	対人ストレス		拒絶阻止の行動																
	拒絶予 期なし 条件	拒絶予 期あり 条件	拒絶予期なし条件						拒絶予期あり条件						変化量				
			うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	疑問・ 推量の 語尾	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち	自身の 短所に 同意	自身の 短所を 話す	相手の 短所を フォロー	疑問・ 推量の 語尾	うなずき	ジェスチャー	笑い	あいづち
拒絶に対する回避的態度	.81	.70**	-																
拒絶阻止の行動	.19	.43*	.29	-															
うなずき	.02	-.20	-.14	-.10															
ジェスチャー	.19	-.13	-.16	-.18	.02	-													
笑い	-.01	-.01	.15	-.18	.09	.07	-												
あいづち	.31†	.11	-.16	-.29	.25	.04	.30†	-											
疑問・推量の語尾	.12	.40*	.37**	.68**	-.01	-.32	.19	.15	-										
うなずき	.09	.15	-.18	-.14	.58**	.17	-.05	.17	-.24	-									
ジェスチャー	.10	.28	.13	-.03	.16	.50**	.12	.20	.11	.00	-								
笑い	.10	-.04	.09	-.23	.09	-.08	.91**	.32†	.10	.13	.13	-							
あいづち	.02	-.04	.04	.18	-.05	-.16	.23	-.02	.06	.27	-.13	.27	-						
自身の短所を話す	-.13	.59**	.52**	.14	-.11	-.05	.09	-.04	.31	-.28	.47**	.07	-.14	-					
自身の短所に同意	.07	.08	-.02	.32	.19	-.20	-.17	-.07	.01	.44*	-.25	-.20	.50**	-.22	-				
自身の短所に弁明	.21	.47**	.41**	.16	-.01	-.29	-.15	-.01	.22	-.01	.09	-.24	-.07	.35	-.10	-			
相手の短所をフォロー	.17	.07	-.18	.04	-.05	.18	.27	.15	-.05	.19	.17	.01	-.11	.23	.19	-.20	-		
疑問・推量の語尾	-.11	-.10	.05	-.52**	.12	-.13	.45*	.22	.26	-.09	.17	.42*	-.17	.18	-.41*	.04	-.11	-	
うなずき	.08	.06	-.04	-.04	-.48**	.16	-.16	-.09	-.24	.44*	-.17	-.23	.34	-.18	.26	.01	.25	-.23	-
ジェスチャー	-.24	-.05	.28	.14	.14	-.44*	.20	.36*	.42*	-.16	.55**	.21	.02	.53**	-.06	.37*	-.06	.30	-.33
笑い	.11	.42*	-.17	-.09	-.03	.00	-.38*	.04	-.23	-.17	-.01	.03	.04	-.07	-.03	-.16	-.25	-.15	-.01
あいづち																			

** p < .01, * p < .05

Table 4-11 拒絶予期あり条件における拒絶阻止の行動と、対人ストレスの関連 (N = 31)

	Step1				Step2			
	B	標準誤差	95%信頼区間		B	標準誤差	95%信頼区間	
			下限	上限			下限	上限
			β	β			β	β
IPSM								
他者を傷つける不安による非主張性								
拒絶阻止の行動	5.40	1.09	3.16	7.63	4.73	1.05	2.59	6.88
他者評価追従								
うなずき	-	-	-	-				
自身の短所への同意	-	-	-	-				
相手の短所のフォロー	-	-	-	-	168.97	69.13	27.37	310.56
<i>Adjusted R²</i>					0.44			0.52
ΔR^2								0.08

*** $p < .001$, * $p < .05$

第4項 考察

研究4-3の目的は、拒絶過敏性のうち拒絶に対する回避的態度と、実際の会話場面における拒絶阻止の行動の頻度の関連について明らかにすることであった。

分析の結果、拒絶に対する回避的態度が高い者ほど、拒絶を予期した場面において自身の短所を積極的に認め、相手の発言にうなずき、相手を持ち上げ、相手の短所についてはフォローする発言を多く用いることが明らかとなった。また、そのような者ほど、拒絶を予期した状況後の対人ストレスが高く、実験から3ヶ月間の抑うつの変化量が大きかった。相関分析の結果からもわかるように、拒絶阻止の行動のうち、拒絶に対する回避的態度の高さと関連したうなずき、自身の短所への同意、相手の短所のフォローは、どれも会話後の対人ストレスの高さとも関連を示した。重回帰分析の結果からは、拒絶に対する回避的態度のなかでも特に他者評価追従の高さと、拒絶阻止の行動のなかでも実際に会話場面における相手の短所をフォローする発言の多さが会話後の対人ストレスに影響を与えるという結果が得られた。

つまり、コミュニケーション場面において拒絶を避けるために自己の意見を抑えたり、相手の顔色を伺い意見を合わせるといった特徴が高い者は、拒絶を予期した場面において「相手からの拒絶を避けるために」自身の短所を積極的に話題に挙げ、相手を持ち上げ、相手の短所にも共感を示し一般化するよう努めるとともに、相手の言葉や態度に拒絶されていないことの根拠を求める傾向が高いことによって、結果として相手からの拒絶を知覚しなかった場合であっても、会話が終了した後に気疲れを感じていることが考えられる。

これらの行動的特徴は、本研究では仮説生成的に導き出されたもので

あるが、うつ病の者とそうでない者をペアにして会話を実施させ、会話の内容をいくつかのカテゴリーに分け各カテゴリーの生起頻度を調べた研究（Jacobson & Anderson, 1982）では、ほとんどのカテゴリーにおいて、その内容の発言頻度はうつ病かどうかで差が認められなかったが、自己に関する否定的な発言についてはうつ病の者において多いことが示されている。また、うつ病の者は、相手から聞かれていないにも関わらず否定的な様式で自己開示することが報告されている。研究4において、上記の言葉が対人ストレスを高めたという結果は、この知見を支持するものであると考えられる。

第5節 本章のまとめ

研究4で得られた知見を Figure4-5 に示す。研究4-1によって、拒絶を予期した場面において相手からの拒絶を阻止することを意識して取られた行動の種類が挙げられ、会話を円滑に進めるための一般的な配慮を表す非言語項目と、相手を持ち上げ自分を低める発言を心がける言語的項目に整理された。研究4-2では、対人関係におけるイベントをきっかけとした抑うつに発生に対人ストレスが関連することを想定し、対人ストレスがその後の抑うつの変化に与える影響を示したうえで、研究4-1により挙げられた拒絶阻止の行動の各項目の頻度がコミュニケーション前後の気分の変化や対人ストレスに与える影響について検討した。その結果、拒絶予期がある状況において相手を持ち上げる発言や、自身に対するネガティブな情報を積極的に肯定する態度が多い者ほど、会話後に対人ストレスを感じていることが明らかとなった。一方で、会話中にうなずきやあいづちを多く用いる者ほど、会話後にポジティブ感情が増加

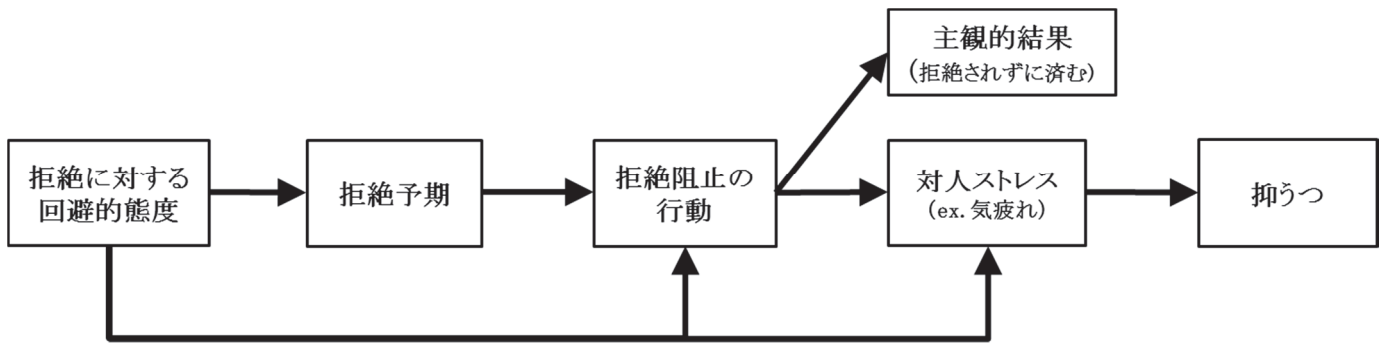


Figure4-5 研究4で得られた知見

していた。

研究 4-3 においては、拒絶過敏性のうち拒絶に対する回避的態度と、拒絶を予期した実際の会話場面における拒絶阻止の行動の頻度の関連、およびそれらが対人ストレスに与える影響について検討した。その結果、拒絶に対する回避的態度が高い者は、研究 4-2 において対人ストレスに影響を与えることが示されている、拒絶を予期した状況における相手を持ち上げる発言、うなずき、自己の短所を積極的に認める発言が多く、結果として会話終了後に気疲れを感じやすいことに加え、3 ヶ月後の抑うつが高まりやすいことが示された。また、拒絶に対する回避的態度を考慮した場合には、拒絶阻止の行動のうち特に相手を持ち上げる発言の多さが対人ストレスの高さを予測することが明らかとなった。拒絶に対する回避的態度は、言い換えれば対人行動の選択や自身がとった行動の評価基準が相手の態度や意見に置かれている状態を指す。そのような傾向が強い者は、拒絶を予期した場合にそれを避けるために相手を不快にさせないように振る舞うとともに、その結果として拒絶を表すサインが表れていないかどうか相手の言葉や態度に過敏になることで、結果的にそのような傾向の低い者と比較して高い対人ストレスが生じ、抑うつが高まることが示唆された。コミュニケーション場面において、相手の感情や思考を推し量り対人行動を選択することは個人間の顕在的なストレスを避け、関係性を良好に保つために重要であるが、一方で個人間ストレスの予防を優先させた場合に個人内ストレスが高まる可能性が指摘されている（橋本，2003）。相手との関係性を良好に保つことと自身の中でストレスを生じないように振る舞うことが一致した場合には問題は発生しないが、一致しない場合（相手からの拒絶が予期された状況下）において、個人間の関係性（相手から嫌われないこと）を優先させることで

行動の評価基準を相手の言葉や態度に置く傾向の高さは、結果として個人内の対人ストレスを引き起こし、抑うつにつながる可能性が考えられる。また、本研究では、友人同士で実験を実施したため、日常的な接触頻度および重要度の高い関係性であったために、相手との間にそのようなストレスを抱えることで、抑うつ反応が高まりやすかった可能性が考えられる。

日常の対人関係において、大小の拒絶を予期する状況は経験しうるが、そのような状況下において相手の意見や感情を押し量った上で自己がある対人行動を選択した場合に、その評価基準は相手の反応ばかりに依存せず自己強化できることが重要であると考えられる。

第5章 総合考察

第1節 本研究で得られた成果と臨床的示唆

第1章において、拒絶過敏性や抑うつに関する国内外の研究が展望され、問題点として、(1) 臨床知見からうつリスクとなるパーソナリティとして拒絶過敏性が定義され、ストレス生成モデルにおける脆弱要因であると考えられるが十分な検討がなされていない点、(2) 拒絶過敏性の認知的・行動的特徴に関する実証的な検討がなされていない点が挙げられた。認知的特徴については、拒絶に対する予期、知覚、反応の循環による自己充足的強化を説明した **Rejection sensitivity model** (Levy, et al., 2001) が提唱されているが、実証的な検討はなされていない。行動的特徴については、拒絶過敏性の高い者はただ拒絶体験を繰り返しているわけではなく、拒絶されることを避けるために相手の望むであろう行動を予防的に選択することで拒絶されることを避けていると考えられるが、そのような検討はなされていない。そのため、これまでほとんどの研究において抑うつの発生・維持メカニズムはそのほとんどが素因ストレスモデルの枠組みに当てはめられ理解されてきた。そこで、さまざまなストレスのなかでも抑うつとの関連が特に指摘されている対人ストレスを取り上げ、抑うつの発生・維持メカニズムをより精緻に理解するため、本研究が実施された。本研究により検討された、拒絶過敏性の認知行動的側面と抑うつとの関連を **Figure5-1** に示す。

第2章において、拒絶過敏性には拒絶されることを恐れる認知的特徴をあらわす「拒絶に対する恐れ」と拒絶されないために行動を選択した

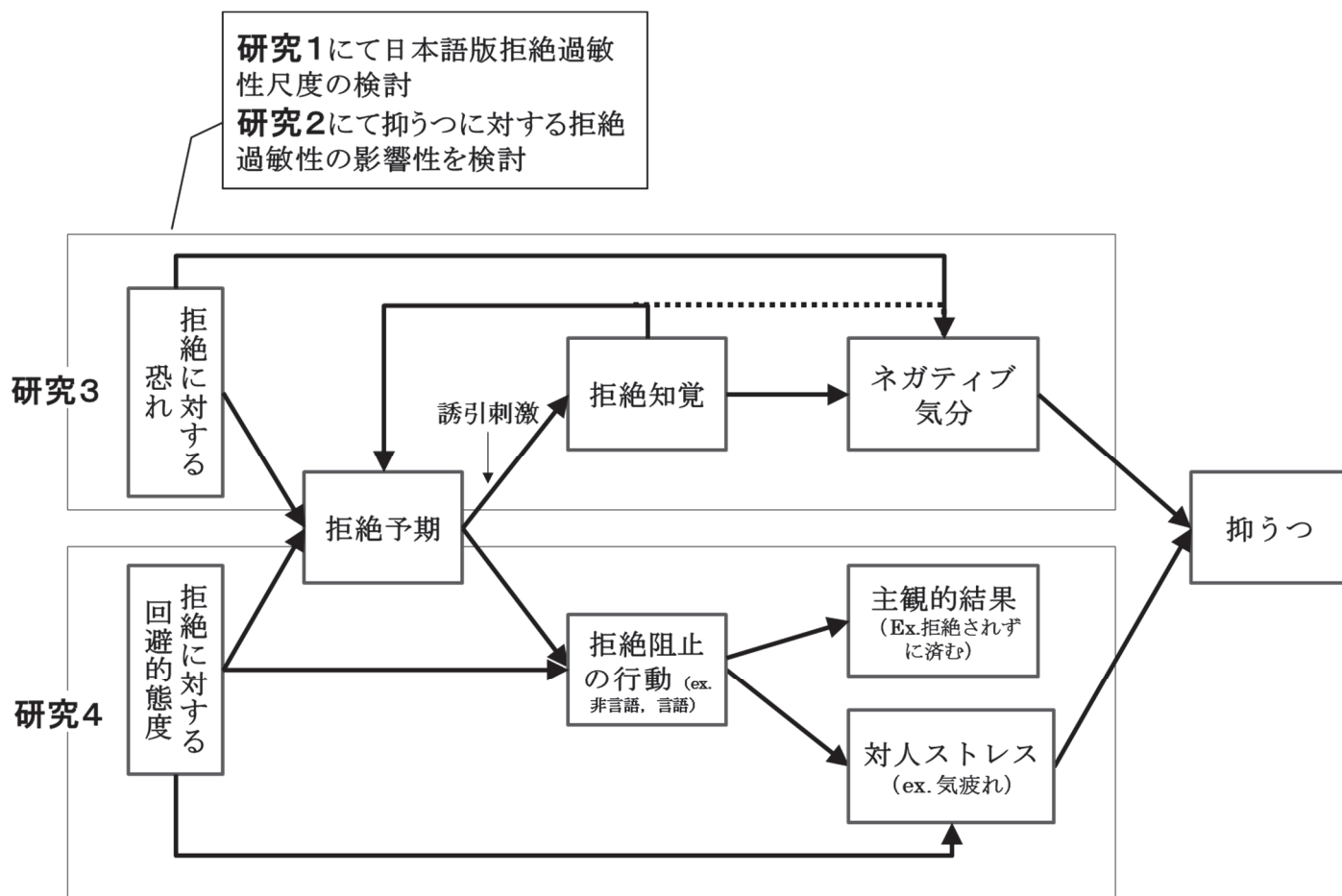


Figure5-1 拒絶過敏性の認知・行動的側面と抑うつの関連

りそれを良しと考える姿勢をあらわす「拒絶に対する回避的態度」の二つの側面があることが明らかとなった。また、本研究で対象とした健常大学生のなかにも、拒絶過敏性の高い者は一定数存在すること、そして拒絶過敏性が高い者ほど日常生活のなかで高い対人ストレスを感じ、これらが抑うつを高めていることが示された。

第3章において、拒絶体験のプロセスを記述した *Rejection sensitivity model* (Levy, et al., 2001) の検討が行なわれ、一般的に拒絶されることの予期と知覚は、予期が高いことによりわずかなサインに対しても拒絶を知覚しやすくなり、知覚することで次の状況における予期が高まるといった循環の形をとることが示された。また、拒絶過敏性のうち拒絶に対する恐れが高いほど、一度拒絶を知覚した後の拒絶予期が高く、予期を介して間接的に拒絶の知覚を高めるとともに、知覚した際にその程度にかかわらず高いネガティブ気分が引き起こされることが示された。

第4章において、拒絶阻止のために取られる行動にはうなずき、ジェスチャーのように会話を円滑に進めるための一般的な非言語項目と、相手を持ち上げ自分を低める言語項目があることが明らかにされた。また、友人との会話場面で相手からの拒絶のサインを予期した状況下において、この拒絶阻止の行動のうちうなずきとあいづちを多く用いるほど会話後のポジティブ気分が高いこと、そして自分自身の短所について話したり相手の短所をフォローするような言語項目を多く用いる者ほど、最終的に拒絶を知覚しなかった場合であっても、会話後に対人ストレスを高く感じ、3ヶ月後の抑うつが高いことが示された。また、拒絶に対する回避的態度が高い者ほど、相手からの拒絶を予期した状況において、拒絶阻止の行動のうち対人ストレスにつながる非言語行動を多くとることが

示された。

これらのことから、拒絶過敏性の高い者は、拒絶される可能性を認識していない状況においては、拒絶されるのではないかという予期や、相手の言葉や態度に拒絶のサインを検出しやすいこともなく、拒絶されな
いために相手を不快にさせないような行動を積極的に選択することもなく、拒絶過敏性の低い者と変わらないコミュニケーションを取っていると考えられる。一方で、一度拒絶の可能性を認識した場合には、上記のような認知的・行動的特徴を示し、拒絶を知覚することで拒絶予期-拒絶知覚の循環に陥り過敏性が亢進する、あるいは拒絶されな
いために自己を抑え、相手の望むように振る舞うことで対人ストレスを感じやすくなる
ことが抑うつ
の発生・維持につながると考えられる。

以下に、本研究から得られた知見やこれまでの先行研究を踏まえて、ストレス生成モデルの観点からの抑うつ
の理解や心理的支援の可能性について考察を述べる。

第1項 抑うつに関連する対人ストレスの拒絶過敏性の観点からの理解

本研究で得られた一連の知見から、拒絶過敏性が高い者の対人関係における特徴として大きく3点が挙げられる。まず一つ目は、対人関係上の些細な手がかりに敏感であることである。拒絶過敏性が高い者は、拒絶を予期した場合に相手の発言や態度に拒絶のサインを見出しやすいこと、そして拒絶を予期していない場合であっても、拒絶を知覚した場合にはその反応が大きいことが示された。この特徴によって、家族や友人の何気ない一言や些細な態度を批判や軽蔑、拒絶のサインと受け取り、ひどく傷ついてしまうといったことが考えられる。二点目は、個人内の

ストレスよりも、個人間の関係性を優先させることである。拒絶過敏性が高い者は、拒絶を予期した場合に、相手を不快にさせないことと自己の意見を主張することをトレードオフと認識し、両立させられないことが考えられる。また、その結果として気疲れといった対人ストレスを感じやすいことが示された。この特徴によって、苦手な相手とも良い関係を結ぶために気を遣いストレスを感じているといった状態や、表面的には適応しているように見えるが実は本人は苦慮しているといった困難が考えられる。そして三点目として、行動の良し悪しの判断基準が外（自身が思う相手の反応）にある点である。相手から拒絶されないために、本来の自己とは異なる、相手が望んでいるであろう自己を振る舞う傾向があること、そしてこのように基準が外にあるため自身の行動を自己強化できず、他者からの意見によって自己概念が揺らぎやすい可能性が考えられる。この特徴によって、相手からの指摘や注意によって自己概念が影響を受け、過剰に落ち込んでしまうといったことが考えられる。

このように、抑うつに関連するさまざまな対人関係上の問題について、拒絶過敏性の特徴による理解が可能なのではないかと考えられる。

第2項 認知行動的観点からの拒絶過敏性の再理解

本研究において、従来パーソナリティ特性とされてきた拒絶過敏性を、質問紙により「自分にどの程度当てはまるか～」と教示された質問への回答によって得られた、ストレスの生成にかかわる、ある程度安定的な個人の認知行動的特徴に加えて、実験場面において測定された、ストレスの増幅にかかわる、状況に対応した認知や行動の二つの水準で捉え直した。また、その上で安定的な個人の認知行動的特徴が状況依存的な認知や行動を予測することを示した。

ここでいう個人の認知行動的特徴とは、質問紙で測定された拒絶過敏性、つまり従来パーソナリティとされてきた概念を指しているが、これはこの拒絶過敏性の高さと状況依存的な認知行動の関連が、拒絶予期のある場合のみで認められたことによる。拒絶過敏性が高い者も、拒絶される可能性を認識していない状況では、拒絶予期の高さや拒絶阻止の行動の頻度は低い者と変わらないことが示された。これは、拒絶過敏性が高いからといって常に拒絶を恐れ予期しているわけではなく、対人場面でいつでも自己を抑え相手に迎合しているわけではないということを示唆する結果といえる。つまり、拒絶過敏性があらかず認知や行動には少なくとも空間的一貫性は成立しないと考えられる。拒絶過敏性は変容が前提とされないパーソナリティとして扱うのではなく、状況依存的な認知や行動と、それらよりは高次の水準で捉えた、拒絶の予期がある状況においてある程度安定的な認知行動的特徴といった二つの水準に分けて捉えることが妥当であると考えられる。それにより、拒絶過敏性を構成するこの二つの水準の認知や行動は、日々の対人コミュニケーションにおける随伴性や、なかでも繰り返される拒絶体験などによって学習されてきたものであると捉えることが可能となる。

その上で、拒絶過敏性を構成するこの二つの水準の認知や行動の関係性について述べる。高次の水準である認知行動的特徴とは、自身の普段の対人行動について、たとえば「他の人を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほうがましだ」、「拒絶されることが怖いため、自分の意見を言わないようにしている」といった態度を表し、そのような個人は、たとえば相手から自身の短所を改めて考え言語化されるといったある特定の状況においては、自身の短所について必要以上に傷つくことを言われぬよう相手を不快にさせないことを目的

として、たとえ自己概念と異なるとしても自身を低める内容の発言や、相手の短所については意識的に一般化や共感を示すといった、低次の水準としての状況依存的な行動をとりやすいことが考えられる。この場合、自身の気持ちを抑え無理に相手に合わせるといった状況依存的な行動は、その直後の相手の反応が好意的であることや、必要以上にネガティブなことを言われたり批判的な態度を取られたりせずに済んだといった結果を強化子として強化されている可能性が考えられる。また、このような経験を積み重ねることで、ある程度安定的に捉えられている特徴である「他の人を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほうがましだ」、「拒絶されないために、自分の意見を抑えるべきだ」といった認知が一層支持され、強まることが考えられる。ある状況における認知や行動によってその一つ上位の水準の認知や行動が強化されるといった方向性については、たとえば「もし他の人が本当の私を知ったら、私のことを嫌いになるだろう」という認知的特徴を持つ者が相手の態度に拒絶のサインを知覚した場合には、この認知的特徴が強化されるだろう。

このように、「拒絶過敏性が高い」ことの維持、亢進の背景には、ある程度安定的な個人の認知行動的特徴が、ある状況における認知や行動を予測するという方向だけでなく、そのような拒絶体験あるいは拒絶阻止による対人ストレスの経験の蓄積によって認知行動的特徴が一層強化されるといった循環プロセスが想定される。

両者を併せて理解し扱うことで、拒絶過敏性の高い個人がある程度一貫して拒絶の知覚や対人ストレスを感じやすい状況をあらかじめ想定した、予防的な対応が可能になると考えられる。

第3項 拒絶過敏性を脆弱性要因に据えたストレス生成モデルの観点を取り入れた抑うつの理解

研究1と研究2の結果から、拒絶過敏性の高い者は対人ストレスを感じやすく、これらが抑うつと関連することが示された。従来抑うつの発生・維持のメカニズムについて説明した諸理論はストレスの経験を前提として、ストレスを経験した後の認知行動的対処を中心的な要因に据えることで、素因ストレスモデルに当てはめ理解されてきた。しかしながら、実際には、本研究で示されたように、拒絶過敏性の認知的・行動的特徴がストレッサーの知覚自体を高め、抑うつを高めることは決して少なくない。このような知見は、近年になり、ストレス生成モデルとして提唱され（Hammen, 2006）、Beckの認知モデルにおける要因のひとつである抑うつスキーマのいくつかも、実際にはストレスを生成する機能を有するとしてストレス生成モデルの枠組みで理解できることが指摘されていることから（黒田, 2011）、この理解自体には一定のコンセンサスがあると考えられる。したがって、今後は、抑うつの発生・維持についてストレス生成モデルの視点から主観的ストレスの生成の時点の個人差についても仮定する必要があるだろう。これにより、ストレッサーの生成にかかわる個人内要因と、ストレスの維持・悪化にかかわる個人内要因をそれぞれ考慮することで、従来の素因ストレス理論による理解を補完する形でより精緻に理解することが可能になると考えられる。

第4項 拒絶過敏性の認知行動的特徴の再理解に基づいた抑うつの心理的援助の示唆

うつ病患者を対象とした基礎研究や臨床研究は、これまでに比較的多くの知見が蓄積されている。そのため、これまでの知見を踏まえたうえで、

抑うつ状態の改善に対して本研究の結果がどのように貢献できたかを述べることにする。

うつ病に対しては、すでに効果の実証された心理療法が存在し、なかでも認知行動療法が他の心理療法と比較して高い効果を有することが報告されているとともに、各国のうつ病治療ガイドラインにおいて、認知行動療法が挙げられている（American Psychological Association, 2001; NICE, 2009; American Psychiatric Association, 2010）。薬物療法と比較しても、うつ病に対する認知行動療法は同等の治療効果があるとともに（Dreissen & Hollon, 2010）、効果の維持という点ではより優れているという報告がされている（Hollon, DeRubeis, Shelton, Amsterdam, Salomon, O'Reardon, Lovett, Young, Haman, Freeman, & Gallop, 2005）。本邦においてもうつ病に対する認知行動療法が実施され、系統的レビューにおいていずれも中程度以上の効果を有することが報告されている（佐藤・丹野, 2012）。これらの介入研究で用いられたコンポーネントは、心理教育、認知的技法である認知再構成法、行動的技法である行動活性化、問題解決療法、社会的スキル訓練が中心であった。

本研究で示されたように、拒絶過敏性の高い者は自ら対人ストレスを作り出していると考えられる。つまり、起こったストレスにどう「対処」するかといった従来の認知行動療法で中心とされてきた観点を補完する形で、対人関係におけるストレスを必要以上に「作り出さない」という視点に立ったアプローチを加えることが効果的であると考えられる。

まず研究3によって、拒絶過敏性の高い者は拒絶されるのではないかとこの予期が高いことから相手の言動や態度に拒絶のサインを検出しやすいことが示唆された。そのため、主観的な拒絶体験の生成に介入する

ためには、拒絶されることへの予期にアプローチすることが効果的である可能性が考えられる。ここで、従来の認知行動理論に基づくプログラムにおいても、たとえば認知再構成や問題解決療法の題材となる出来事として対人関係に関する話題が挙げられることは十分に想定される。しかしながら、そのような場合は、たとえば拒絶されたと感じたなどその個人が知覚した出来事に対して、より適応的な認知や対処行動を検討することになるため、予期について扱われることはほとんどない。知覚したことを前提にその出来事に対する捉え方や行動的対処を扱うのみではなく、拒絶を予期した状況を取り上げ、その見積りの妥当性について検討することが重要であると考えられる。

続いて研究4によって、拒絶過敏性の高い者は相手からの拒絶を予期した場合に、それを避けるために自己ではなく相手本位の言葉を選択することによって気疲れといった対人ストレスが高まることが示唆された。つまり、拒絶されることを予期した状況において拒絶を阻止するという目的で選択される行動にアプローチすることが有効である可能性が考えられる。お世辞にはコミュニケーションを円滑にする役割もあるが、必要以上に自己の意見を抑えたり、謙遜することによってストレスを感じている場合には、改善が必要であると思われる。研究4において対人ストレスを高めることが示された、自身の短所に積極的に同意する発言や、相手の短所をフォローする発言は、自己の意見を主張できずに相手に迎合すると言えれば、社会的スキルの不足とみなしうる。

本邦で実施された先述の認知行動療法プログラムにおいても、社会的スキル訓練は多くの研究で取り入れられており（佐藤・丹野，2012），社会的スキルの向上を目的としたプログラムにより短期的な抑うつ改善が認められている（坂野・中村・岡島・山内・高垣・西郷・中島，

2010)。しかしながら、社会的スキルと抑うつ改善の長期的維持効果は認められておらず（坂野ら，2010），介入によって獲得された社会的スキルが般化されなかったことが示唆されている。つまり，スキルの獲得と，適切な状況で使用できることには異なるアプローチが必要であるといえる。先述のように，研究4の結果から，拒絶過敏性の高い者は，拒絶される可能性を認識していない状況においては拒絶過敏性の低い者と変わらないコミュニケーションを取っていることが考えられた。一方で，一度拒絶の可能性を認識した場合には，拒絶されないために自己を抑え，相手の望むように振る舞う傾向が高いことが示された。このことから，拒絶過敏性が高い者は自己主張のスキルが欠如しているわけではなく，拒絶を予期した状況下において主張しないことを積極的に選択していることが考えられる。つまり，拒絶に対する回避的態度が高い者は，たとえば主張訓練などスキルの獲得を目的としたプログラムを実施しても，拒絶を予期した状況下では活用されないことが考えられる。そこで，拒絶阻止の目的のもと自己を抑え相手にとって都合の良いように振る舞うことを良しとする態度を改善するようなアプローチを行なうことが必要であると考えられる。たとえばロールプレイといった主張訓練に先立ち，相手からの拒絶を予期した場合に拒絶を避けるために相手に取り入ることのネガティブな側面や，適切な形で自己の意見を表現したり，必要以上に相手に追従しないことの必要性に関する心理教育を加えるなど，認知的な側面へのアプローチが重要であるだろう。その上で，拒絶を予期した状況においてどう振る舞うかを具体的に想定したロールプレイや，日常生活における実践を実施し，そこで得た体験を振り返る。行動の自己評価について，Becker, Heimberg, & Bellack（1989，高山監訳，1990）は，スキル訓練においてうつ病患者が自身の行動を評価

する際、ほとんどの者は行動の質を行動の効果性（行動の結果としての相手の反応）によって判断するが、そうではなく自身が目的とした行動を遂行できたかどうかの軸で評価をすることの重要性を述べている。これはまさに、対人場面における自己の行動の軸が自己になく、相手にとってどうかといった外的な基準に依存するといった、拒絶に対する回避的態度の特徴をあらわしている。Becker et al. (1989) は、前述のような軸で自己評価をする訓練を併せて積み重ねることで、相互的な社会的行動を技能として捉えることができ、その技能を構成する構成要素は習得できるものであり、行動の効果性は関係ないという考え方を教えることができる」と述べている。このように、パーソナリティとされてきた拒絶過敏性の認知行動的特徴を捉え記述することで、その重要性に反してこれまで扱われてこなかった、対人関係における脆弱性にアプローチしていくことが可能になると考えられる。

第5項 拒絶過敏性に焦点を当てた抑うつ予防的アプローチの可能性

本研究は一般大学生を対象としたものであるが、研究2において、健常者の中にも拒絶過敏性が高い者が一定数存在することが確認された。また、研究3および研究4において、このような者は対人関係におけるストレスを知覚しやすく、知覚した際に抑うつ反応を呈しやすいことが示唆された。したがって、今後より大きな対人ストレスを経験した場合には、拒絶過敏性が高いものほど、より強い抑うつを引き起こすきっかけとなりうる可能性があると考えられ、このように拒絶過敏性が高い者は、対人ストレスをきっかけとして抑うつに至る可能性の高いリスク群であるといえる。つまり、現在問題となるようなうつ症状は示していな

いがリスクとなる特徴（高い拒絶過敏性）を有する者をターゲットとして想定した予防的なアプローチが有効であると考えられる。Lewinsohn & Clarke（1999）においても、抑うつに陥ることに起因する悪影響などが生じる前に早期介入を実施することの重要性が指摘されている。

加えて、抑うつに対する予防的アプローチについては、大学生を中心とする青年期が重要であると述べられ（坂本・西河，2002），注目されている。その理由はさまざま挙げられるが、大きく3点に分類できる。この時期は、学業、対人関係、職業選択といったさまざまなストレスイベントを経験する機会が多く（苫米地，2006），自己に向けた内省が高まる時期である。具体的には、（1）抑うつを経験しやすい時期であり（Harrington & Clark, 1998），本邦における調査でも大学生を含む青年期における抑うつは他の年代と比較して高いことが示されている（厚生労働省大臣官房統計情報部，2002；中根・本田，2001）。（2）軽度の抑うつであっても深刻な心理社会的支障を引き起こすこと（Harrington & Clark, 1998），（3）この時期に抑うつを経験した場合、後にうつ病を発症する場合も多いことや（Munoz, Mrazek, & Haggerty, 1996），うつ病の診断基準を満たさないレベルの閾値下抑うつは将来のうつ病発症リスクが高いこと（Cuijpers & Smit, 2004），である。

抑うつ予防やストレスマネジメントを目的とした介入研究はこれまで多く行われており、認知再構成法やストレスコーピングに関する心理教育的なアプローチ、社会的スキル訓練やリラクセーションを主な構成プログラムとした認知行動理論に基づくプログラムの有効性が示されている。しかしながら、Jané-Llopis, Hosman, Jenkins, & Anderson（2003）により行われた抑うつ予防プログラムのメタ分析において、

69 本の研究を対象として効果を検討した結果、一定の効果は認められるものの、大きな効果は示されていないと指摘されており、十分であるとはいえない。本研究により、ストレス生成のプロセスにおける脆弱性として拒絶過敏性の影響が示されたことから、ストレスを経験した際にどう対処するかといった従来の素因ストレスモデルの理解に基づいたアプローチに加え、予防の文脈では特に、ストレスを必要以上に作り出さないためのアプローチが有効であると考えられる。現在広く実施されている予防的介入のコンポーネントのうち、ストレス生成へのアプローチとみなし得るものとして、適切な形での主張を促す社会的スキル訓練が挙げられる。しかしながら先述のように、拒絶過敏性の高い者は必ずしもスキル不足というわけではなく、相手からの拒絶を避けるために主張しないことや、たとえ自分の意見と異なっても相手の望んでいるであろう方向に合わせて振る舞うといった認知的特徴がひとつの妨害要素となっていることが考えられる。つまり、スキル訓練のみならず心理教育や認知的介入を用いて、主張をするかどうか、どの程度主張するかなどといった行動選択にかかわる認知を併せて扱うことが重要であると考えられる。

また、研究3において拒絶予期が拒絶知覚に影響を与えることが示されたことから、前述の社会的スキル訓練に加え、拒絶予期の見積もりの妥当性についても取り上げることで、拒絶予期と拒絶知覚の循環を断ち切るきっかけとなることが期待できる。

石川ら（2006）は、抑うつ予防プログラムの実施形態を、すべての対象者を介入対象とする **Universal** タイプと、リスクのある対象者を選抜する **Target** タイプに分類している。本研究により抑うつへの影響が新たに示唆された、拒絶予期の見積もりや、拒絶を避けるための行動を

積極的に選択するといったストレスの知覚以前のプロセスについては、実際に発生したストレスイベントと比較して話題に挙がりにくいことが想定されることから、Universal タイプのプログラムによって拒絶過敏性が高い者と低い者がともにプログラムに参加しこれらの点について意見を交換することができれば、より多様な視点を有することにつながると思われる。

第2節 今後の課題と展望

本研究では、拒絶過敏性の認知行動的特徴を明らかにするとともに、それらが抑うつに与える影響について検討を行なうことで、臨床的意義が述べられた。最後に本研究の知見を踏まえて、今後の課題と展望について簡潔にまとめることとする。

第1項 取り上げる要因について

本研究では、ストレス生成モデルの立場から、脆弱性として拒絶過敏性を取り上げ、対人ストレスの発生を通して抑うつへの影響について考察を行なった。ストレス生成モデルがストレスの発生までのプロセスを記述する理論であるのに対し、従来の抑うつを説明する諸理論は素因ストレスモデルの観点から、ストレスの経験を前提としてそのストレスに対する認知行動的対処の傾向を個人の脆弱性として抑うつへの影響を理解するものであった。したがって、両理論は相反するものではなく、抑うつの発生・維持の理解の枠組みとして互いに補完しあうものであると考えられる。したがって、今後は、ストレスの発生に寄与しうる脆弱性

要因と、ストレスへの対処の特徴である素因の両者を同時に扱い、社会的要因や生物学的要因を含めて検討することにより、抑うつが発生・維持についてより統合的な理解が可能になると考えられる。

第2項 相手との関係性の影響について

研究3においては、拒絶に対する基本的な予期、知覚、反応の特徴を検討するために、相手との関係性や、拒絶の回避といった他の要因の影響をなるべく統制するべく、PC課題であるサイバーボール課題を用いて排斥状況を操作し、拒絶過敏性の高い者の認知的特徴を明らかにした。Rejection sensitivity modelに基づき予期、知覚の循環および感情反応への影響性について実証した点は意義があると考えられる。次の段階として、日常生活により活かしやすい知見を得るためには、普段の生活で接する親密な相手との間の拒絶体験について検討することが望まれる。個人特性としての拒絶過敏性に加えて、相手との関係性を要因に組み込み、予期や知覚、反応について本研究における知見と照らし合わせながら理解することで、個人にとっての相手との関係性を踏まえたアプローチにつながる知見が得られると考えられる。

第3項 拒絶阻止の行動の強化子について

本研究では、これまで検討されてこなかった拒絶阻止の行動について、その種類および拒絶過敏性の高さによる頻度の差異や対人ストレスへの影響を明らかにした。研究4-1において、「自分が傷つかないために（相手からひどいことを言われなくするために）心掛けた行動」を尋ね得られた回答から、拒絶阻止の行動の種類を分類した。そのため、相手とのコミュニケーションが円滑に進むことや、拒絶のサインを検知しなかつ

たなどの主観的結果が強化子になっていることで、拒絶を予期した状況下においてこれらの行動が維持しているとみなすことができる。しかしながら、拒絶阻止の行動のなかでも、相手を持ち上げ相手の短所をフォローする発言や、相手から自己の短所を指摘された際に積極的な同意を表したり、自身を低めるような内容の発言は、気疲れにもつながるといふ結果が得られているため、行動の維持にかかわる要因について詳細に検討することが望まれる。

研究 4-3 にて、拒絶を予期していない状況下においては拒絶過敏性が高い者も低い者と変わらないコミュニケーションを取っていることが示され、拒絶過敏性が高い者は社会的スキルの不足というよりは、拒絶阻止の行動を積極的に選択していることが考えられる。つまり、今後の展望として、行動の維持要因について、拒絶阻止の行動の強化子となる結果だけではなく行動選択にかかわる認知についても着目し、実証的な検討に基づき明らかにされることが望まれる。

第4項 拒絶過敏性、対人ストレス、抑うつの方方向性や相互作用について

本研究においては、抑うつの方防的観点から、抑うつ発生のきっかけとなる対人ストレス、なかでも相手から拒絶されることに着目し、その拒絶体験の経験頻度や強度における個人差を説明可能な変数として拒絶過敏性を取り上げた。そのため、本研究における仮説モデルは一貫して拒絶過敏性→対人ストレス→抑うつの流れを仮定し、検討を行なった。本研究の結果、研究 3 では実験課題で拒絶知覚を操作し経験させることでネガティブ気分が高まることや、研究 4 では実験教示によって拒絶予期を操作することで経験させた対人ストレスの高さがその後の抑うつの

高まりを予測したことから、この方向性については一定の支持が得られたと考えられる。また本研究は、健常者を対象に予防的観点から抑うつの発生を想定して実施されたことから、本研究により得られた知見は初期の抑うつの発生メカニズムについてはある程度の説明力を有すると考えられる。しかしながら、本研究の結果は、これ以外の方向性の可能性を否定するものではない。むしろ現実的には、抑うつが高いことによって対人関係において相手の言動や行動の解釈がネガティブに知覚されやすくなることや、そのように主観的に拒絶を知覚することで拒絶に対する恐れや回避的態度がより高まること、拒絶を予期した場合の拒絶阻止の行動の頻度が高まることなどは十分に想定される。特に、当初ストレス生成理論は、「抑うつ状態の者は自身の振る舞いによって周囲の者との不和といった対人ストレスを引き起こしやすいことから抑うつが悪化する」といった観点から提唱された理論であることから（Hammen, 1991）、抑うつの維持、悪化についての理解をより深めるためには、抑うつ状態であることが対人行動やそこでの本人の体験にどのように影響を与えるのかといった視点や、拒絶過敏性の認知行動的特徴が、日々の対人コミュニケーションにおける経験からどのようなフィードバックを受けて維持、強化されるのかといった点についてのさらなる検討が必要である。

第5項 臨床的妥当性について

本研究にて、パーソナリティと定義されてきた拒絶過敏性の認知行動的特徴を詳細に明らかにし、これらが抑うつに与える影響に関する知見が得られたことには意義がある。しかしながら、実際に本研究で得られた知見が実際のカウンセリング場面やうつ病患者にどの程度有用である

かについては更なる検討が必要である。たとえば、本研究によって拒絶過敏性の認知的特徴のなかでも拒絶予期の高さが知覚しやすさに影響することや、行動的特徴のなかでも拒絶を阻止する目的で相手に追従する言語行動が対人ストレスを生じさせることが実験的に示唆されたことから、これらに基づいた介入コンポーネントを既存の治療に付加することによって、治療効果の向上が期待される。

今後は、患者を対象とした調査および介入研究や予防的アプローチによる介入研究を行ない実証的な知見を積み上げていくことによって、本研究で得られた知見の臨床的妥当性を示し、拒絶過敏性が高い者の抑うつ予防、治療に一層貢献できるものと考えている。

引用文献

American Psychiatric Association 1994 Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed. DSM-IV). Washington, DC.

American Psychiatric Association 2013 Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed. DSM-5). Washington, DC.

Ayduk, O., Downey, G. & Kim, M. 2001 Rejection sensitivity and depressive symptoms in women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**(7), 868-877.

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.

Bavelas, J. B., Coates, L., & Johnson, T. 2000 Listeners as Co-Narrators. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 941-952.

Beck, A. T., Rush, J., Shaw, B. F., & Emery, G. 1979 Cognitive therapy of depression. New York: Guilford Press. (ベック, A. T., ラッシュ, J., ショウ, B. F., エメリー, G. 坂野雄二 (監訳) 神村栄一・清水里美・前田基成 (共訳) 2007 うつ病の認知療法 岩崎学術出版社)

Becker, R. E., Heimberg, R. G., & Bellack, A. S. Social skills training treatment for depression. Pergamon Press. (ベッカー,

- R. E., ハイムバーグ, R. G., ベラック, A. S. 高山巖 (監訳) 佐藤容子・相川充・佐藤正二 (共訳) 1990 うつ病の対人行動治療 (岩崎学術出版社)
- Bolling, D. Z., Pitskel, N. B., Deen, B., Crowley, M. J., McPartland, J. C., Mayes, L. C., & Pelphrey, K. A. 2011 Dissociable brain mechanisms for processing social exclusion and rule violation. *NeuroImage*, 54, 2462–2471.
- Boyce, Hickie, Parker, Mitchell, Wilhelm, & Brodaty 1993 Specificity of interpersonal sensitivity to non-melancholic depression. *J Affect. Disord.* 27, 101-105.
- Boyce P. & Parker G. 1989 Development of a scale to measure interpersonal sensitivity. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*, 23, 341-351.
- Bowlby, J. 1980 Attachment and Loss: Vol. 3, Loss: Sadness and Depression. New York: Basic Books.
- Buckley, K. E., Winkel, R. E., & Leary, M. R. 2004 Reactions to acceptance and rejection: Effects of level and sequence of relational evaluation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 14-28.
- Clarke, G. N., Hawkins, W., Murphy, M., Sheeber, L. B., Lewinsohn, P. M., & Seeley, J. R. 1995 Targeted prevention of unipolar depressive disorder in an at-risk sample of high school

- adolescents: A randomized trial of group cognitive intervention. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 34, 312-321.
- Cole, D. A. Martin, J. M., Powers, B. & Truglio, R. 1996 Modeling causal relations between academic and social competence and depression: A multitrait-multimethod longitudinal study of children. *Journal of Abnormal Psychology*. 105, 258-270.
- Cuijpers, P., & Smit, F. 2004 Subthreshold depression as a risk indicator for major depressive disorder: A systematic review of prospective studies. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 109, 325-331.
- Davidson, Zisook, Giller, & Helms 1989 Symptoms of interpersonal sensitivity in depression. *Compr. Psychiatry*, 30, 357-368.
- Derogatis L. R., Lipman R. S., Rickels K., Uhlenhuth E. H., & Covi L. 1974 The Hopkins Symptom Checklist (HSCL): A self-report symptom inventory. *Behavioral Science*, 19, 1-15.
- Downey G. & Feldman S. I. 1996 Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70(6), 1327-1343.
- Dozois, K. S., & Beck, A. T. 2008 Cognitive schemas, belief and assumptions. In K. S. Dobson & D. J. A. Dozois (Eds.) *Risk factors in depression*. San Diego: Academic Press. pp. 121-144.

- Dreissen, E., & Hollon, S. D. 2010 Cognitive behavioral therapy for mood disorders: Efficacy, moderators and mediators. *Psychiatric Clinics of North America*, 33, 537-555.
- Ehnavall, A., Mitchell, P. B., Hadzi-Pavlovic, D., Loo, C., Breakspear, M., Wright, A. Robert, G., Frankland, A., & Corry, J. 2011 Pain and rejection sensitivity in bipolar depression. *Bipolar Disorders*, 13, 59-66.
- Eley, T. C. & Stevenson, J. 2000 Specific life events and chronic experiences differentially associated with depression and anxiety in young twins. *Journal of abnormal child psychology*, 28(4), 383-394.
- Gilbert, P. 1992 *Depression: The Evolution of Powerlessness*. New York: Guilford Press.
- Gillham, J. E., Shatte, A. J., & Freres, D. R. 2000 Preventing depression: A review of cognitive-behavioral and family intervention. *Applied & Preventive Psychology*, 9, 63-88.
- Gonsalkorale, K., & Williams, K. D. 2006 The KKK won't let me play: Ostracism even by a despised outgroup hurts. *European Journal of Social Psychology*, 37, 1176-1186.
- Hammen, C. 1991 Generation of stress in the course of unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 555-561.
- Hammen, C. 2006 Stress generation in depression: Reflections on

- origins, research, and future directions. *Journal of Clinical Psychology*, 62, 1065-1082.
- Harb G. C., Heimberg R. G., Fresco D. M., Schneier F. R., Liebowitz M. R. (2002). The psychometric properties of the Interpersonal Sensitivity Measure in social anxiety disorder. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 961-979.
- Harrington, R., & Clark, A. 1998 Prevention and early intervention for depression in adolescence and early adult life. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 248, 32-45.
- 橋本剛 2003 対人ストレスの定義と種類：レビューと仮説生成的研究による再検討 人文論集, 54, 21-57.
- Hollon, S. D., DeRubeis, R. J., Shelton, R. C., Amsterdam, J. D., Salomon, R. M., O'Reardon, J. P., Lovett, M. L. Young, P. R., Haman, K. L., Freeman, B. B., & Gallop, R. 2005 Prevention of relapse following cognitive therapy vs. medications in moderate to severe depression. *Archives of General Psychiatry*, 62, 417-422.
- 堀口純子 1991 あいづち研究の現段階と課題 日本語学, 31-41.
- 石川信一・戸ヶ崎泰子・佐藤正二・佐藤容子 2006 児童青年に対する抑うつ予防プログラム—現状と課題— 教育心理学研究, 54, 572-584.
- Joiner, T., & Coyne, J. 1999 Interactional nature of depression.

Washington, DC: American Psychological Association.

川喜田二郎 1967 発想法：創造性開発のために 中公新書

Kawamoto, T., Onoda, K., Nakashima, K., Nittono, H., Yamaguchi, S., & Ura, M. 2012 Is dorsal anterior cingulate cortex activation in response to social exclusion due to expectancy violation? An fMRI study. *Frontiers in Evolutionary Neuroscience*, 4, 11.

Kemeny, M. E. 2009 Psychobiological responses to social threat: evolution of a psychological model in psychoneuroimmunology. *Brain Behav. Immun*, 23, 1-9.

Kendler, K. S., Hettema, J. M., Butera, F., Gardner, C. O., & Prescott, C. A. 2003 Life event dimensions of loss, humiliation, entrapment, and danger in the prediction of onsets of major depression and generalized anxiety. *Arch. Gen. Psychiatry*, 60, 789-796.□

Kessler, R. C., & Frank, R. G. 1997 The impact of psychiatric disorders on work loss days. *Psychological Medicine*, 27, 861-873.

木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 2012 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響－関係継続の予期と関係継続の意思の観点から－ 実験社会心理学研究, 51, 69-78.

木村昌紀・磯友輝子・桜木亜季子・大坊郁夫 2005 3者間会話場面に

- 視覚メディアが果たす役割－笑顔とうなずきの表出、およびそれらの行動マッチングに注目して－ 対人社会心理学研究, 5, 39-47.
- 木村昌紀・大坊郁夫・余語真夫 2010 社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの検討 社会心理学研究, 26, 13-24.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 2005 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検討 感情心理学研究, 12, 12-23.
- 小嶋雅代・古川壽亮 2003 日本版 BDI-□手引き. 日本文化科学社, pp.3.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2002 平成 12 年保健福祉動向調査(心身の健康)□
- Kovacs, M. & Beck, A. T. 1978 Maladaptive cognitive structures in depression. *American Journal of Psychiatry*, 135, 525-533.
- Leary, M. R. 2001 Toward a conceptualization of interpersonal rejection. In M. R. Leary (Ed.) *Interpersonal rejection*. New York: Oxford Press. pp.3-20.
- Leary, M. R. 2008 Functions off the self in interpersonal relationships: What does the self actually do? In J. V. Wood, A. Tesser, & J. G. Holmes (Ed.), *The self and social relationships*. New York: Psychology Press. pp. 95-115.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, S. L. 1995 Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-

530.

- Levy, S. R., Ayduk, O., & Downey, G. 2001 The role of rejection sensitivity in people's relationships with significant others and valued social groups. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection*. New York: Oxford Press. pp. 251-289.
- Lewinsohn, P. M., & Clarke, G. N. 1999 Psychosocial treatments for adolescent depression. *Clinical Psychology Review*, 19, 329-342.
- Luty, Joyce, Mulder, Sullivan, & McKenzie 2002 The interpersonal sensitivity measure in depression: association with temperament and character. *J Affect. Disord.* 70, 307-312.
- McCabe, R. E., Blankstein, K. R., & Mills, J. S. 1999 Interpersonal sensitivity and social problem-solving: Relations with academic and social self-esteem, depressive symptoms, academic performance. *Cognitive Therapy and Research*, 23, 587-604.
- Maner, J. K., DeWall, N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. 2007 Does social exclusion motive interpersonal reconnection?: Resolving the "porcupine problem". *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 42-55.
- Markus H. R., & Kitayama S. 1991 Culture and self: Implications for cognition, emotion, motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 宮崎弦太・池上知子 2011 社会的拒絶への対処行動を規定する関係要

- 因 —関係相手からの受容予期と関係へのコミットメント— 実験社会心理学, 50, 194-204.
- Monroe, S. M., Slavich, G. M., Torres, L. D., Gotlib, I. H. 2007
Severe life events predict specific patterns of change in cognitive biases in major depression. *Psychol. Med*, 37, 863-871.
- Munoz, R. F., Mrazek, P. J., & Haggerty, R. J. 1996 Institute of Medicine report on prevention of mental disorders : Summary and commentary. *American Psychologist*, 51, 1116-1122.
- 中島健一郎 2014 被排斥者への共感による心理的痛みの伝染についての実験的検討 発達研究, 28, 117-130.
- 中根允文・本田純久 2001 保健福祉動向調査において実施した CES-D 調査の解析研究 厚生労働省保健福祉動向調査において実施した CES-D 調査の解析研究報告書, 1-4.
- Parker G., Manicavasagar V., Crawford J., Tully L., & Gladstone G. 2006 Assessing personality traits associated with depression: the utility of a tiered model. *Psychological Medicine*, 36, 1131-1139.
- Pearson, K. A., Watkins, E. R., Mullan, E. G. 2011 Rejection sensitivity prospectively predicts increased rumination. *Behaviour Research and Therapy*, 49, 1-9.
- Pickett, C. L., & Gardner, W. L. 2005 The social monitoring system: Enhanced sensitivity to social cues as an adaptive response to social exclusion. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel

- (Ed.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. pp. 213-226.
- Roberts, C. M. 1999 The prevention of depression in children and adolescents. *Australian Psychologist*, 34, 49-57.
- Rudolph, K. D., Hammen, C., & Burge, D. 1994 Interpersonal functioning and depressive symptoms in childhood: Addressing the issues of specificity and co morbidity. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 25, 447-475.
- Rusbult, C. E., Verette, J., Whitney, G. A., Slovik, L. F., & Lipkus, I. 1991 Accommodation process in close relationships: Theory and preliminary empirical evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 53-78.
- 坂本真士 1998 自己注目と抑うつー 抑うつが発症・維持を説明する3段階モデルの提起ー 心理学評論, 41, 283-302.
- 坂本真士・西河正行 2002 大学生における抑うつ気分のコントロールに関する予防的取り組み: グループワークを利用した心理教育プログラムの開発 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, 3, 227-242.
- 坂野雄二・中村亨・岡島義・山内剛・高垣耕企・西郷達雄・中島公博 2010 入院うつ病患者を対象とした短気集団認知行動療法 (I) : 対人スキルの改善と適切な自己表現の獲得を狙ったプログラムの効果 北海道医療大学心理科学部研究紀要, 6, 11-22.

引用文献

- 佐藤寛・丹野義彦 2012 日本における心理士によるうつ病に対する認知行動療法の系統的レビュー 行動療法研究, 38, 157-167.
- Slavich, G. M., Thornton, T., Torres, L. D., Monroe, S. M., Gotlib, I. H., 2009. Targeted rejection predicts hastened onset of major depression. *J. Soc. Clin. Psycho.*, 28, 223-243.
- Somerville, L. H., Heatherton, T. F., & Kelley, W. M. (2006). Anterior cingulate cortex responds differentially to expectancy violation and social rejection. *Nature Neuroscience*, 9, 1007-1008.
- 巢山晴菜, 兼子唯, 伊藤理紗, 野口恭子, 貝谷久宣, 鈴木伸一 2015 拒絶に対する過敏性がうつ症状の継時的変化に及ぼす影響の検討 心身医学, 55, 1047-1054.
- 鈴木英一郎・小塩真司 (2002). 対人的傷つきやすさ尺度作成の試み: 信頼性・妥当性の検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 278.
- 高倉実・新屋信雄・平良一彦 1995 大学生の Quality of life と精神的健康について—生活満足度尺度の試作— 学校保健研究, 37, 414-422.
- 田上明日香・伊藤大輔・清水馨・大野真由子・白井麻理・嶋田洋徳・鈴木伸一 2012 うつ病休職者に対する心理職による集団認知行動療法の効果—うつ症状、社会機能、職場復帰の困難感の視点から— 行動療法研究, 38, 193-202.
- Todd A. L., Boyce P. M., Heath A. C., & Martin N. G. 1994 Shortened versions of the Interpersonal Sensitivity Measure, parental bonding instrument and intimate bond measure. *Person*

individ diff, **16**, 323-329.

苦米地憲昭 2006 大学生：学生相談から見た最近の事情 臨床心理学, **6**, 168-172.

van Beest, I., & Williams, K. D. 2006 When inclusion costs and ostracism pays, ostracism still hurts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 918-928.

Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. 2000 Cyberostracism: Effects of being ignored over the internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 748-762.

Williams, K. D., & Zadro, L. 2005 The indiscriminate early detection system. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Ed.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. pp.19-34.

謝辞

早稲田大学大学院博士後期課程の4年余りを経て、博士学位論文を執筆することができましたのは、これまで私を支えてくださった皆様の存在があったからに他なりません。この場を借りて、心からの感謝の気持ちを記します。

医療法人和楽会の貝谷久宣先生には、修士課程への進学が決定した2009年の秋からおよそ7年間にわたり、気分障害や不安障害に関するさまざまな知見や考え方を学ばせていただいたとともに、臨床の機会をいただきました。これらの大変貴重な経験が、拒絶過敏性の研究に携わるきっかけとなり、さらに臨床像と照らし合わせながら研究を進めることができました。心より感謝申し上げます。

早稲田大学人間科学学術院の野村忍先生、根建金男先生、熊野宏昭先生、嶋田洋徳先生、大月友先生には、お忙しい中研究についてご指導いただきましたこと、そして温かいお声掛けをくださいましたことに感謝申し上げます。特に、副査をお引き受けいただきました熊野先生、嶋田先生には、同じく拒絶過敏性をテーマとして執筆した修士論文の審査において副査としてご指導いただいてから、長い間大変お世話になりました。熊野先生には、修正の過程で本来の研究目的やこれまでの研究の経緯を踏まえ、何を大事にすべきかを立ち止まって考えるきっかけをいただきました。また、公開審査会について「この研究の面白さが伝わる発表を」と言ってくださったことは、私にとって大きな思考の転換となりました。嶋田先生には、この学位論文をひとつの研究として良いものにするべく、毎回とても親身にご指導いただきました。先生が最後まで粘り強くお付き合いくださったおかげで、納得できる構成を練り上げること

ができました。また、実験研究の準備や手順は、大月先生から学びました。先生方、本当にありがとうございました。

桜美林大学の小関俊祐先生には、研究にコメントをくださったり、先生が愛知教育大学にいらっしゃる頃には真実さんと共に質問紙調査の実施にご協力いただきました。また、お会いする度に温かい言葉をかけてくださり、長い間、さまざまな形で応援してくださいました。本当にありがとうございました。

専修大学の国里愛彦先生には、研究に向かう姿勢に大きな刺激をいただきました。また、先生が鈴木伸一研究室の助手をされていた頃から、興味深い論文をご紹介くださったり、分析手法や実験課題の作成について相談に乗ってくださったことで、多くのことを学ばせていただきました。心から感謝しております。

早稲田大学人間科学学術院の岡島義先生には、審査会での発表に向けてさまざまな機会に数度にわたりとても親身なアドバイスをくださいました。また、質問紙調査実施にも快くご協力くださり、博士論文の執筆のためにご支援をくださいました。本当にありがとうございました。

ともに博士後期課程を過ごした同期の佐藤友哉さん、松野航大さん、金山裕介さんには、研究・臨床に向かう姿勢や知識についてたくさん刺激をいただきました。そして何より、皆さんが同期でとても楽しかったです。

鈴木伸一研究室の博士後期課程の先輩である伊藤大輔さん、田上明日香さん、武井優子さんは、研究・臨床だけでなく、リーダーのあり方としても素晴らしいモデルであり、私の目標でした。在学中だけでなく就職されてからも、励ましの言葉や様々なアドバイスをいただきました。特に伊藤さんには、学部の時からお世話になり、研究や臨床につい

てご指導いただいたことに加え、進路についてもたくさん相談に乗ってくださいました。先輩方に続くことができ、とてもうれしく思っています。

同じく研究室の博士後期課程で共に過ごした佐々木美保さん、兼子唯さん、小川祐子さん、伊藤理紗さんとは、日々のあらゆる体験を共有し、互いの進捗を励まし合い、時には道具的サポートやそれ以上の情緒的サポートに何度も救われました。特に兼子さんとは、博士後期課程の同期として、楽しい日々はもちろんのこと、院生生活のうち最も辛い時期を共に乗り越えたことは、いまの私の糧になっています。

そして、修士課程を含む6年間、苦楽を共にしてきた鈴木研究室の皆様へ、心から御礼を申し上げます。私がこれまで研究を進めてこられたことや、無事に学位審査を終えられたこと、そして学びの多い充実した日々を過ごすことができたのは、皆様が様々な場面で助けてくださったおかげです。これまで本当にありがとうございました。

また、赤坂クリニックでの臨床活動・研究活動をサポートして下さった吉田栄治院長、みどりさん、心理士の小松智賀先生、野口恭子先生、高井絵里さん、そして事務の皆様へ、心から御礼申し上げます。6年間にわたる赤坂クリニックでの数々の経験は、私の研究・臨床の原点となりました。

そして、佳境となった最後の4カ月を無事終えることができたのは、働きながら博士論文をまとめることを心から応援して下さった、株式会社ビジネスリサーチラボの皆様のおかげです。なかでも、日々を共に過ごす伊達洋駆さん、稲田聡美さんには、多大なる思いやりとお気遣いをいただきました。心から感謝しております。

指導教員である鈴木伸一先生には、学部のゼミから修士課程、博士後期課程を経て今回の学位審査合格まで、8年余りにわたり、ご指導いただきました。研究や臨床だけでなく、組織の一員としてのあり方や振る舞いに至るまで、数えきれないほど多くのことを先生から学ばせていただきました。私を学部のゼミ、修士課程、博士後期課程で鈴木研に受け入れてくださったこと、そして博士論文の研究が停滞した時も最後まで見捨てず諦めず見守ってくださったこと、時には厳しく、それ以上に温かくここまで導いてくださったこと、深く感謝しています。

たまに会えた時だけでなく、離れている時もいつも応援してくれる友人たちがいてくれたおかげで、いつも心強く、大きな励みになりました。本当にありがとうございます。

そして、なかなか先が見えないなかで、途方もなく長い期間、私を信じ見守り続けてくれた大事な家族に感謝します。私の希望を自分のことのように願ってくれる人がいることが、大きな支えになりました。

最後に、本研究の調査および実験にご協力いただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

これまでの道のりを振り返り、思い返すほどに、この学位は周りの皆様のご支援によっていただけたものと実感いたします。本当にありがとうございました。

2016年7月

巢山 晴菜

付録

付録目次

■ 研究 1

- 質問紙
 - ◇ フェイスシート
 - ◇ 拒絶過敏性尺度
 - ◇ 对人的傷つきやすさ尺度 (鈴木・小塩, 2002)

■ 研究 2

- 質問紙
 - ◇ フェイスシート
 - ◇ 拒絶過敏性尺度
 - ◇ Beck Depression Inventory-II (BDI-II ; 小嶋・古川, 2003)
 - ◇ Rumination-Reflection Questionnaire (RRQ ; 高野, 2008)
 - ◇ 対人ストレスイベント尺度 (橋本, 1997)

■ 研究 3

- 被験者募集チラシ
- 実験スクリプト
- 研究参加者の方への説明文書
- 同意撤回書
- 同意書
- 健康アンケート
- 質問紙冊子
 - ◇ 拒絶過敏性尺度
 - ◇ 日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS ; 川人・大塚・甲斐田・中田, 2011)
 - ◇ 拒絶知覚
 - ◇ 拒絶予期
 - ◇ 社会的痛み (Kawamoto et al., 2012; Williams et al., 2000)
 - ◇ NEO-Five Factor Inventory (NEO-FFI ; 下仲・中里・権藤・高山, 1999)
- リラクゼーション説明

■ 研究 4

- 被験者募集チラシ

- 実験スクリプト
- 研究参加者の方への説明文書
- 同意撤回書
- 同意書
- 健康アンケート
- 実験時質問紙冊子
 - ◇ 日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS ; 川人・大塚・甲斐田・中田, 2011)
 - ◇ Beck Depression Inventory (BDI-II ; 小嶋・古川, 2003)
 - ◇ 拒絶過敏性尺度
 - ◇ 拒絶予期
 - ◇ 対人ストレス
 - ◇ 拒絶阻止の行動 (自由記述)
- 3 カ月後質問紙
 - ◇ Beck Depression Inventory (BDI-II ; 小嶋・古川, 2003)
- リラクセーション説明

研究 1

調査へのご協力をお願い

この度は、アンケート調査にご協力いただきまして、ありがとうございます。

この調査は、みなさまの普段の気持ちや考えについてお聞きする質問から構成されております。

- 回答には、合っている・間違っているというものはありませんので、他の人と相談したり、まねをしたりせずに答えてください。
- この調査への回答は、みなさまの自由意志によるものです。決して強制的なものではありませんが、ご回答いただけましたら幸いです。
- この調査の回答内容はすべて研究用の統計的データの作成に用いられますので、あなた個人の情報や回答内容が特定されたり、公表されたりすることは一切ありません。
- 回答の内容は授業の評価等には一切関係ありませんのでご安心ください。
- 回答済みの調査用紙は、研究実施者へお渡しいただくか、お手数ですが、101号館3階に設置しております回収ロッカー13番へ投入をお願い致します。

以上のことをご理解の上、ご回答いただける場合は、最後まで記入漏れやミスのないよう、どうぞよろしく願いいたします。

研究実施者

早稲田大学大学院人間科学研究科
修士課程2年

巢山 晴菜

連絡先：haru_s@akane.waseda.jp

研究実施責任者

早稲田大学人間科学学術院
鈴木 伸一

研究の倫理や苦情等に関する

問い合わせ先 (研究推進部)

03-3202-2568

rinri@list.waseda.jp

○まず、以下の質問にお答えください。

年齢：() 歳

性別： 男 ・ 女 (当てはまる方に○印をつけてください)

○以下の項目に1つ以上該当しますか？

1. 現在、精神科や内科の疾患により定期的に複数回通院をしている
2. 現在、心理カウンセリングを受けている
3. 現在、医師による処方薬（睡眠薬・精神安定薬など）を服用している
4. これまでに、継続的に複数回、精神科・心療内科などの医療機関を受診したことがある

はい ・ いいえ

※「はい」に○印をつけられた方は、以降の質問にお答えいただかなくても結構です。

この研究のフィードバックをご希望の方は、
以下の欄にお名前とご連絡先のご記入をお願い致します。
(全体の結果のみのフィードバックとさせていただきます。)

○氏名： _____

○希望の連絡先

PC e-mail： _____

携帯 e-mail： _____

次のページから質問が始まります。

以下の文章が自分のどの程度当てはまるか、○印をつけてください。

	全然 あては まらな い	やや あては まらな い	やや あては まる	と ても あては まる
1 他の人から自分がどう思われているか、心配である	1	2	3	4
2 みんなが自分のことをどう感じているか気になる	1	2	3	4
3 他の人にどう思われているかによって、自分の価値が決まると思う	1	2	3	4
4 自分のしたことをもし誰かに批判されたら、いやな気分になる	1	2	3	4
5 自分の言動や行動が批判されるのではないかと心配である	1	2	3	4
6 誰かに怒られると、心が傷つく	1	2	3	4
7 誰かに無視されたときは、いつでもそれに気がつく	1	2	3	4
8 良いことをしたと他の人に言われた時のみ、そう信じられる	1	2	3	4
9 親密な他者を失ってしまうのではないかと心配である	1	2	3	4
10 もし誰かが私を動揺させたら、それを気にせずにはいられない	1	2	3	4
11 知り合いから賞賛されなければ、心から幸せを感じることはない	1	2	3	4
12 本当の私がどんな人物か知ったら、他の人は私を見下すだろう	1	2	3	4
13 もし他の人が本当の私を知ったら、私のことを嫌いになるだろう	1	2	3	4
14 本当の自分を他の人に知ってほしくない	1	2	3	4
15 私はだいたいにおいて人に好かれると思う	1	2	3	4
16 私は他の人を幸せな気持ちにすることができる	1	2	3	4
17 人に別れを告げる時、不安になる	1	2	3	4
18 批判されるのではないかと常に恐れている	1	2	3	4
19 初対面の人と会うことは、落ちつかない	1	2	3	4
20 誰かからお世辞を言われるとうれしい	1	2	3	4
21 親密な関係の人といるときは、安心する	1	2	3	4
22 他の人に対して怒ることは難しいことである	1	2	3	4
23 他の方の心を傷つけてしまっていないかと心配である	1	2	3	4
24 他の方を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほうがまだ	1	2	3	4
25 私は誰に対しても礼儀正しい	1	2	3	4

	全然あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる
26 相手を傷つけてしまうことが心配なため、人に怒ることはしない	1	2	3	4
27 他の人を批判してしまっていないか心配である	1	2	3	4
28 友人とけんかをした後は、仲直りするまで落ちつかない	1	2	3	4
29 他の人がどう感じているかを常に気にしている	1	2	3	4
30 人に別れを告げるときは落ちつかない	1	2	3	4
31 自分が他の人にどのような影響を与えているかが心配である	1	2	3	4
32 拒絶されることが恐いため、自分の意見を言わないようにしている	1	2	3	4
33 自分の親しい相手をよこばせるためなら、私は自分のやり方も変えるだろう	1	2	3	4
34 自分の考えが他の人を圧倒してしまっているのではないかと恐れている	1	2	3	4
35 他の人が私を気に入っているかどうか、いつもよくわからない	1	2	3	4
36 他の人は私の事を分かっていないと思う	1	2	3	4
37 人から言われることに傷つくことが多い	1	2	3	4
38 自分についてどんなことを言われても気にしない	1	2	3	4
39 自分のことを悪く言われると、ひどく落ち込んでしまう	1	2	3	4
40 自分の考えを否定されると心が傷つく	1	2	3	4
41 他の人が自分のすることに批判的だと、落ちつかない	1	2	3	4
42 自分の意見が他の人に受け入れられないと、すぐに落ち込んでしまう	1	2	3	4
43 自分の間違いを指摘されると自信をなくしてしまう	1	2	3	4
44 自分の考えが否定されても落ち込むことはない	1	2	3	4
45 何か提案する時、それが受け入れられないと悲しい気分になる	1	2	3	4
46 自分の意見を批判されても平気である	1	2	3	4

研究 2

調査へのご協力をお願い

この度は、アンケート調査にご協力いただきまして、ありがとうございます。

この調査は、みなさまの普段の気持ちや考えについてお聞きする質問から構成されております。

- 回答には、合っている・間違っているというものはありませんので、他の人と相談したり、まねをしたりせずに答えてください。
- この調査への回答は、みなさまの自由意志によるものです。決して強制的なものではありませんが、ご回答いただけましたら幸いです。また、答えたくない質問は飛ばしていただいて構いません。
- この調査の回答内容はすべて研究用の統計的データの作成に用いられますので、あなた個人の情報や回答内容が特定されたり、公表されたりすることは一切ありません。
- 回答の内容は授業の評価等には一切関係ありませんのでご安心ください。
- 回答済みの調査用紙は、研究実施者へお渡しいただくか、お手数ですが、101号館3階に設置しております回収ロッカー13番へ投入をお願い致します。

以上のことをご理解の上、ご回答いただける場合は、最後まで記入漏れやミスのないよう、どうぞよろしくお願ひいたします。

研究実施者

早稲田大学大学院人間科学研究科
博士後期課程 4年

巢山 晴菜

連絡先：haru_s@akane.waseda.jp

研究実施責任者

早稲田大学人間科学学術院
鈴木 伸一

研究の倫理や苦情等に関する

問い合わせ先 (研究推進部)

03-3202-2568

rinri@list.waseda.jp

○まず、以下の質問にお答えください。

年齢： _____ 歳

性別： 男 ・ 女

○以下の項目に1つ以上該当しますか？

1. 現在、精神科や内科の疾患により定期的に複数回通院をしている
2. 現在、心理カウンセリングを受けている
3. 現在、医師による処方薬（睡眠薬・精神安定薬など）を服用している
4. これまでに、継続的に複数回、精神科・心療内科などの医療機関を受診したことがある

はい ・ いいえ

※「はい」に○印をつけられた方は、以降の質問にお答えいただくなくても結構です。

この研究のフィードバックをご希望の方は、
以下の欄にお名前とご連絡先のご記入をお願い致します。
(全体の結果のみのフィードバックとさせていただきます。)

○氏名： _____

○希望の連絡先

PC e-mail： _____

携帯 e-mail： _____

次のページから質問が始まります。

以下の文章が自分にどの程度当てはまるか、○印をつけてください。

	あ て は ま ら な い	全 然 は ま ら な い	あ や て は ま ら な い	や や あ て は ま る	あ と て は ま る
1 誰かに怒られると、心が傷つく	1		2	3	4
2 自分のしたことをもし誰かに批判されたら、いやな気分になる	1		2	3	4
3 もし誰かが私を動揺させたら、それを気にせずにはいられない	1		2	3	4
4 友人とけんかをした後は、仲直りするまで落ち着かない	1		2	3	4
5 誰かに無視されたときは、いつでもそれに気がつく	1		2	3	4
6 親密な他者を失ってしまうのではないかと心配である	1		2	3	4
7 他の人に対して怒ることは難しいことだと思う	1		2	3	4
8 相手を傷つけてしまうことが心配なため、人に怒ることはしない	1		2	3	4
9 他の人の心を傷つけてしまっていないか心配である	1		2	3	4
10 他の人を批判してしまっていないか心配である	1		2	3	4
11 他の人を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほうがまだ	1		2	3	4
12 私は誰に対しても礼儀正しい	1		2	3	4
13 他の人から自分がどう思われているか、心配である	1		2	3	4
14 みなが自分のことをどう感じているか気になる	1		2	3	4
15 他の人がどう感じているかを常に気にしている	1		2	3	4
16 自分の言動や行動が批判されるのではないかと心配である	1		2	3	4
17 もし他の人が本当の私を知ったら、私のことを嫌いになるだろう	1		2	3	4
18 本当の私がどんな人物か知ったら、他の人は私を見下すだろう	1		2	3	4
19 本当の自分を他の人に知ってほしくない	1		2	3	4
20 他の人は私のことを分かっていないと思う	1		2	3	4
21 拒絶されることが怖いので、自分の意見を言わないようにしている	1		2	3	4
22 批判されるのではないかと常に恐れている	1		2	3	4
23 良いことをしたと他の人に言われた時のみ、そう信じられる	1		2	3	4
24 知り合いから賞賛されなければ、心から幸せを感じることはない	1		2	3	4
25 他の人から気に入られていると確信できたことはない	1		2	3	4
26 自分の親しい相手をよるこぼせるためなら、私は自分のやり方も変えるだろう	1		2	3	4
27 他の人にどう思われているかによって、自分の価値が決まると思う	1		2	3	4

この質問票には21の項目があります。
それぞれの項目に含まれる文章をひとつひとつ注意深く読み、
それぞれの項目で、今日を含むこの2週間のあなたの気持ちに最も近い文章をひとつ選び、
選んだ文章の番号を○で囲んでください。

もし、ひとつの項目で同じように当てはまる文章がいくつかある場合は、
番号の大きい方を○で囲んでください。

No.16(睡眠習慣の変化)やNo.18(食欲の変化)を含め、
それぞれの項目で必ずひとつだけ選んでください。

1. 悲しさ

- 0 私は気が滅入っていない
- 1 しばしば気が滅入る
- 2 いつも気が滅入っている
- 3 とても気が滅入ってつらくて耐えがたい

2. 悲観

- 0 将来について悲観していない
- 1 以前よりも将来について悲観的に感じる
- 2 物事が自分にとってうまくいくとは思えない
- 3 将来は絶望的で悪くなるばかりだと思う

3. 過去の失敗

- 0 自分を落伍者だとは思わない
- 1 普通の人より失敗が多かったと思う
- 2 人生を振り返ると失敗ばかりを思い出す
- 3 自分は人間として完全な落伍者だと思う

4. 喜びの喪失

- 0 自分が楽しいことには以前と同じくらい喜びを感じる
- 1 以前ほど物事を楽しめない
- 2 以前は楽しめたことにもほとんど喜びを感じなくなった
- 3 以前は楽しめたことにも全く喜びを感じなくなった

5. 罪責感

- 0 特に罪の意識はない
- 1 自分のしたことやすべきだったことの多くに罪悪感を感じる
- 2 ほとんどいつも罪悪感を感じている
- 3 絶えず罪悪感を感じている

6. 被罰感

- 0 自分が罰を受けているようには感じない
- 1 自分は罰を受けるかもしれないと思う
- 2 自分は罰を受けるだろう
- 3 自分は今罰されていると感じる

7. 自己嫌悪

- 0 自分自身に対する意識は以前と変わらない
- 1 自分自身に対して自信を失くした
- 2 自分自身に失望している
- 3 自分自身が嫌でたまらない

8. 自己批判

- 0 以前よりも自分自身に批判的ということはない
- 1 以前よりも自分自身に批判的だ
- 2 あらゆる自分の欠点が気になり自分を責めている
- 3 何か悪いことが起こると、全て自分のせいだと思う

9. 自殺念慮

- 0 自殺したいと思うことは全くない
- 1 自殺したいと思うことはあるが、本当にしようとは思わない
- 2 自殺したいと思う
- 3 機会があれば自殺するだろう

10. 落涙

- 0 以前より涙もろいということはない
- 1 以前より涙もろい
- 2 どんな些細なことにも涙が出る
- 3 泣きたいと感じるのに涙が出ない

11. 激越

- 0 普段以上に落ち着きがなかったり緊張しやすくない
- 1 普段より落ち着きがなかったり緊張しやすい
- 2 気持ちが落ち着かずじっとしているのが難しい
- 3 気持ちが落ち着かず絶えず動いたり何かしてないと気が済まない

12. 興味喪失

- 0 他の人や活動に対する関心を失ってはいない
- 1 以前より他の人や物事に対する関心が減った
- 2 他の人や物事に対する関心がほとんどなくなった
- 3 何事にも興味をもつことが難しい

13. 決断力低下

- 0 以前と同じように物事を決断できる
- 1 以前より決断するのが難しくなった
- 2 以前より決断するのがずっと難しくなった
- 3 どんなことを決めるのにもひどく苦勞する

14. 無価値感

- 0 自分に価値がないとは思わない
- 1 以前ほど自分に価値があり人の役に立てる人間だと思えない
- 2 他の人に比べて自分は価値がないと思う
- 3 自分はまったく価値がないと思う

15. 活力喪失

- 0 以前と同じように活力がある
- 1 以前と比べて活力が減った
- 2 活力が足りなくて十分働けない
- 3 活力がなく何もできない

16. 睡眠習慣

- 0 睡眠習慣に変わりはない

- 1a 以前より少し睡眠時間が長い
- 1b 以前より少し睡眠時間が短い

- 2a 以前よりかなり睡眠時間が長い
- 2b 以前よりかなり睡眠時間が短い

- 3a ほとんど一日中寝ている
- 3b 以前より1～2時間早く目がさめて、再び眠れない

17. 易刺激性

- 0 普段よりイライラしやすいわけではない
- 1 普段よりイライラしやすい
- 2 普段よりかなりイライラしやすい
- 3 いつもイライラしやすい

18. 食欲の変化

- 0 食欲は依然と変わらない

- 1a 以前より食欲が落ちた
- 1b 以前より食欲が増えた

- 2a 以前よりかなり食欲が落ちた
- 2b 以前よりかなり食欲が増えた

- 3a まったく食欲がなくなった
- 3b いつも何か食べたくてたまらない

19. 集中困難

- 0 以前と同じように集中できる
- 1 以前ほどは集中できない
- 2 何事にも長い間集中することは難しい
- 3 何事にも集中できない

20. 疲労感

- 0 以前と比べて疲れやすいわけではない
- 1 以前より疲れやすい
- 2 以前ならできた多くのことが疲れてしまっ
てできない
- 3 以前ならできたほとんどのことが疲れてしま
ってできない

21. 性欲減退

- 0 性欲は以前と変わらない
- 1 以前ほど性欲がない
- 2 最近めっきり性欲が減退した
- 3 まったく性欲がなくなった

以下の文章が自分にどの程度当てはまるか、○印をつけてください。

		全然 あては まらない	やや あては まらない	やや あては まる	と ても あて は まる
1	本当に長い間、自分に起こったことを繰り返し考えたり、つくづくと考えたりしがちだ	1	2	3	4
2	最近自分が言ったことやしたことについて、頭の中でいつも思い返しているように思う	1	2	3	4
3	私は、恥ずかしい、あるいはがっかりした瞬間を思い出すのに、非常に多くの時間を費やしている	1	2	3	4
4	時々、自分自身につちえ考えるのをなかなかやめることができない	1	2	3	4
5	過去にあった場面で、自分がどう振る舞ったかを頭の中でよく思い返している	1	2	3	4
6	自分がしたことについて、自らもう一度評価をしていることに気がつくことがよくある	1	2	3	4
7	口論や意見の不一致があると、その後長い間私は起こったことを考えつづける	1	2	3	4
8	もはや関心を持つべきではない人生の出来事について熟考することがよくある	1	2	3	4
9	終わったことやしてしまったことを思い返すために時間を使うことはない	1	2	3	4
10	自分のある側面について考えるのをやめたいと思っても、そこに注意が向くことが多い	1	2	3	4
11	不愉快な考えを頭の中から外へ出すことはたやすい	1	2	3	4
12	あまり長い間、自分自身のことを繰り返し考えたり、じっくり考えたりすることは決してない	1	2	3	4
13	ものごとの本質や意味について深く考えることがとても好きだ	1	2	3	4
14	自分自身についてじっくり考えることは、楽しいとは思わない	1	2	3	4
15	もともと自己をととも探求したいと思っている	1	2	3	4
16	自分の人生を哲学的に見ることがとても好きだとしばしば思う	1	2	3	4
17	自己分析はあまり好きではない	1	2	3	4
18	なぜそうするのかを分析するのがとても好きだ	1	2	3	4
19	「内的な」自己を探るのがとても好きだ	1	2	3	4
20	物事に対する自分の態度や気持ちに、強い興味がある	1	2	3	4
21	哲学的、抽象的な考えは、それほど私の興味を引くものではない	1	2	3	4
22	内省的、自省的な考え方は本当に好きではない	1	2	3	4
23	私はそれほど物事を深く考えるタイプの人ではない	1	2	3	4
24	私は、「深い」、内省的なタイプの人だとよく人に言われる	1	2	3	4

以下に対人関係におけるストレスとなる出来事を30項目挙げました。
 最近3ヶ月間に、①これらの出来事がどのくらいの頻度で起きたか、
 ②その時どの程度ストレスを感じたか、
 それぞれあてはまる数字に○をつけてください。

				①頻度				②ストレス			
				全くなかった			しばしばあった	全く感じなかった			非常に強く感じた
1	知人に無理な要求をされた			1	2	3	4	1	2	3	4
2	知人とけんかした			1	2	3	4	1	2	3	4
3	知人から責められた			1	2	3	4	1	2	3	4
4	知人に軽蔑された			1	2	3	4	1	2	3	4
5	知人が無責任な行動をした			1	2	3	4	1	2	3	4
6	知人に誤解された			1	2	3	4	1	2	3	4
7	知人に嫌な顔をされた			1	2	3	4	1	2	3	4
8	同じ事を何度も言われた			1	2	3	4	1	2	3	4
9	知人と意見が食い違った			1	2	3	4	1	2	3	4
10	知人のストレス発散に付き合わされた			1	2	3	4	1	2	3	4
11	約束を破られた			1	2	3	4	1	2	3	4
12	誰が悪いというわけでもないとき、自分から謝った			1	2	3	4	1	2	3	4
13	知人が自分のことをどう思っているのか気になった			1	2	3	4	1	2	3	4
14	相手が嫌な思いをしていないか気になった			1	2	3	4	1	2	3	4
15	周りの人から疎外されていると感じるようなことがあった			1	2	3	4	1	2	3	4
16	会話中に気まずい沈黙があった			1	2	3	4	1	2	3	4
17	知人とどのようにつきあえばいいのか分からなくなった			1	2	3	4	1	2	3	4
18	親しくなりたい相手となかなか親しくなれなかった			1	2	3	4	1	2	3	4
19	会話中、何をしゃべったらいいのか分からなくなった			1	2	3	4	1	2	3	4
20	知人に対して劣等感を抱いた			1	2	3	4	1	2	3	4

					①頻度				②ストレス			
					全くなかった			しばしばあった	全く感じなかった			非常に強く感じた
21	自分の言いたいことが、相手にうまく伝わらなかった				1	2	3	4	1	2	3	4
22	知人に嫌な思いをさせた				1	2	3	4	1	2	3	4
23	上下関係に気がついた				1	2	3	4	1	2	3	4
24	テンポの合わない人と会話した				1	2	3	4	1	2	3	4
25	嫌いな人と会話した				1	2	3	4	1	2	3	4
26	あまり親しくない人と会話した				1	2	3	4	1	2	3	4
27	自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされた				1	2	3	4	1	2	3	4
28	無理に相手に合わせた会話をした				1	2	3	4	1	2	3	4
29	好意的な知人の誘いを断った				1	2	3	4	1	2	3	4
30	知人に深入りされないように気がついた				1	2	3	4	1	2	3	4

研究 3

実験ご協力のお願ひ

[対人相互作用場面における認知と気分および生理反応の関連の検討]

早稲田大学人間科学学術院 教授 鈴木 伸一
早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程 3年 巢山 晴菜

人間科学学術院 鈴木伸一研究室では、心理学実験に参加して下さる方を募集しています。
この実験は、コミュニケーション場面における相手に対する印象と、身体の状態の関連をみる実験です。

【対象】 健康な大学生・大学院生

【方法】 PCを使ったゲームとアンケート冊子へのご記入（所要時間は 60 分程度の予定です）

【場所】 早稲田大学 101 号館内の教室

【謝礼】 1500 円（銀行振込み）

この研究にご興味を持っていただいた方は、

①この用紙にご記入の上提出 または ②QR コードから氏名をメール送信 をお願い致します

- 実験への参加を強要することはありません。
- 実験についてのご説明をさせていただき、内容について十分にご理解いただいた上で、ご協力いただけるかどうかを決めていただけます。
- 個人情報は責任を持って管理し、実験のご連絡以外では一切使用しません。
- こちらの用紙への記入の有無、記入内容は授業の評価等には一切関係ありません。

1. 実験への参加を [希望してもよい ・ 説明を聞いて検討する ・ 希望しない]

2. 氏名 _____

3. 希望の連絡先

PC E-mail _____

携帯 E-mail _____

※いずれか 1 つで構いません。確実に連絡のつくものをご記入下さい。



研究参加者の方への説明文書

この研究について

1. 研究計画名:対人相互作用場面における認知が気分および生理反応に与える影響の検討.....

2. 研究の背景と目的

日常生活の中で私たちは様々な出来事を経験しますが、なかでも人間関係に関する出来事は気分の変化を招きやすいことがいわれています。また、気分の変化は、その人の行動や身体の状態にも影響を与えることがわかっています。人間関係に関する出来事といっても、気分や身体などの変化には、客観的な事実ではなく、本人がどのように捉えているかが重要であることが示唆されています。

しかしながら、ある対人関係場面の捉え方が、気分や身体の状態にどのような影響を与えるかについてはいまのところ十分にわかっていません。そこで本研究では、他者とゲームをしている時の認知と、気分や身体の状態の関連について検討することを目的としています。

3. 研究の方法

この研究は、健康な大学生、大学院生の男女約 60 名を対象として実験を行う予定です。

実験は、PC を通して 3 名で行なうキャッチボールと、それぞれのゲームの前後でのアンケートへの回答から構成されています。具体的には、まず実験当日に実験室にお越しいただき、性格を知るためのアンケートに回答していただきます。続いて、ゲームの相手となる他の 2 名の参加者の方のアンケートの結果をお伝えします。また、あなたのアンケートの結果を、2 名の相手にお伝えします。その後、あなたを含めた 3 名の参加者のみなさんには、PC 上でのキャッチボールをしていただきます。キャッチボールは 2 種類あり、それぞれ 5 つのブロックにわかれています。それぞれのブロックの前後にアンケートに回答していただきます。

この研究では、複数のアンケートや、課題中の生理データなどが収集されます。研究で得られたデータはすべて匿名化され、統計的な処理が行われますので、個人が特定されることは決してありません。また、データを研究以外の目的で使用することはありません。

所要時間は 60 分程度を予定しています。なお、身体の状態として心拍数や精神性発汗といった生理データを取る関係上、実験の 1 時間前から激しい運動や食事、喫煙、カフェインやアルコールの摂取をお控えいただきます。実験にご協力いただいた方には、1500 円を後日銀行振り込みいたします。

4. 研究の場所と期間

この研究は、早稲田大学所沢キャンパスの 101 号館において、研究の実施が承認された日から 2016 年 3 月 31 日まで実施される予定です。ただし、参加者の方に研究に参加していただくのは 1 日（60 分間）です。

5. 研究を実施する者

研究実施代表者： 巢山 晴菜（早稲田大学大学院人間科学研究科、博士後期課程 4 年）

研究責任者： 鈴木 伸一（早稲田大学大学院人間科学学術院、教授、研究実施代表者の指導教員）

その他の研究従事者： 兼子 唯（早稲田大学大学院人間科学研究科、博士後期課程 4 年）

伊藤 理紗（早稲田大学大学院人間科学研究科、博士後期課程 2 年）

佐藤 秀樹（早稲田大学大学院人間科学研究科、博士後期課程 1 年）

6. 研究に関する資料の開示について

あなたのご希望があれば、他の参加者の個人情報保護や研究の独創性の確保に支障がない範囲で、この研究の研究計画および研究方法についての資料を開示いたします。また、この研究に関するご質問がありましたらいつでも担当者にお尋ね下さい。

7. 研究への参加が任意であること

この研究への参加は任意です。あなたの自由な意思が尊重されます。研究に参加しないことによって、不利益な対応を受けることはありません。また、研究への参加の有無が学業成績や単位取得に影響を与えることはありません。

いったん参加に同意した場合でも、2016年3月まで不利益を受けることなく同意を撤回することができます。この説明書の最終ページに添付してある「同意撤回書」に署名して下記までお申し出下さい。

その場合、提供していただいたデータは廃棄され、それ以降はそれらの情報が研究のために用いられることもありません。ただし、同意を撤回したときすでに研究成果が論文などで公表されていた場合やデータが完全に匿名化されて特定できない場合等、廃棄できないこともあります。

同意を撤回する場合の連絡先

氏名： 巢山 晴菜
所属： 早稲田大学大学院人間科学研究科
資格： 博士後期課程3年、臨床心理士
電話： 04-2949-8113（内線：8320）
E-mail： haru_s@akane.waseda.jp

8. この研究への参加をお願いする理由

他の人と関わりを持ったり、その中で気分の変化を体験することは、日常生活の中で誰もが経験していることです。そのため、本研究は、健康な成人大学生、大学院生を対象として行われています。本研究に興味をお持ちの方や、実験にご協力いただける方を対象に、実験参加のお願いをしております。参加希望者に対して、個別に研究目的を十分に説明させていただきます。その後、実験参加の同意が得られた方のみを対象に、実験を実施させていただきます。また、実験開始前に健康アンケートを実施し、実験に参加できる健康状態であると確認できた方のみを対象とします。

なお、この実験では生理データを測定するため、実験の1時間前から激しい運動や食事、喫煙、カフェインやアルコールの摂取をお控えいただくことをお願いいたします。

9. この研究への参加を中断する場合

実験前の健康アンケートにて、実験に参加できない状態であると判断された場合、当日の実験を中断させていただくことがあります。また、本研究への参加の中止を希望する場合は、2016年3月までであればいかなる時点でもすぐに中止し、データを破棄させていただきます。

10. この研究への参加に伴う危害の可能性について

この実験は心身に危害を与えるものではありません。そのため、この実験への協力に伴い健康被害等が生じる可能性はありませんが、他の参加者とのゲームの中で、不快感を含めた様々な気分が生じる場合があります。

実験への参加および、アンケート冊子への回答は自由意思に基づくものであり、強制ではありません。答えたくない質問にはお答えいただかなくても構いません。万一、実験途中で気分が悪くなるがありましたら、すぐに実験を中止しますのでお知らせください。しばらく安静にしても気分が回復しない場合は、ご承諾をいただいた場

合に、初期対処として、臨床心理士である研究実施代表者が、情動を緩和させるためにリラクゼーションを実施します。それでも回復しなかった場合には、早稲田大学所沢キャンパスの保健センター所沢分室を紹介し、適切な対処を依頼します。

11. 研究により期待される便益

この研究に参加することによって、あなたに直接的な便益はありませんが、研究成果によって人間関係における認知や捉え方が気分や生理反応に与える影響について明らかになることで、対人関係に関する研究の発展に大きく寄与すると考えられます。

12. 個人情報の取り扱い

あなたのデータや個人情報は、この研究を遂行し、その後検証するために必要な範囲においてのみ利用いたします。この研究のために研究従事者以外の者または機関にデータを提供する必要が生じた場合は改めて承諾をお願いいたします。あなたの個人情報やデータが記された資料は、鍵をかけて厳重に保管します。また、あなたのデータをコンピュータに入力する場合は、情報漏れのないよう対策を十分に施したコンピュータを使用して、外部記憶媒体に記録させ、その外部記憶媒体は鍵をかけて厳重に保管し、紛失、盗難などのないよう管理します。このように、あなたの個人情報の取り扱いには十分配慮し、外部に漏れないよう厳重に管理を行います。

また、ご提出いただいた同意書は研究責任者である鈴木伸二が責任をもって保管し、研究終了後にシュレッダーにかけるなどして廃棄します。質問紙等の調査用紙は、電子データへの記録が完了した後に、溶解処分します。電子データは、研究終了後、2021年3月まで保管した後に、記録されている外部記録媒体（外付けハードディスクやフラッシュメモリーなど）の物理的破壊によって、完全に破棄します。

13. 研究終了後の対応と研究成果の公表

この研究の終了後、あなたのデータは、個人情報が外部に漏れないようにしたうえで廃棄します。また、この研究で得られた成果を専門の学会や学術雑誌などに発表する可能性があります。発表する場合はプライバシーに慎重に配慮しますので、個人を特定できる情報が公表されることはありません。

14. 研究のための費用

この研究にかかる費用は文部科学省科学研究費補助金、および鈴木伸一研究室の実験実習費から支出されます。

15. 研究に伴う参加者の方への謝金等

この研究への参加に際して、謝金（1500円）を支払います。

16. 知的財産権の帰属

この研究の成果により特許権等の知的財産権が生じる可能性があります。その権利は、この研究の責任機関である早稲田大学に属し、参加者の方には属しません。

問い合わせ先・苦情等の連絡先

研究計画の内容に関する問い合わせ先

研究実施代表者： 巢山 晴菜
早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程4年
Tel：04-2949-8113（内線：8320）
E-mail：haru_s@akane.waseda.jp

研究の倫理審査や苦情等に関する問合せ先

人を対象とする研究に関する倫理委員会（研究推進部）：03-5272-4652、rinri@list.waseda.jp

以上の内容をよくお読みいただき、ご理解いただいたうえでこの研究に参加することに同意していただける場合は、別紙の「研究参加への同意書」に署名し、日付を記入して担当者にお渡し下さい。

同意撤回書

研究責任者：早稲田大学人間科学学術院
.....教授.....鈴木 伸一.....殿

私は、「対人相互作用場面における認知が気分および生理反応に与える影響の検討」の研究に参加することに同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回することを担当研究者

.....氏

に伝え、ここに同意撤回書を提出します。

年 月 日

参加者氏名（自署）：.....

（研究実施代表者・責任者）

本研究に関する同意撤回書を受領したことを証します。

氏 名（自署）：.....
所 属 :
資 格 :

研究参加への同意書

研究責任者： 早稲田大学人間科学学術院 教授
鈴木 伸一 殿

研究計画名： 対人相互作用場面における認知が気分および生理反応に与える影響の検討

私は、研究計画名「対人相互作用場面における認知が気分および生理反応に与える影響の検討」に関する以下の事項について説明を受けました。理解した項目については自分で□の中にレ印を入れて示しました。

- 研究の背景と目的（説明文書 項目2）
- 研究の方法（説明文書 項目3）
- 研究の場所と期間（説明文書 項目4）
- 研究を実施する者（説明文書 項目5）
- 研究に関する資料の開示について（説明文書 項目6）
- 研究への参加が任意であること（研究への参加は任意であり、参加しないことで不利益な対応を受けないこと。また、いつでも同意を撤回でき、撤回しても何ら不利益を受けないこと。）（説明文書 項目7）
- 私がこの研究への参加を依頼された理由（説明書 項目8）
- 私がこの研究への参加を中断することになる条件（説明文書 9）
- この研究への参加に伴う危害の可能性について（説明文書 項目10）
- 研究により期待される便益について（説明文書 項目11）
- 個人情報の取り扱い（被験者のプライバシーの保護に最大限配慮すること）（説明文書 12）
- 研究終了後の対応と研究成果の公表について（説明文書 13）
- 研究のための費用（説明文書 項目14）
- 研究の参加に伴う参加者の方への謝金等（説明書 項目15）
- 知的財産権の帰属（説明書 項目16）
- 問い合わせ先および苦情等の連絡先

これらの事項について確認したうえで、この研究に参加することに同意します。

.....年.....月.....日

参加者署名..... 学籍番号.....

本研究に関する説明を行い、自由意思による同意が得られたことを確認します。

説明担当者（所属、資格、氏名）.....（自署）

健康アンケート

記入が終わりましたら、声をかけてください。

記入日： _____ 年 _____ 月 _____ 日

氏名： _____

年齢： _____ 歳

性別： 男 ・ 女 （当てはまる方に○印をつけてください）

このアンケートは、あなたが実験に参加していただける状態であるかどうかの判断材料とさせていただきます。

回答内容が本日の実験参加の可否の判断以外の目的で使用されることや、回答内容が公表されることは一切ありません。

何か不明な点がありましたら、お気軽に実験者までお尋ねください。

以下の5項目のうち、ひとつでも当てはまるものがあれば「はい」に、当てはまるものがひとつもない場合は「いいえ」に○をつけてください。

はい / いいえ

1. 現在、何か病気やケガをしている
2. 現在、何か薬を飲んでいる
3. 現在、極度の睡眠不足または疲労を感じている
4. 現在、継続的に心理療法やカウンセリングを受けている
あるいは過去に心理療法やカウンセリングを受け、特定の診断名を与えられたことがある
5. 現在、あるいは実験直前に顕著な心理的苦痛（たとえば、自殺念慮、パニック発作、重度の抑うつ症状）、あるいはトラウマティックな体験を経験している

その他、何か実験者に伝えておきたいことがあればお書きください。

アンケート1

	あ て は ま ら な い	全 然 は ま ら な い	あ や て は ま ら な い	あ や て は ま る	あ と て は ま る
1 誰かに怒られると、心が傷つく	1	2	3	4	
2 自分のしたことをもし誰かに批判されたら、いやな気分になる	1	2	3	4	
3 もし誰かが私を動揺させたら、それを気にせずにはいられない	1	2	3	4	
4 友人とけんかをした後は、仲直りするまで落ち着かない	1	2	3	4	
5 誰かに無視されたときは、いつでもそれに気がつく	1	2	3	4	
6 親密な他者を失ってしまうのではないかと心配である	1	2	3	4	
7 他の人に対して怒ることは難しいことだと思う	1	2	3	4	
8 相手を傷つけてしまうことが心配なため、人に怒ることはしない	1	2	3	4	
9 他の人の心を傷つけてしまっていないか心配である	1	2	3	4	
10 他人を批判してしまっていないか心配である	1	2	3	4	
11 他人を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほうがまだ	1	2	3	4	
12 私は誰に対しても礼儀正しい	1	2	3	4	
13 他人から自分がどう思われているか、心配である	1	2	3	4	
14 みな自分のことをどう感じているか気になる	1	2	3	4	
15 他人がどう感じているかを常に気にしている	1	2	3	4	
16 自分の言動や行動が批判されるのではないかと心配である	1	2	3	4	
17 もし他人が本当の私を知ったら、私のことを嫌いになるだろう	1	2	3	4	
18 本当の私がどんな人物か知ったら、他人は私を見下すだろう	1	2	3	4	
19 本当の自分を他人に知ってほしくない	1	2	3	4	
20 他人は私のことを分かっていないと思う	1	2	3	4	
21 拒絶されることが怖いので、自分の意見を言わないようにしている	1	2	3	4	
22 批判されるのではないかと常に恐れている	1	2	3	4	
23 良いことをしたと他人に言われた時のみ、そう信じられる	1	2	3	4	
24 知り合いから賞賛されなければ、心から幸せを感じることはない	1	2	3	4	
25 他人から気に入られていると確信できたことはない	1	2	3	4	
26 自分の親しい相手をよこばせるためなら、私は自分のやり方も変えるだろう	1	2	3	4	
27 他人にどう思われているかによって、自分の価値が決まると思う	1	2	3	4	

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分
 どれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちら
 かといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、
 「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答して
 ください。

	全く 当ては まらな い	当 ては まら ない	当 ては まら ない い え ば	ど ち ら か と い え ば 当 て は ま る	当 て は ま る	非 常 に よ く 当 て は ま る
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

この質問票には21の項目があります。
それぞれの項目に含まれる文章をひとつひとつ注意深く読み、それぞれの項目で、
今日を含むこの2週間のあなたの気持ちに最も近い文章をひとつ選び、
選んだ文章の番号を○で囲んでください。

もし、ひとつの項目で同じように当てはまる文章がいくつかある場合は、
番号の大きい方を○で囲んでください。

No.16(睡眠習慣の変化)やNo.18(食欲の変化)を含め、
それぞれの項目で必ずひとつだけ選んでください。

1 悲しさ

- 0 わたしは気が滅入っていない
- 1 しばしば気が滅入る
- 2 いつも気が滅入っている
- 3 とても気が滅入ってつらくて耐えがたい

2 悲観

- 0 将来について悲観していない
- 1 以前よりも将来について悲観的に感じる
- 2 物事が自分にとってうまくいくとは思えない
- 3 将来は絶望的で悪くなるばかりだと思う

3 過去の失敗

- 0 自分を落伍者だとは思わない
- 1 普通の人より失敗が多かったと思う
- 2 人生を振り返ると失敗ばかりを思い出す
- 3 自分は人間として完全に落伍者だと思う

4 喜びの喪失

- 0 自分が楽しいことには以前と同じくらい喜びを感じる
- 1 以前ほど物事を楽しめない
- 2 以前は楽しめたことにもほとんど喜びを感じなくなった
- 3 以前は楽しめたことにもまったく喜びを感じなくなった

5 罪責感

- 0 特に罪の意識はない
- 1 自分のしたことやすべきだったことの多くに罪責感を感じる
- 2 ほとんどいつも罪責感を感じている
- 3 絶えず罪責感を感じている

6 被罰感

- 0 自分が罰を受けているようには感じない
- 1 自分は罰を受けるかもしれないと思う
- 2 自分は罰を受けるだろう
- 3 自分は今罰されていると感じる

7 自己嫌悪

- 0 自分自身に対する意識は以前と変わらない
- 1 自分自身に対して自信をなくした
- 2 自分自身に失望している
- 3 自分自身が嫌でたまらない

8 自己批判

- 0 以前よりも自分自身に批判的ということはない
- 1 以前よりも自分自身に批判的だ
- 2 あらゆる自分の欠点が気になり自分を責めている
- 3 何か悪いことが起こると、全て自分のせいだと思う

9 自殺念慮

- 0 自殺したいと思うことはまったくない
- 1 自殺したいと思うことはあるが、本当にしようとは思わない
- 2 自殺したいと思う
- 3 機会があれば自殺するだろう

10 落涙

- 0 以前よりも涙もろいということはない
- 1 以前より涙もろい
- 2 どんなささいなことにも涙が出る
- 3 泣きたいと感じるのみ涙が出ない

11 激越

- 0 普段以上に落ち着きがなかったり緊張しやすくない
- 1 普段より落ち着きがなかったり緊張しやすい
- 2 気持ちが落ち着かずじっとしているのが難しい
- 3 気持ちが落ち着かず絶えず動いたり何かしてないと気が済まない

12 興味喪失

- 0 他の人や活動に対する関心を失ってはいない
- 1 以前より他の人や物事に対する関心が減った
- 2 他の人や物事への関心がほとんどなくなった
- 3 何事にも興味をもつことが難しい

13 決断力低下

- 0 以前と同じように物事を決断できる
- 1 以前より決断するのが難しくなった
- 2 以前より決断するのがずっと難しくなった
- 3 どんなことを決めるにもひどく苦勞する

14 無価値感

- 0 自分に価値がないとは思わない
- 1 以前ほど自分に価値があり人の役に立てる人間だと思えない
- 2 他の人に比べて自分は価値がないと思う
- 3 自分はまったく価値がないと思う

15 活力喪失

- 0 以前と同じように活力がある
- 1 以前と比べて活力が減った
- 2 活力が足りなくて十分動けない
- 3 活力がなく何もできない

16 睡眠習慣の変化

- 0 睡眠習慣に変わりはない

- 1a 以前より少し睡眠時間が長い
- 1b 以前より少し睡眠時間が短い

- 2a 以前よりかなり睡眠時間が長い
- 2b 以前よりかなり睡眠時間が短い

- 3a ほとんど一日中寝ている
- 3b 以前より1～2時間早く目がさめて、再び眠れない

17 易刺激性

- 0 普段よりイライラしやすいわけではない
- 1 普段よりイライラしやすい
- 2 普段よりかなりイライラしやすい
- 3 いつもイライラしやすい

18 食欲の変化

- 0 食欲は以前と変わらない

- 1a 以前より少し食欲が落ちた
- 1b 以前より少し食欲が増えた

- 2a 以前よりかなり食欲が落ちた
- 2b 以前よりかなり食欲が増えた

- 3a まったく食欲がなくなった
- 3b いつも何か食べたくてたまらない

19 集中困難

- 0 以前と同じように集中できる
- 1 以前ほどは集中できない
- 2 何事にも長い間集中することは難しい
- 3 何事にも集中できない

20 疲労感

- 0 以前と比べて疲れやすいわけではない
- 1 以前より疲れやすい
- 2 以前ならできた多くのことが疲れてしまっ
てできない
- 3 以前ならできたほとんどのことが疲れてしまっ
てできない

21 性欲減退

- 0 性欲は以前と変わらない
- 1 以前ほど性欲がない
- 2 最近めっきり性欲が減退した
- 3 まったく性欲がなくなった

以下の項目が自分にどの程度当てはまるか、○印をつけてください。

		当てはまらない	ほとんど当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	やや当てはまる	かなり当てはまる	非常に当てはまる
1	無口な	1	2	3	4	5	6	7
2	社交的	1	2	3	4	5	6	7
3	話好き	1	2	3	4	5	6	7
4	外交的	1	2	3	4	5	6	7
5	陽気な	1	2	3	4	5	6	7
6	いい加減な	1	2	3	4	5	6	7
7	ルーズな	1	2	3	4	5	6	7
8	成り行きまかせ	1	2	3	4	5	6	7
9	怠惰な	1	2	3	4	5	6	7
10	計画性のある	1	2	3	4	5	6	7
11	軽率な	1	2	3	4	5	6	7
12	几帳面な	1	2	3	4	5	6	7
13	不安になりやすい	1	2	3	4	5	6	7
14	心配性	1	2	3	4	5	6	7
15	弱気になる	1	2	3	4	5	6	7
16	緊張しやすい	1	2	3	4	5	6	7
17	憂鬱な	1	2	3	4	5	6	7
18	多才の	1	2	3	4	5	6	7
19	進歩的	1	2	3	4	5	6	7
20	独創的	1	2	3	4	5	6	7

		当てはまらない	まったく当てはまらない	ほとんど当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	やや当てはまる	かなり当てはまる	非常に当てはまる
21	頭の回転の速い	1	2	3	4	5	6	7	
22	興味の広い	1	2	3	4	5	6	7	
23	好奇心が強い	1	2	3	4	5	6	7	
24	短期	1	2	3	4	5	6	7	
25	怒りっぽい	1	2	3	4	5	6	7	
26	温和な	1	2	3	4	5	6	7	
27	寛大な	1	2	3	4	5	6	7	
28	自己中心的	1	2	3	4	5	6	7	
29	親切的な	1	2	3	4	5	6	7	

アンケート 1 はこれで終わりです。

アンケート 2

キャッチボール前

1 3人に均等にボールが回った時を33%とすると、次のブロックで、%
どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。

アンケート 2 はこれで終わりです。

アンケート 3

ブロック①後

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に応じてどれほど当てはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらかといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答してください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>直前のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>次のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	%

当てはまる数字に○印をつけてください。

	全然 そう 思わ ない	や や そう 思わ ない	や や そう 思 う	と て も そ う 思 う
3 相手の人から価値のある人間だと思われている	1	2	3	4
4 相手の人から拒絶された	1	2	3	4
5 自分の人生に意味がある	1	2	3	4
6 自分の人生をコントロールできる	1	2	3	4
7 相手の人はむかつく	1	2	3	4
8 相手の人は不快な存在だ	1	2	3	4
9 相手の人を軽蔑する	1	2	3	4
10 相手の人はうっとうしい	1	2	3	4
11 相手の人はつきあいにくい	1	2	3	4
12 相手の人と一緒にいたら疲れる	1	2	3	4
13 相手の人からバカにされている気がする	1	2	3	4
14 劣等感が刺激される	1	2	3	4
15 相手の人は怖い	1	2	3	4
16 相手の人を脅威に感じる	1	2	3	4

アンケート 3 はこれで終わりです。

アンケート 4

ブロック②後

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>直前のブロック</u> で、 どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	_____	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>次のブロック</u> で、 どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	_____	%

アンケート 4 はこれで終わりです。

アンケート 5

ブロック③後

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に応じてどれほど当てはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらかといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答してください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>直前のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>次のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	%

当てはまる数字に○印をつけてください。

	全然 そう 思わ ない	やや そう 思わ ない	やや そう 思 う	と て も そ う 思 う
3 相手の人から価値のある人間だと思われている	1	2	3	4
4 相手の人から拒絶された	1	2	3	4
5 自分の人生に意味がある	1	2	3	4
6 自分の人生をコントロールできる	1	2	3	4
7 相手の人はむかつく	1	2	3	4
8 相手の人は不快な存在だ	1	2	3	4
9 相手の人を軽蔑する	1	2	3	4
10 相手の人はうっとうしい	1	2	3	4
11 相手の人はつきあいにくい	1	2	3	4
12 相手の人と一緒にいたら疲れる	1	2	3	4
13 相手の人からバカにされている気がする	1	2	3	4
14 劣等感が刺激される	1	2	3	4
15 相手の人は怖い	1	2	3	4
16 相手の人を脅威に感じる	1	2	3	4

アンケート5はこれで終わりです。

アンケート 6

ブロック④後

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>直前のブロック</u> で、 どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	_____	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>次のブロック</u> で、 どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	_____	%

アンケート 7

ブロック⑥後

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分
 どれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちら
 かといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、
 「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答して
 ください。

	全 く 当 て は ま ら な い	当 て は ま ら な い	ど ち ら か と い え ば 当 て は ま ら な い	ど ち ら か と い え ば 当 て は ま る	当 て は ま る	非 常 に よ く 当 て は ま る
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>直前のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>次のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	%

当てはまる数字に○印をつけてください。

	全然 そう 思わ ない	や や そう 思わ ない	や や そう 思 う	と て も そ う 思 う	
3	相手の人から価値のある人間だと思われている	1	2	3	4
4	相手の人から拒絶された	1	2	3	4
5	自分の人生に意味がある	1	2	3	4
6	自分の人生をコントロールできる	1	2	3	4
7	相手の人はむかつく	1	2	3	4
8	相手の人は不快な存在だ	1	2	3	4
9	相手の人を軽蔑する	1	2	3	4
10	相手の人はうっとうしい	1	2	3	4
11	相手の人はつきあいにくい	1	2	3	4
12	相手の人と一緒にいたら疲れる	1	2	3	4
13	相手の人からバカにされている気がする	1	2	3	4
14	劣等感が刺激される	1	2	3	4
15	相手の人は怖い	1	2	3	4
16	相手の人を脅威に感じる	1	2	3	4

アンケート7はこれで終わりです。

アンケート 8

決められたキャッチボール前

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に応じてどれほど当てはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらかといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答してください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>直前のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>次のブロック</u> で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	%

当てはまる数字に○印をつけてください。

	全然 そう 思わ ない	やや そう 思わ ない	やや そう 思 う	と て も そ う 思 う
3 相手の人から価値のある人間だと思われている	1	2	3	4
4 相手の人から拒絶された	1	2	3	4
5 自分の人生に意味がある	1	2	3	4
6 自分の人生をコントロールできる	1	2	3	4
7 相手の人はむかつく	1	2	3	4
8 相手の人は不快な存在だ	1	2	3	4
9 相手の人を軽蔑する	1	2	3	4
10 相手の人はうっとうしい	1	2	3	4
11 相手の人はつきあいにくい	1	2	3	4
12 相手の人と一緒にいたら疲れる	1	2	3	4
13 相手の人からバカにされている気がする	1	2	3	4
14 劣等感が刺激される	1	2	3	4
15 相手の人は怖い	1	2	3	4
16 相手の人を脅威に感じる	1	2	3	4

アンケート 8 はこれで終わりです。

アンケート 9

ブロック①後

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分
 どれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちら
 かといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、
 「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答して
 ください。

	全く 当ては まらな い	当 ては まら ない	当 ては まら ない え ば	ど ち ら か と い え ば 当 て は ま る	当 て は ま る	非 常 に よ く 当 て は ま る
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 直前のブロック で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 次のブロック で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	%

当てはまる数字に○印をつけてください。

	全然 そう 思わ ない	や や そう 思わ ない	や や そう 思 う	と て も そ う 思 う
3 相手の人から価値のある人間だと思われている	1	2	3	4
4 相手の人から拒絶された	1	2	3	4
5 自分の人生に意味がある	1	2	3	4
6 自分の人生をコントロールできる	1	2	3	4
7 相手の人はむかつく	1	2	3	4
8 相手の人は不快な存在だ	1	2	3	4
9 相手の人を軽蔑する	1	2	3	4
10 相手の人はうっとうしい	1	2	3	4
11 相手の人はつきあいくらい	1	2	3	4
12 相手の人と一緒にいたら疲れる	1	2	3	4
13 相手の人からバカにされている気がする	1	2	3	4
14 劣等感が刺激される	1	2	3	4
15 相手の人は怖い	1	2	3	4
16 相手の人を脅威に感じる	1	2	3	4

アンケート 9 はこれで終わりです。

アンケート 10

ブロック②後

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>直前のブロック</u> で、 どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	_____	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 <u>次のブロック</u> で、 どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	_____	%

アンケート 10 はこれで終わりです。

アンケート 11

ブロック③後

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分
 どれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちら
 かといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、
 「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答して
 ください。

	全 く 当 て は ま ら な い	当 て は ま ら な い	ど ち ら か と い え ば 当 て は ま ら な い	ど ち ら か と い え ば 当 て は ま る	当 て は ま る	非 常 に よ く 当 て は ま る
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

1	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 直前のブロック で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか。	%
2	3人に均等にボールが回った時を33%とすると、 次のブロック で、どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか。	%

当てはまる数字に○印をつけてください。

	全然 そう 思わ ない	や や そう 思わ ない	や や そう 思 う	と て も そ う 思 う
3 相手の人から価値のある人間だと思われている	1	2	3	4
4 相手の人から拒絶された	1	2	3	4
5 自分の人生に意味がある	1	2	3	4
6 自分の人生をコントロールできる	1	2	3	4
7 相手の人はむかつく	1	2	3	4
8 相手の人は不快な存在だ	1	2	3	4
9 相手の人を軽蔑する	1	2	3	4
10 相手の人はうっとうしい	1	2	3	4
11 相手の人はつきあいにくい	1	2	3	4
12 相手の人と一緒にいたら疲れる	1	2	3	4
13 相手の人からバカにされている気がする	1	2	3	4
14 劣等感が刺激される	1	2	3	4
15 相手の人は怖い	1	2	3	4
16 相手の人を脅威に感じる	1	2	3	4

アンケート 11 はこれで終わりです。

研究 4

実験ご協力のお願い

[性格特性、相手との接触頻度が会話の評価に与える影響の検討]

早稲田大学人間科学学術院 教授 鈴木 伸一
早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程 4年 巢山 晴菜

人間科学学術院 鈴木伸一研究室では、心理学実験に参加して下さる同性の友人同士のパアを募集しています。
性格特性と友人同士の関係性が、会話の評価に与える影響をみる実験です。

【対象】 同性の友人同士のパア

※下記の①②を両方満たす本学の学生であれば、**どなたでもご参加いただけます**

- ①医師による処方薬を服用していない
- ②継続的に精神科への通院や心理療法、カウンセリングを受けたことがなく、特定の診断をされたことがない

【方法】 テーマに沿った会話とアンケート（所要時間は約 60 分）

【場所】 早稲田大学 101 号館内の教室

【謝礼】 おひとりにつき 1500 円（振込）

- 実験への参加を強要することは一切ありません。
- 実験についてのご説明をさせていただき、内容について十分にご理解いただいた上で、ご協力いただけるかどうかを決めていただきます。
- 個人情報は責任を持って管理し、実験のご連絡以外では一切使用しません。
- こちらの用紙への記入の有無、記入内容は授業の評価等には一切関係ありません。

この研究にご興味を持っていただけた方は、以下の欄へのご記入をお願いいたします

実験への参加を [**希望してもよい** ・ **説明を聞いて検討する** ・ **希望しない**]

※希望されない方は以下ご記入いただかなくて結構です。

あなたの氏名 _____

希望の連絡先 _____

(PC E-mail, 携帯 E-mail, 電話番号など、連絡のつきやすいものをご記入ください。実験連絡以外に使用しません。)

--- ペアの方が決まり、ご了解いただいている方は、以下にもご記入をお願いいたします ---

※ご連絡の重複を避けるため、お二人で一枚で結構です。

ペアの方の氏名 _____

ペアの方の希望の連絡先 _____

研究参加者の方への説明文書

この研究について

1. 研究計画名: 性格特性、相手との接触頻度が会話の評価に与える影響の検討

2. 研究の背景と目的

日常生活の中で私たちは様々な相手と知り合い、関わっています。なかでも、青年期においては友人同士の会話はその多くを占めるとされています。また、性格や相手との関係性が対面での会話をはじめとするコミュニケーションの捉え方と関連することが考えられますが、個人の特徴である性格と友人同士の関係性がコミュニケーションの捉え方にどのように影響を与えるのかについては十分に分かっていません。そこで本研究では、友人同士でテーマに沿った会話を行っていただき、その前後で気分と会話の評価をお聞きするアンケートに回答していただくことで、これらの関係性について明らかにすることを目的としています。

3. 研究の方法

この実験は、健康な大学生および大学院生の男女約 60 名を対象として行われます。また、実験は同性の友人同士のペアで行われます。

実験は、自己紹介、テーマに沿った 10 分間の会話を 2 回、その前後におけるアンケートへの回答から構成されています。具体的には、おふたりで実験室にお越しいただき、性格や気分をお聞きするアンケートに回答していただきます。その後、お二人で自己紹介を行っていただき、気分のアンケートへ回答していただきます。その後、あるテーマに沿った 10 分間の会話と、気分と会話の評価のアンケートへの回答を 2 回行っていただき、実験は終了となります。

この研究では、複数のアンケートに回答いただきます。研究で得られたデータはすべて匿名化され、統計的な処理が行われますので、個人が特定されることは決してありません。また、会話の様子や内容はご了承いただける場合に録画させていただき、後日実験従事者が会話中の様子を確認いたしますが、映像が公開されることは一切ありません。また、データを研究以外の目的で使用することも一切ありません。

所要時間は 60 分程度を予定しています。実験にご協力いただいた方には、1500 円を後日銀行振り込みいたします。

4. 研究の場所と期間

この研究は、早稲田大学所沢キャンパスの 101 号館において、2015 年 4 月 1 日から 2016 年 3 月 31 日まで実施される予定です。ただし、参加者の方に研究に参加していただくのは 1 日 (60 分間) です。

5. 研究を実施する者

研究実施代表者： 巢山 晴菜 (早稲田大学大学院人間科学研究科、博士後期課程 3 年)

研究責任者： 鈴木 伸一 (早稲田大学大学院人間科学学術院、教授、研究実施代表者の指導教員)

その他の研究従事者： 兼子 唯 (早稲田大学大学院人間科学研究科、博士後期課程 3 年)

伊藤 理紗 (早稲田大学大学院人間科学研究科、博士後期課程 1 年)

佐藤 秀樹 (早稲田大学大学院人間科学研究科、修士課程 2 年)

6. 研究に関する資料の開示について

あなたのご希望があれば、他の参加者の個人情報保護や研究の独創性の確保に支障がない範囲で、この研究の研究計画および研究方法についての資料を開示いたします。また、この研究に関するご質問がありましたらいつでも担当者にお尋ね下さい。

7. 研究への参加が任意であること

この研究への参加は任意です。あなたの自由な意思が尊重されます。研究に参加しないことによって、不利益な対応を受けることはありません。また、研究への参加の有無が学業成績や単位取得に影響を与えることはありません。

いったん参加に同意した場合でも、2016年3月まで不利益を受けることなく同意を撤回することができます。この説明書の最終ページに添付してある「同意撤回書」に署名して下記までお申し出下さい。

その場合、提供していただいたデータは廃棄され、それ以降はそれらの情報が研究のために用いられることもありません。ただし、同意を撤回したときすでに研究成果が論文などで公表されていた場合やデータが完全に匿名化されて特定できない場合等、廃棄できないこともあります。

同意を撤回する場合の連絡先

氏名： 巢山 晴菜
所属： 早稲田大学大学院人間科学研究科
資格： 博士後期課程3年、臨床心理士
電話： 04-2949-8113（内線：8320）
E-mail： haru_s@akane.waseda.jp

8. この研究への参加をお願いする理由

人と知り合い、関わることはすべての人が経験するものです。そのため、本研究は、健康な大学生、大学院生を対象として行われています。具体的には、現在健康であり実験にご参加いただける状態であることの指標として、以下の全ての項目に該当する方のみを対象としています。

- ① 現在、極度の睡眠不足や疲労感を感じていない
- ② 現在、医師による処方薬（風邪薬を含む）を服用していない
- ③ これまでに継続的に精神科への通院や心理療法、カウンセリングを受けたことがなく、特定の診断をされたことがない
- ④ 現在または実験直前に、顕著な心理的苦痛（たとえば、自殺念慮、パニック発作、強い落ち込み）、あるいはトラウマティックな体験を経験していない

本研究に興味をお持ちの方や、実験にご協力いただける方を対象に、実験参加のお願いをしております。参加希望の方に対して、個別に研究目的を十分に説明させていただきます。その後、実験参加の同意が得られた方のみを対象に、実験を実施させていただきます。また、実験開始前に健康アンケートを実施し、実験に参加できる健康状態であると確認できた方のみを対象とします。

9. この研究への参加を中断する場合

上述の、実験にご参加いただける条件は、事前に口頭またはメールにてお伝えしておりますが、万が一実験前の健康アンケートにて、どちらかおひとりでも実験に参加できる状態でない判断された場合、当日の実験を見送らせていただきます。また、どちらかおひとりでも実験中に気分や体調が悪くなるがありましたら、すぐに実験を中止しますのでお知らせください。

実験への参加に同意いただいた後であっても、本研究への参加の中止を希望される場合には、2016年3月までであればいかなる時点でもすぐに中止し、データを破棄させていただきます。

10. この研究への参加に伴う危害の可能性について

この実験は心身に危害を与えるものではありません。そのため、この実験への協力に伴い健康被害等が生じる可能性はありませんが、会話で話題が互いの特徴に及んだ場合、不快感を含めた様々な気分が生じる可能性も考えられます。実験中に話していただく内容は、おふたりの友人関係に影響のない範囲で構いま

せん。また、万が一不快な感情が生じた場合にはいつでも中断することができます。

実験への参加および、アンケート冊子への回答は自由意思に基づくものであり、強制ではありません。答えたくない質問にはお答えいただくなくても構いません。一旦同意いただいた後でも、いつでも不利益を受けることなく同意を撤回することができます。万一、実験途中で気分が悪くなることがありましたら、すぐに実験を中止しますのでお知らせください。しばらく安静にしても気分が回復しない場合は、ご承諾をいただけた場合に、初期対処として、臨床心理士である研究実施代表者が、情動を緩和させるためにリラクゼーションを実施します。それでも回復しなかった場合には、早稲田大学所沢キャンパスの保健センター所沢分室を紹介し、適切な対処を依頼します。なお、万が一医療費が発生した際は医療費の負担は致しかねますのでご了承ください。

11. 研究により期待される便益

この研究に参加することによって、あなたに直接的な便益はありませんが、本研究により性格特性と友人との関係性が会話の評価に与える影響が明らかになることで、人間関係やコミュニケーションにおける困難感を特徴とした抑うつに対する支援方法の構築に大きく貢献する知見が得られる点で、本研究は大きな意義を持つと考えられます。

12. 個人情報の取り扱い

あなたのデータや個人情報は、この研究を遂行し、その後検証するために必要な範囲においてのみ利用いたします。万が一この研究のために研究従事者以外の者または機関にデータを提供する必要が生じた場合は改めて承諾をお願いいたします。あなたの個人情報やデータが記された資料は、鍵をかけて厳重に保管します。また、あなたのデータをコンピュータに入力する場合は、情報漏れのないよう対策を十分に施したコンピュータを使用して、外部記憶媒体に記録させ、その外部記憶媒体は鍵をかけて厳重に保管し、紛失、盗難などのないよう管理します。このように、あなたの個人情報の取り扱いには十分配慮し、外部に漏れないよう厳重に管理を行います。

また、ご提出いただいた同意書は研究責任者である鈴木伸一が責任をもって保管し、研究終了後にシュレッダーにかけるなどして廃棄します。質問紙等の調査用紙は、電子データへの記録が完了した後に、溶解処分します。電子データは、研究終了後、2021年3月まで保管した後に、記録されている外部記録媒体（外付けハードディスクやフラッシュメモリーなど）の物理的破壊によって、完全に破棄します。

13. 研究終了後の対応と研究成果の公表

この研究の終了後、あなたのデータは、個人情報が外部に漏れないようにしたうえで廃棄します。また、この研究で得られた成果を専門の学会や学術雑誌などに発表する可能性があります。発表する場合はプライバシーに慎重に配慮しますので、個人を特定できる情報が公表されることはありません。

14. 研究のための費用

この研究にかかる費用は文部科学省科学研究費補助金、および鈴木伸一研究室の実験実習費から支出されます。

15. 研究に伴う参加者の方への謝金等

この研究への参加に際して、謝金（1500円）を支払います。

16. 知的財産権の帰属

この研究の成果により特許権等の知的財産権が生じる可能性があります。その権利は、この研究の責任機関である早稲田大学に属し、参加者の方には属しません。

問い合わせ先・苦情等の連絡先

研究計画の内容に関する問い合わせ先

研究実施代表者： 巢山 晴菜

早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程3年

Tel : 04-2949-8113 (内線 : 8320)

E-mail : haru_s@akane.waseda.jp

研究の倫理審査や苦情等に関する問合せ先

人を対象とする研究に関する倫理委員会 (研究推進部) : 03 - 5272 - 4652、rinri@list.waseda.jp

以上の内容をよくお読みいただき、ご理解いただいたうえでこの研究に参加することに同意していただける場合は、別紙の「研究参加への同意書」に署名し、日付を記入して担当者にお渡し下さい。

同意撤回書

研究責任者:

人間科学学術院 教授 鈴木伸一 殿

私は、「性格特性，相手との接触頻度が会話の評価に与える影響の検討」の研究に参加することに同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回することを担当研究者

.....氏

に伝え、ここに同意撤回書を提出します。

年 月 日

参加者氏名（自署）:

（研究実施代表者・責任者）

本研究に関する同意撤回書を受領したことを証します。

氏 名（自署）:

所 属 :

資 格 :

研究参加への同意書

研究責任者: 早稲田大学人間科学学術院 教授 鈴木伸一 殿

研究計画名: 性格特性, 相手との接触頻度が会話の評価に与える影響の検討

私は、研究計画名「性格特性, 相手との接触頻度が会話の評価に与える影響の検討」に関する以下の事項について説明を受けました。理解した項目については自分で□の中にレ印を入れて示しました。

- 研究の背景と目的 (説明文書 項目 2)
- 研究の方法 (説明文書 項目 3)
- 研究の場所と期間 (説明文書 項目 4)
- 研究を実施する者 (説明文書 項目 5)
- 研究に関する資料の開示について (説明文書 項目 6)
- 研究への参加が任意であること (研究への参加は任意であり、参加しないことで不利益な対応を受けないこと。また、いつでも同意を撤回でき、撤回しても何ら不利益を受けないこと。) (説明文書 項目 7)
- 私がこの研究への参加を依頼された理由 (説明書 項目 8)
- 私がこの研究への参加を中断することになる条件 (説明文書 項目 9)
- この研究への参加に伴う危害の可能性について (説明文書 項目 10)
- 研究により期待される便益について (説明文書 項目 11)
- 個人情報の取り扱い (被験者のプライバシーの保護に最大限配慮すること) (説明文書 項目 12)
- 研究終了後の対応と研究成果の公表について (説明文書 項目 13)
- 研究のための費用 (説明文書 項目 14)
- 研究の参加に伴う参加者の方への謝金等 (説明書 項目 15)
- 知的財産権の帰属 (説明書 項目 16)
- 問い合わせ先および苦情等の連絡先

なお、この研究において撮影された私の動画 [または音声] の公開につきましては以下の□に✓を入れて示しました。

- 公開に同意しない
- 研究者を対象とする学術目的に限り、下記の条件の下に同意する
 - 顔部分など個人の特定可能な部分も含んでよい
 - 顔部分や眼部などを消去する、ぼかすなど個人の特定不可能な状態に限る
 - その他 (特にご希望があれば、以下にご記入ください)

これらの事項について確認したうえで、この研究に参加することに同意します。

.....年.....月.....日

参加者署名..... 学籍番号.....

本研究に関する説明を行い、自由意思による同意が得られたことを確認します。

説明担当者 (所属、資格、氏名)(自署).....

アンケート 1

■ 授業のある平日における、ペアの方との平均的な接触時間（たとえば、話をしたり、メールをしたり等の時間）は1日あたりどの程度ですか。ただし、授業時間は含みません。

- 0 : まったくない
- 1 : 30分未満
- 2 : 30分～1時間未満
- 3 : 1時間～2時間未満
- 4 : 2時間～3時間未満
- 5 : 3時間以上

■ ペアの方と友人（個人的に連絡をとったり話をするなど）になってからどのくらいの期間が経ちますか

約 _____ カ月

ペアの友人の方との関係性について、以下の文章がどのくらい当てはまるか、○印をつけてください。

	全く 当ては まらな い	1	2	3	4	5	6	7	8	9	非常に 当ては まる
1 ○○さんとはうまくコミュニケーションをとれている		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
2 ○○さんは必要な時には私を頼ることができる		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
3 私と○○さんの関係は温かいものである		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
4 ○○さんとの関係は居心地の良いものである		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
5 私は必要な時には○○さんを頼ることができる		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
6 私は私自身の事柄(情報)を○○さんと深く共有している		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
7 私は○○さんの情緒的(心理的)な支えにかなりなっていると思う		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
8 ○○さんは私のことを本当に理解してくれていると思う		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
9 私は○○さんからかなりの情緒的(心理的)なサポートを受けている		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
10 ○○さんを情緒的(心理的)に近い存在だと思っている		1	2	3	4	5	6	7	8	9	

次のページに続きます

以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に
 どれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちら
 かといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、
 「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答して
 ください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. びりびりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

この質問票には21の項目があります。
それぞれの項目に含まれる文章をひとつひとつ注意深く読み、それぞれの項目で、
今日を含むこの2週間のあなたの気持ちに最も近い文章をひとつ選び、
選んだ文章の番号を○で囲んでください。

もし、ひとつの項目で同じように当てはまる文章がいくつかある場合は、
番号の大きい方を○で囲んでください。

No.16(睡眠習慣の変化)やNo.18(食欲の変化)を含め、
それぞれの項目で必ずひとつだけ選んでください。

1 悲しさ

- 0 わたしは気が滅入っていない
- 1 しばしば気が滅入る
- 2 いつも気が滅入っている
- 3 とても気が滅入ってつらくて耐えがたい

2 悲観

- 0 将来について悲観していない
- 1 以前よりも将来について悲観的に感じる
- 2 物事が自分にとってうまくいくとは思えない
- 3 将来は絶望的で悪くなるばかりだと思う

3 過去の失敗

- 0 自分を落伍者だとは思わない
- 1 普通の人より失敗が多かったと思う
- 2 人生を振り返ると失敗ばかりを思い出す
- 3 自分は人間として完全に落伍者だと思う

4 喜びの喪失

- 0 自分が楽しいことには以前と同じくらい喜びを感じる
- 1 以前ほど物事を楽しめない
- 2 以前は楽しめたことにもほとんど喜びを感じなくなった
- 3 以前は楽しめたことにもまったく喜びを感じなくなった

5 罪責感

- 0 特に罪の意識はない
- 1 自分のしたことやすべきだったことの多くに罪責感を感じる
- 2 ほとんどいつも罪責感を感じている
- 3 絶えず罪責感を感じている

6 被罰感

- 0 自分が罰を受けているようには感じない
- 1 自分は罰を受けるかもしれないと思う
- 2 自分は罰を受けるだろう
- 3 自分は今罰されていると感じる

7 自己嫌悪

- 0 自分自身に対する意識は以前と変わらない
- 1 自分自身に対して自信をなくした
- 2 自分自身に失望している
- 3 自分自身が嫌でたまらない

8 自己批判

- 0 以前よりも自分自身に批判的ということはない
- 1 以前よりも自分自身に批判的だ
- 2 あらゆる自分の欠点が気になり自分を責めている
- 3 何か悪いことが起こると、全て自分のせいだと思う

9 自殺念慮

- 0 自殺したいと思うことはまったくくない
- 1 自殺したいと思うことはあるが、本当にしようとは思わない
- 2 自殺したいと思う
- 3 機会があれば自殺するだろう

10 落涙

- 0 以前よりも涙もろいということはない
- 1 以前より涙もろい
- 2 どんなささいなことにも涙が出る
- 3 泣きたいと感じるのみ涙が出ない

11 激越

- 0 普段以上に落ち着きがなかったり緊張しやすくない
- 1 普段より落ち着きがなかったり緊張しやすい
- 2 気持ちが落ち着かずじっとしているのが難しい
- 3 気持ちが落ち着かず絶えず動いたり何かしてないと気が済まない

12 興味喪失

- 0 他の人や活動に対する関心を失ってはいない
- 1 以前より他の人や物事に対する関心が減った
- 2 他の人や物事への関心がほとんどなくなった
- 3 何事にも興味をもつことが難しい

13 決断力低下

- 0 以前と同じように物事を決断できる
- 1 以前より決断するのが難しくなった
- 2 以前より決断するのがずっと難しくなった
- 3 どんなことを決めるにもひどく苦勞する

14 無価値感

- 0 自分に価値がないとは思わない
- 1 以前ほど自分に価値があり人の役に立てる人間だと思えない
- 2 他の人に比べて自分は価値がないと思う
- 3 自分はまったく価値がないと思う

15 活力喪失

- 0 以前と同じように活力がある
- 1 以前と比べて活力が減った
- 2 活力が足りなくて十分動けない
- 3 活力がなく何もできない

16 睡眠習慣の変化

- 0 睡眠習慣に変わりはない

- 1a 以前より少し睡眠時間が長い
- 1b 以前より少し睡眠時間が短い

- 2a 以前よりかなり睡眠時間が長い
- 2b 以前よりかなり睡眠時間が短い

- 3a ほとんど一日中寝ている
- 3b 以前より1～2時間早く目がさめて、再び眠れない

17 易刺激性

- 0 普段よりイライラしやすいわけではない
- 1 普段よりイライラしやすい
- 2 普段よりかなりイライラしやすい
- 3 いつもイライラしやすい

18 食欲の変化

- 0 食欲は以前と変わらない

- 1a 以前より少し食欲が落ちた
- 1b 以前より少し食欲が増えた

- 2a 以前よりかなり食欲が落ちた
- 2b 以前よりかなり食欲が増えた

- 3a まったく食欲がなくなった
- 3b いつも何か食べたくてたまらない

19 集中困難

- 0 以前と同じように集中できる
- 1 以前ほどは集中できない
- 2 何事にも長い間集中することは難しい
- 3 何事にも集中できない

20 疲労感

- 0 以前と比べて疲れやすいわけではない
- 1 以前より疲れやすい
- 2 以前ならできた多くのことが疲れてしまってできない
- 3 以前ならできたほとんどのことが疲れてしまってできない

21 性欲減退

- 0 性欲は以前と変わらない
- 1 以前ほど性欲がない
- 2 最近めっきり性欲が減退した
- 3 まったく性欲がなくなった

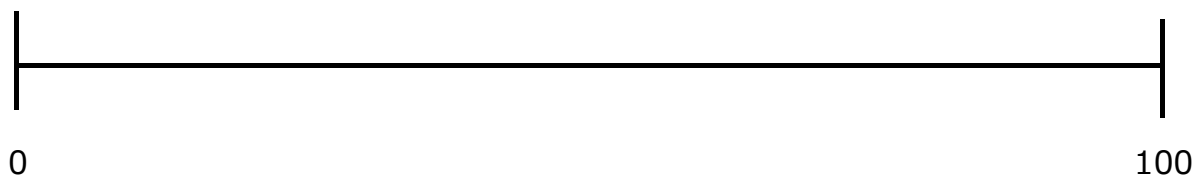
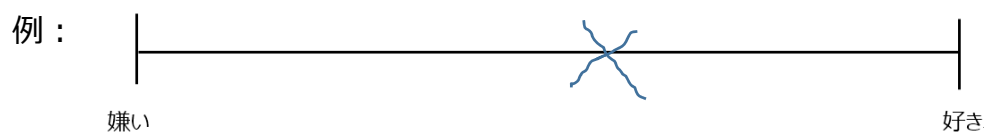
	あ て は ま ら な い	全 然 あ や は ま ら な い	あ や は ま る	あ と て は ま る
1 誰かに怒られると、心が傷つく	1	2	3	4
2 自分のしたことをもし誰かに批判されたら、いやな気分になる	1	2	3	4
3 もし誰かが私を動揺させたら、それを気にせずにはいられない	1	2	3	4
4 友人とけんかをした後は、仲直りするまで落ち着かない	1	2	3	4
5 誰かに無視されたときは、いつでもそれに気がつく	1	2	3	4
6 親密な他者を失ってしまうのではないかと心配である	1	2	3	4
7 他の人に対して怒ることは難しいことだと思う	1	2	3	4
8 相手を傷つけてしまうことが心配なため、人に怒ることはしない	1	2	3	4
9 他の方の心を傷つけてしまっていないか心配である	1	2	3	4
10 他の方を批判してしまっていないか心配である	1	2	3	4
11 他の方を傷つけたり動揺させるくらいなら、やりたくないことでもやったほうがまだ	1	2	3	4
12 私は誰に対しても礼儀正しい	1	2	3	4
13 他の方から自分がどう思われているか、心配である	1	2	3	4
14 みな自分が自分のことをどう感じているか気になる	1	2	3	4
15 他の方のどう感じているかを常に気にしている	1	2	3	4
16 自分の言動や行動が批判されるのではないかと心配である	1	2	3	4
17 もし他の方の本当の私を知ったら、私のことを嫌いになるだろう	1	2	3	4
18 本当の私がどんな人物か知ったら、他の方は私を見下すだろう	1	2	3	4
19 本当の自分を他の方に知ってほしくない	1	2	3	4
20 他の方は私のことを分かっていないと思う	1	2	3	4
21 拒絶されることが怖いので、自分の意見を言わないようにしている	1	2	3	4
22 批判されるのではないかと常に恐れている	1	2	3	4
23 良いことをしたと他の方に言われた時のみ、そう信じられる	1	2	3	4
24 知り合いから賞賛されなければ、心から幸せを感じることはない	1	2	3	4
25 他の方から気に入られていると確信できたことはない	1	2	3	4
26 自分の親しい相手をよるこぼせるためなら、私は自分のやり方も変えるだろう	1	2	3	4
27 他の方にどう思われているかによって、自分の価値が決まると思う	1	2	3	4

アンケート 1 はこれでおわりです。

アンケート 2

自己紹介前

■ いまあなたはどの程度緊張していますか？もっとも適当な箇所に×印をつけてください。

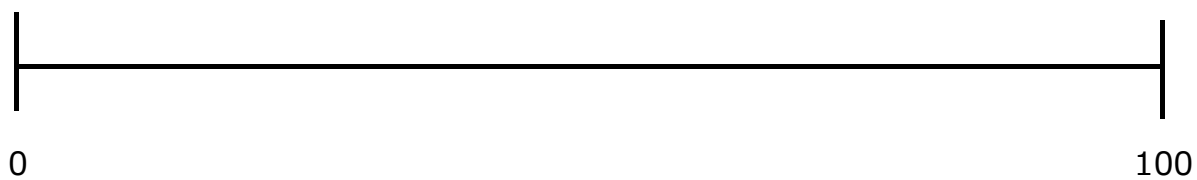
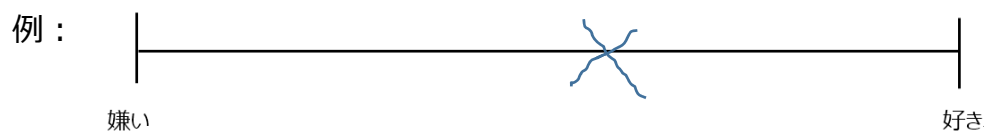


アンケート 2 はこれでおわりです。

アンケート 3

自己紹介後

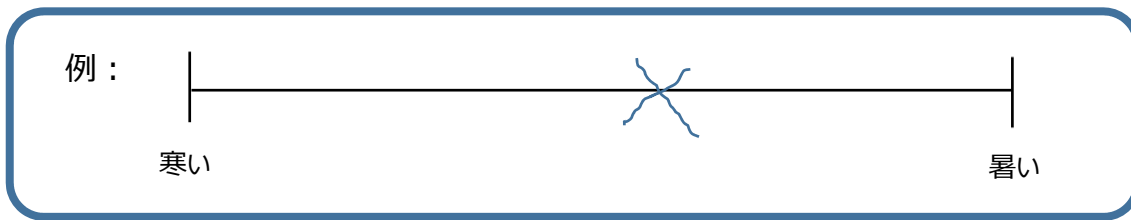
- 自己紹介中、あなたはどの程度緊張していましたか？もっとも適当な箇所に×印をつけてください。



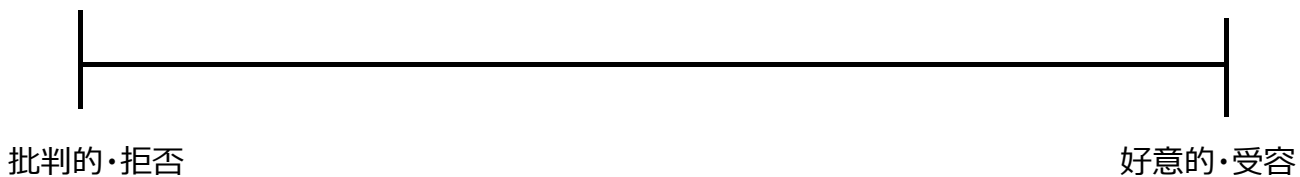
アンケート3はこれでおわりです。

アンケート 4

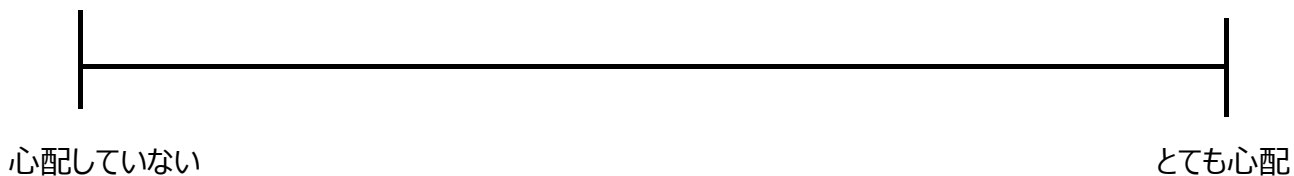
会話①前



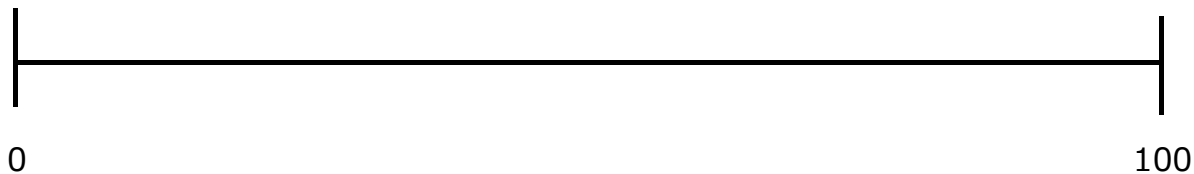
- 1. 次の会話における相手からの対応について、予想されるもっとも適当な箇所に×印をつけてください。



- 2. 次の会話における相手からの対応について、どの程度心配していますか。×印をつけてください。



- 3. いま、あなたはどの程度緊張していますか？もっとも適当な箇所に×印をつけてください。



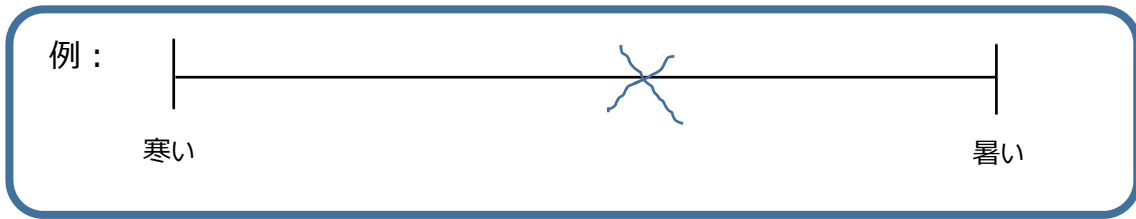
以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に応じてどれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらかといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答してください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. ぴりぴりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

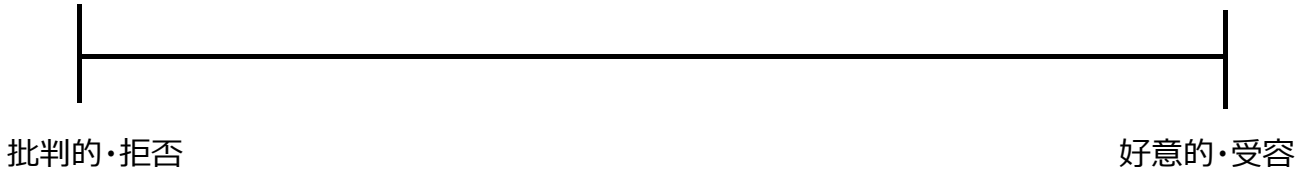
アンケート4はこれでおわりです。

アンケート 5

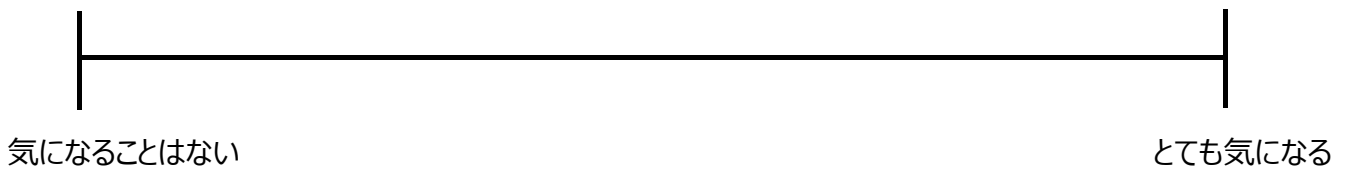
会話①後



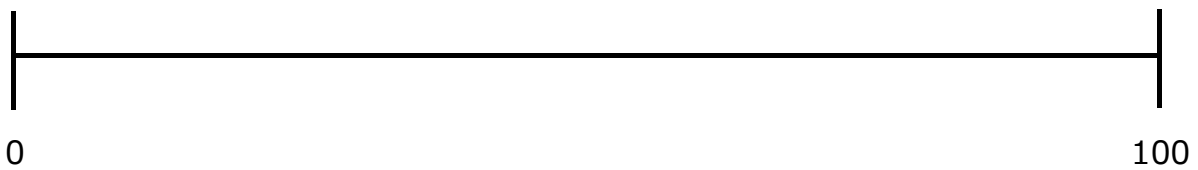
- 1. いまの会話でのペアの方の言葉や態度について、もっとも適当な箇所に×印をつけてください。



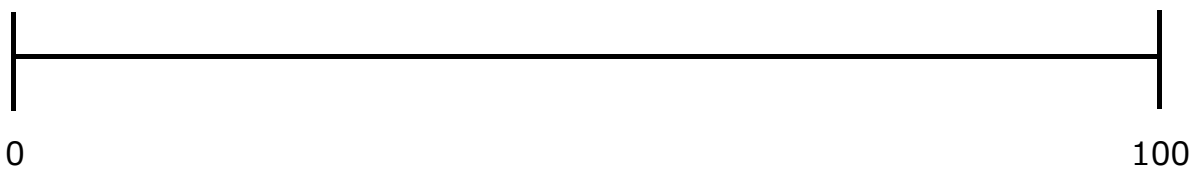
- 2. いまの会話でのペアの方の言葉や態度を、どの程度気にしていますか。×印をつけてください。



- 3. 会話中、あなたはどの程度緊張していましたか？もっとも適当な箇所に×印をつけてください。



- 4. いまの会話で相手に気を遣った、または気疲れした

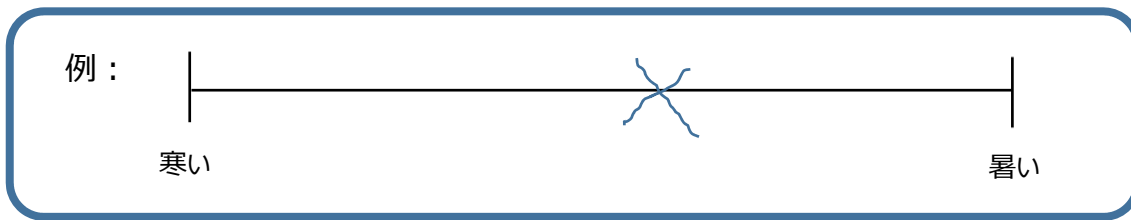


以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に応じてどれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらかといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答してください。

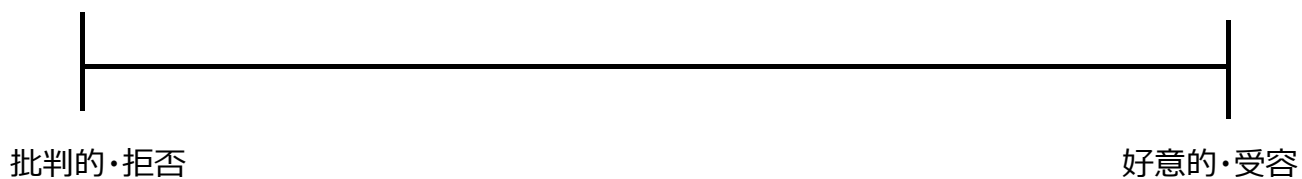
	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. びりびりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

アンケート 6

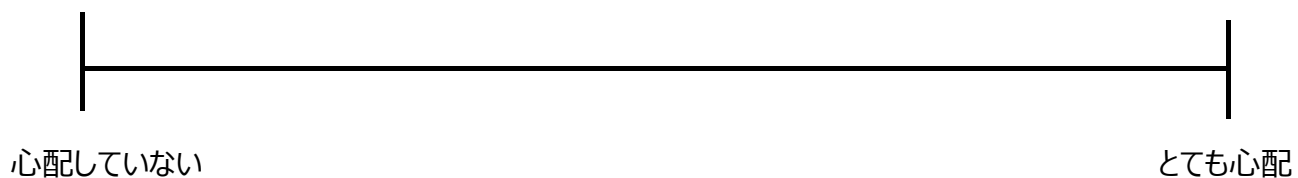
会話②前



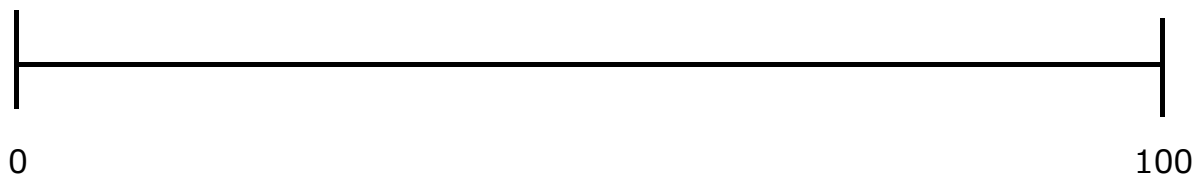
- 1. 次の会話における相手からの対応について、予想されるもっとも適当な箇所に×印をつけてください。



- 2. 次の会話における相手からの対応について、どの程度心配していますか。×印をつけてください。



- 3. いま、あなたはどの程度緊張していますか？もっとも適当な箇所に×印をつけてください。

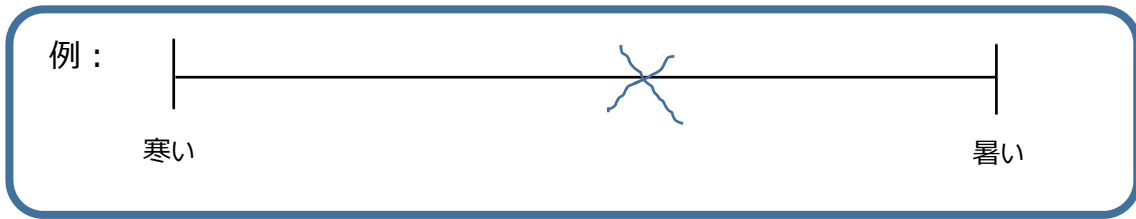


以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に応じてどれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらかといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答してください。

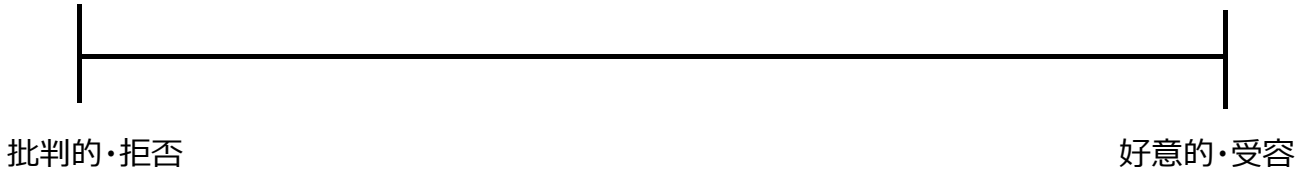
	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. びりびりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

アンケート 7

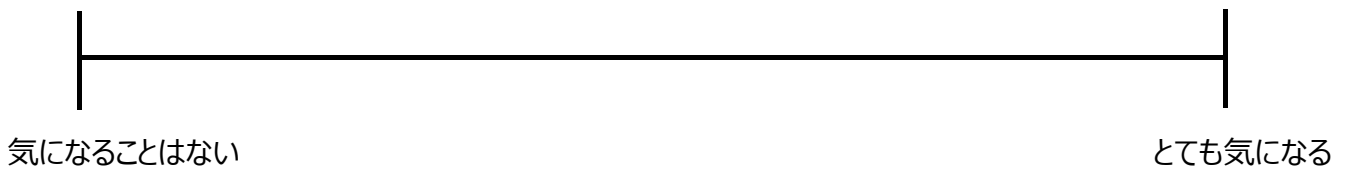
会話②後



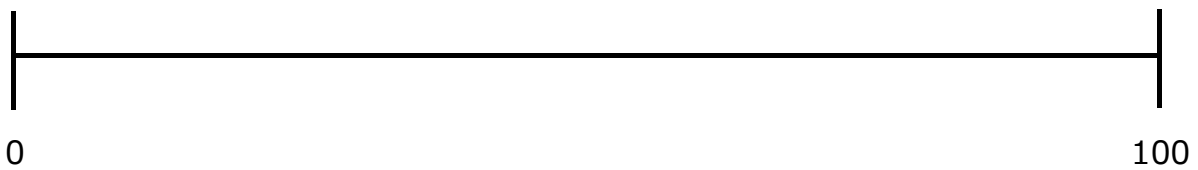
- 1. いまの会話でのペアの方の言葉や態度について、もっとも適当な箇所に×印をつけてください。



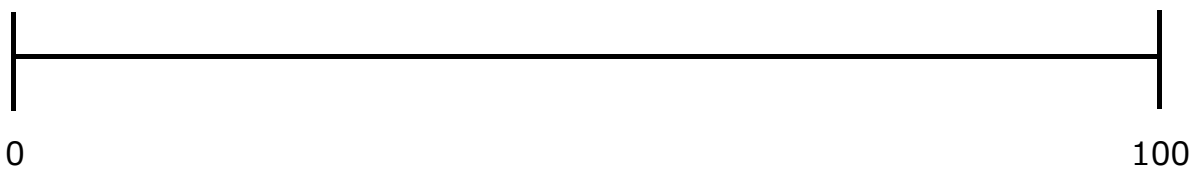
- 2. いまの会話でのペアの方の言葉や態度を、どの程度気にしていますか。×印をつけてください。



- 3. 会話中、あなたはどの程度緊張していましたか？もっとも適当な箇所に×印をつけてください。



- 4. いまの会話で相手に気を遣った、または気疲れした



以下の項目に状態を表す語がいくつか表されています。現在のあなたの気分に応じてどれほどあてはまるか「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. どちらかといえば当てはまらない」、「4. どちらかといえば当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常によく当てはまる」の中から最も適当なものを選び○をつけて回答してください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	当てはまる	非常によく当てはまる
1. 神経質な	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 恐れた	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 興奮した	1	2	3	4	5	6
9. びりびりした	1	2	3	4	5	6
10. 決心した	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. やる気がわいた	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥ずかしい	1	2	3	4	5	6
16. イライラした	1	2	3	4	5	6
17. 興味のある	1	2	3	4	5	6
18. うしろめたい	1	2	3	4	5	6
19. 敵意をもった	1	2	3	4	5	6
20. 注意深い	1	2	3	4	5	6

2回目の会話中、自分が傷つかないために（相手からひどいことを言われなかったために）意識したり工夫した点があればお書きください。

■ 会話の内容について

① 言い回しや言葉遣い

- ・
- ・
- ・

② あいづち

- ・
- ・
- ・

③ 語尾

- ・
- ・
- ・

④ その他

- ・
- ・

■ 視線や表情、身体の動きなど、言葉以外の部分について

① 視線

- ・
- ・
- ・

② 表情

- ・
- ・
- ・

③ ジェスチャーや姿勢など身体の動き

- ・
- ・
- ・

④その他

- ・
- ・

- 1回目の会話で、ペアの方に言われた「あなたの良いところ・好きなところ」についてなるべく具体的に思い出し、書き出してください。

•

•

•

•

•

•

これで終わりです。
ありがとうございました！

No.

この質問票には21の項目があります。
それぞれの項目に含まれる文章をひとつひとつ注意深く読み、それぞれの項目で、
今日を含むこの2週間のあなたの気持ちに最も近い文章をひとつ選び、
選んだ文章の番号を○で囲んでください。

もし、ひとつの項目で同じように当てはまる文章がいくつかある場合は、
番号の大きい方を○で囲んでください。

No.16(睡眠習慣の変化)やNo.18(食欲の変化)を含め、
それぞれの項目で必ずひとつだけ選んでください。

1 悲しさ

- 0 わたしは気が滅入っていない
- 1 しばしば気が滅入る
- 2 いつも気が滅入っている
- 3 とても気が滅入ってつらくて耐えがたい

2 悲観

- 0 将来について悲観していない
- 1 以前よりも将来について悲観的に感じる
- 2 物事が自分にとってうまくいくとは思えない
- 3 将来は絶望的で悪くなるばかりだと思う

3 過去の失敗

- 0 自分を落伍者だとは思わない
- 1 普通の人より失敗が多かったと思う
- 2 人生を振り返ると失敗ばかりを思い出す
- 3 自分は人間として完全に落伍者だと思う

4 喜びの喪失

- 0 自分が楽しいことには以前と同じくらい喜びを感じる
- 1 以前ほど物事を楽しめない
- 2 以前は楽しめたことにもほとんど喜びを感じなくなった
- 3 以前は楽しめたことにもまったく喜びを感じなくなった

5 罪責感

- 0 特に罪の意識はない
- 1 自分のしたことやすべきだったことの多くに罪責感を感じる
- 2 ほとんどいつも罪責感を感じている
- 3 絶えず罪責感を感じている

6 被罰感

- 0 自分が罰を受けているようには感じない
- 1 自分は罰を受けるかもしれないと思う
- 2 自分は罰を受けるだろう
- 3 自分は今罰されていると感じる

7 自己嫌悪

- 0 自分自身に対する意識は以前と変わらない
- 1 自分自身に対して自信をなくした
- 2 自分自身に失望している
- 3 自分自身が嫌でたまらない

8 自己批判

- 0 以前よりも自分自身に批判的ということはない
- 1 以前よりも自分自身に批判的だ
- 2 あらゆる自分の欠点が気になり自分を責めている
- 3 何か悪いことが起こると、全て自分のせいだと思う

9 自殺念慮

- 0 自殺したいと思うことはまったくない
- 1 自殺したいと思うことはあるが、本当にしようとは思わない
- 2 自殺したいと思う
- 3 機会があれば自殺するだろう

10 落涙

- 0 以前よりも涙もろいということはない
- 1 以前より涙もろい
- 2 どんなささいなことにも涙が出る
- 3 泣きたいと感じるのみ涙が出ない

11 激越

- 0 普段以上に落ち着きがなかったり緊張しやす
くはない
- 1 普段より落ち着きがなかったり緊張しやすい
- 2 気持ちが落ち着かずじっとしているのが難しい
- 3 気持ちが落ち着かず絶えず動いたり何かして
いないと気が済まない

12 興味喪失

- 0 他の人や活動に対する関心を失ってはいない
- 1 以前より他の人や物事に対する関心が減った
- 2 他の人や物事への関心がほとんどなくなった
- 3 何事にも興味をもつことが難しい

13 決断力低下

- 0 以前と同じように物事を決断できる
- 1 以前より決断するのが難しくなった
- 2 以前より決断するのがずっと難しくなった
- 3 どんなことを決めるにもひどく苦勞する

14 無価値感

- 0 自分に価値がないとは思わない
- 1 以前ほど自分に価値があり人の役に立てる人間
だと思えない
- 2 他の人に比べて自分は価値がないと思う
- 3 自分はまったく価値がないと思う

15 活力喪失

- 0 以前と同じように活力がある
- 1 以前と比べて活力が減った
- 2 活力が足りなくて十分動けない
- 3 活力がなく何もできない

16 睡眠習慣の変化

- 0 睡眠習慣に変わりはない

- 1a 以前より少し睡眠時間が長い
- 1b 以前より少し睡眠時間が短い

- 2a 以前よりかなり睡眠時間が長い
- 2b 以前よりかなり睡眠時間が短い

- 3a ほとんど一日中寝ている
- 3b 以前より1~2時間早く目がさめて、再び眠れない

17 易刺激性

- 0 普段よりイライラしやすいわけではない
- 1 普段よりイライラしやすい
- 2 普段よりかなりイライラしやすい
- 3 いつもイライラしやすい

18 食欲の変化

- 0 食欲は以前と変わらない

- 1a 以前より少し食欲が落ちた
- 1b 以前より少し食欲が増えた

- 2a 以前よりかなり食欲が落ちた
- 2b 以前よりかなり食欲が増えた

- 3a まったく食欲がなくなった
- 3b いつも何か食べたくてたまらない

19 集中困難

- 0 以前と同じように集中できる
- 1 以前ほどは集中できない
- 2 何事にも長い間集中することは難しい
- 3 何事にも集中できない

20 疲労感

- 0 以前と比べて疲れやすいわけではない
- 1 以前より疲れやすい
- 2 以前ならできた多くのことが疲れてしまってで
きない
- 3 以前ならできたほとんどのことが疲れてしまっ
てできない

21 性欲減退

- 0 性欲は以前と変わらない
- 1 以前ほど性欲がない
- 2 最近めっきり性欲が減退した
- 3 まったく性欲がなくなった

実験へのご協力ありがとうございます

(こちらの紙はお持ち帰りください)

この度は私たちの実験にご協力いただき、誠にありがとうございました。

実験によって気分や体調の変化が起こり、気持ちがふさぎこんでしまったり、落ち着かなくなったりすることがあるかもしれませんが、これらは時間がたつにつれて自然と落ちついていくものですので、ご安心ください。

ただし、気分や体調がすぐれない状態が続くようでしたら、下記の呼吸法を行ってみることをお勧めします。呼吸法はリラクゼーションの1つであり、身体や気分を落ち着かせ、ストレスを緩和する効果を持っています。呼吸法は以下の方法で行います。

- ①身体をしめつけるもの（メガネ、時計、ベルトなど）はできるだけ外すか緩めましょう。
- ②静かで落ち着く場所で、椅子に浅く腰かけるか、仰向けになりましょう。
音楽をかけてもかまいません。
- ③目は開けたままでもよいですが、閉じた方がやりやすいかもしれません。
- ④ゆっくりと鼻から空気を吸い、おなかに空気をためましょう。
肩や胸で呼吸はしないようにしましょう。そのとき、口は閉じておきましょう。
- ⑤おなかの中の空気をゆっくりと口から吐きましょう。
息が苦しい時は、吸うよりも吐く方に集中した方がスムーズに呼吸ができます。
息を吐ききったら、また鼻からゆっくり息を吸っておなかに空気をためましょう。
これをしばらく続けます。（目安）は1～4分程度
- ⑥何も考えず、ただ新鮮な空気が鼻から入り、それが全身に広がることだけを考えてみましょう。
- ⑦終わったらゆっくりと目を開けましょう。

呼吸法を行っても、なお、気分がすぐれない状態が続くようでしたら、

下記の連絡先までご連絡ください。

その他、ご不明な点や研究内容については、遠慮なくお問い合わせください。

早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程 4年 巢山 晴菜

Email: haru_s@akane.waseda.jp